

通昭錄卷之四十



通昭録卷之四十

法令四

- 一 組帳席書(注1)
- 一 御家老組帳席書(注1)
- 吉貴公仰出
- 一 武芸稽古之事
- 一 衣服定
- 一 名遠慮之事
- 一 支配頭江稀々可罷出事
- 一 御家中儉約之事
- 一 出家成之事
- 一 士以下(注3)に対し無礼法外之事
- 一 死罪之士子共之事
- 一 乱心者快気囲出之事
- 一 軽キ士抱者之事
- 一 養子違変之事
- 一 縁與并離別之事
- 一 士以下士に行逢無礼之事
- 一 與分被仰付候事
- 一 諸與并與頭
- 公儀仰渡
- 一 火事場之事
- 一 刀脇差之事
- 一 衣服之事
- 一 月代之事(ましかや)

帽子巾着之事

衣類革帶之事

すふくろ丈まねきの事(注)

江戸御屋敷掟

注1、「序書」カ、都城本「序書」注2、都城本「士に」

\* (二十四行空白)

法令卷之四

組帳席書(注)

注1、「序書」カ、都城本「序書」

一 組頭覚悟之事

一 公義之御仕置付而每度被仰渡趣堅相守、御奉公方無疎意可被勤候、当時之御格式付而は段々被仰渡置候事候間、其旨相守組中之儀可有差引事

注1、都城本「勉」注2、都城本「候」なし

一 学文武芸之儀相励候様連々可申渡候、御奉公方二付(注)而は不時二被仰付御用等も可有之候間、左様之砌無滞様内々之心懸可為肝要事、

付、武具馬具無油断可相調候、不応分限屋作衣類等二至、御

條目之旨無忘却様相守、驕之躰可為無用事、

注1、都城本「二」なし

一 御奉公方之心懸、宜敷家業出精之者於有之は可申出之、悪心不

忠之者又は行跡不宜、惣而諸人之妨罷成者於有之は氣を付、早々被致沙汰事、

注1、都城本「方」なし 注2、都城本「敷」なし 注3、都城本「旨」

一御奉公方致難渋、構虚病候躰之者於有之は可有言上候、且又乱氣之人并乱氣之氣、差有之者親類共入念可申付之、令油断悪事仕出候ハ、親類中可為落度候条、大形無之様可申聞置事、

注1、都城本「の」

一切支丹宗門之儀、公義一統之御大禁候、且又一向宗之儀

御家御禁止之事候間、怪敷儀も於有之は実否共早々可有言上事、

一喧嘩口事入組等有之節は於組中首尾宜様可被相濟候、若於組中

難事濟儀は可有披露、訴訟口事入組等之儀申出候節は、有来通

御法様之書物を以可申出候、以連判荷擔之躰申出儀可為禁制事、

一依咎御誅伐之者又は流罪關所等被仰付候刻、雖為親類縁者無差

図人其場江罷越問敷候、蒙御勘氣候者へ見廻并音信等可為停止

事、

一組中へ死人有之節は早速申出事候間、可被承置候、家督之者死

去之時は己明次第御法様之書物を以繼目之願申出事候条、何そ

子細も無之繼目之願及延引候ハ、名跡被召立問敷候条、時々可

有沙汰事、

一組中向後組頭列以上之人新家二相立候は、御家老直触被仰付事

候間、被得差図当組相除御家老與入候様可被問合事、

但、当時之與頭中も御役被差免候以後は、何れも御家老直触

罷成咎候間、格式不乱様可有沙汰事、

注1、都城本「江」 注2、都城本「衆」

一御城下二而自然出火有之候節ハ、兼而被仰渡置候御掟之趣相守候様可被申渡事、

一組頭直触之格式此節被相定候間、御格式相当人又は直触之人小與二立歸候節共無油断承届、時々被得差図帳面首尾あるへき事、

注1、都城本「節」なし、注2、都城本「とも」

一 小與頭は御馬廻・新番・諸役人二被仰付咎、此節御格式被相定候間、時々代合之儀無混乱様可被致沙汰事、

注1、都城本「新御番」

一 與頭中 御城二而寄合此節被相定候間、組中何角之用事無滞様時々致寄合可有沙汰事、

一 與中前髮取又は半元服之者見分之儀、此節より與頭見分迄二而差免候筋被仰付候間、不相応之儀無之様可被入念事、

一 諸事勤方之儀其外行跡随分心懸、礼儀正敷可仕候、不勤又ハ若

キ者共出合之沙汰不宜も有之由候、以後右通之儀候ハ、被思

召旨も候由、今度與頭御番頭江被仰渡趣も有之候、右通候得は

諸士之儀も随分勤方を出精、互之参会等も作法悪敷儀無之様、

弥以心懸可申候、自然不行跡之人於有之は可及沙汰候条、忘却

不仕就中若キ者共行跡相嗜、稽古事精を出候様親々より可申聞

候、

注1、都城本「心掛」 注2、都城本「礼義等」 注3、都城本「出し」

\*参考史料「島津家歴代制度卷之三（一八四）」（鹿兒島県史料 薩

\*（五行空白）

当時組帳席書<sup>(注1)</sup>

組頭可被心得條々

注1、「序書」カ、都城本「序書」

一公義之御仕置付而、每度被仰渡趣堅相守、御奉公方無疎意可被相勤之、當時之御格式付而は段々被仰渡置事候間、其旨相守組中之儀可有差引事、

一学文武芸之儀、相励候様連々可被申渡候、御奉公付而は不時被仰付御用等も可有之候間、左様之砌無滞様内々之心懸可為肝要事、附、武具馬具無油断可相調候、不応分限屋作衣服等二至、御條目之旨無忘却様相守驕之躰可為無用事、

一御奉公方之心懸、孝行其外勤方宜家業出精者於有之は可被申之、惡心不忠之者又は行跡不宜、惣而諸人之妨罷成者於有之は氣を付、早々可被致沙汰事、

注1、都城本「心掛」注2、都城本「候者」注3、都城本「申出」

一御奉公方致難渋、構虚病候躰之者於有之は可有言上之、且又乱氣之人並乱氣之氣差有之者親類共入念可申付之、令油断惡事仕出候<sup>(注2)</sup>は親類中可為落度之条、大形無之様可被申聞事、

注1、都城本「者は」注2、都城本「候ハ」

一切支丹宗門之儀、公儀一統之御大禁候、且又一向宗儀、御家御禁

止之事候間、怪敷儀も於有之ハ実否共早々可有言上事、

注1、都城本「義」

一喧嘩口事入組等有之節ハ於與中首尾宜様被可相濟候、若於與中難事濟儀は可有披露、訴訟口事入組等之儀申出候節は有来通御法條之書付を以可申出候、以連判荷擔之躰申出儀可為禁制支、

注1、都城本「は(者)」

一依科御誅伐者又は流罪關所等被仰付候刻、雖親類縁者無差凶人其場江罷越間敷候、蒙御勘氣候者へ見廻并音信等可為停止事、

一諸士二男子三男家二而二三代も別立罷在候は、嫡家又ハ二男家跡職無之節、依願自分之家は不相立跡職致相統候儀有之候、此儀家相統之ためにては尤之事候得共、代々別立罷在候家を不相立儀は如何之事候条、向後右躰之者又は被仰付間敷候、其身之代別立候者者又は子孫之内二男三男有之者又は一類之内より致相統者有之候は、其意を跡職に願可申出候、若右類之者も無之家及断絶二事候ハ、代々別立罷在候者二而も跡相統不致候而不叶訳も有之候は、其身之跡を仕居可申候間、相統御免被下度旨願可申出候、尤外城養子二而も願可申と存候者は是又願可申出候、依之御沙汰次第可被仰付候条、可被得其意事、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「ハ」注3、都城本「間鋪」

注4、都城本「の」注5、都城本「二」なし注6、都城本「と(与)も」注7、都城本「依其」

一家督之者相果継目之願及延引申出候儀不宜候間、右躰之者有之候

ハ、與頭中より無油断可被致沙汰候、且又繼目之儀は其子共可被仰付哉、又ハ他之者へ相続可被仰付候哉思召次第之事候処、嫡子之儀はおのつから家相続仕筈と存罷在候儀別而心得違候事、

一 組中之者死人有之節は早速申出事候間、可被承立候家督之者相果、直子へ繼目致遺言書置候ハ、相果候段申出候節、遺言書は追付可差出旨届置、五日中午宛書之親類共より無遅滞與所江法様之通可差出候、何そ子細も無之繼目之願致延引候ハ、名跡被相立間敷候、以御見合被仰付繼目之儀ハ各別ニ候事、

注1、「承置」カ、都城本「承置」注2、都城本「へ」

注3、都城本「は(者)」注4、都城本「二」なし

一 幼少又ハ不意相果候者遺言書は無之筈候間、組所江申出候節、遺言書無之候繼目之儀は、追而相究可願旨且又届置、左候而直子又は親類共之内相応之者究候而無程繼目之願親類共より可申出候事、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「是又」

一 遺言書不依有無、五日中午跡職之願難申出儀候は、何様之訳ニ而差出候儀支有之候段、有筋與頭江無延引可申出候、依其趣御取分可有之候事、

一 直子無之親類又ハ鹿兒島土にも養子可成相応之者無之、家不相立儀難成候ハ、御格式之通外城養子之願可申出候、右願御免之後急に人柄難 相究訳も有之候ハ、月延之願可申出、応其謂何分ニも可被仰渡候事、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「鳴」

一 長々病氣有之候者遺書も不致置、死後親類共より繼目之願申出候共、其身油断之儀候条御取揚有之間敷候、勿論御見合を以被仰付儀は各別候事、

注1、「遺言書」カ、都城本「遺言書」

一 御城下二而自然出火有之候節は、兼而被仰渡置候御控之趣相守候様可被申渡置候事、

一 與中二向後與頭列以上之人新家二相立候ハ、御家老直触被仰付事候間、被差図得当組相除、御家老與二入候様可被問合候事、

但、當時之與頭衆も御役被差免候以後は、何れも御家老直触ニ罷成筈候、其身計與頭以上之御役被仰付候人、御役雖為御免家督内は御家老與二被入置、隠居以後家督之家内ニ可被召入候条、御格式不乱様可有沙汰事、

注1、都城本「被得差図」

一 與頭直触之御格式此節被相定候間、御格式相当之人又は直触之人、小與立歸候儀共無油断承届、時々被得差図帳面可有首尾事、

一 小與頭は御馬廻新御番諸役人ニ被仰付筈、此節御格式被相定候間、時々代合之儀無混乱様ニ可被致沙汰事、

注1、都城本「時々」なし

一 與頭中 御城二而寄合此節被相定候間、組中何角之用事不滞様時々致寄合可有沙汰事、

注1、都城本「二」なし

一與中之諸士角入前髮取願出候は、與頭見分之上御免有之、可然者は名書月番御家老へ差出、追而於敷舞台月番御家老大目附致見分、其上二而御免可申渡候、尤以御見合被仰付候者は格別候事、

注1、都城本「江」注2、都城本「目付」

一角入前髮取御免之段、申渡願人共より御礼申出候節、無行跡并見苦敷様子為仕間敷旨、書物いたさせ可被申候事、  
一諸外城江勤方付、引越居候者之子共并田舎入御暇被下置候者之子共、角入前髮取之願、初而之、御目見相濟勢長ケ相応成者ハ、其所より願出、御家老不及見分可被差免候事、

注1、都城本「は(者)」

一角入前髮取御免已後、與頭不時二致見分、若見苦敷様躰之者又は兼々行跡不宜聞得之者も有之候は、屹ト可被遂披露候事、  
注1、都城本「以後」注2、都城本「兼而之」注3、都城本「屹」

終

\* 関連史料 「島津家歴代制度」卷之三(一八四)、『鹿児島県史料

薩摩藩法令史料集一(一八四)』所収)

\* (十四行空白)

御家老與帳席書

注1、「序書」カ、都城本「序書」

一初条より七ヶ條六與組帳席書同断

注1、「序書」カ、都城本「序書」

一御城下二而自然出火有之候節、兼而被仰渡置候御掟之趣相守候様可被申渡置事、

一家督之者相果、繼目之願及延引申出候儀不宜候間、右躰之者有之候ハ、組中より無油断可致沙汰候、且又繼目之儀は其子共可被仰付候哉、又は他之者江相続可被仰付候哉、  
思召次第之事候処、嫡子之儀はおのつから家相続仕候筈と存罷仕候儀、別而心得違之事、

注1、都城本は平出なし 注2、「罷在」カ、都城本「罷在」

一組中之者死人有之候節ハ早速申出事候間、可被承置候家督之者相果、直子へ繼目致遺言書置候ハ、相果候段申出候節、遺言書は追付可差出旨届置、五日中午に宛書之親類共より無遅滞組所へ法様之通可差出候、何そ子細も無之繼目之願致延引候ハ、名跡被相立間敷候、御見合を以被仰付、繼目之儀は各別二候事、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「江」注3、都城本「鋪」

一幼少又は不意相果候者遺言書無之筈候間、組所江申出候節、遺言書無之候繼目之儀は、追而相究可願出旨是又届置、左候而直子又ハ親類共之内相応之者究候而、無程繼目之願親類共より可申出候事、

注1、都城本「遺言書は(者)」注2、都城本「へ」注3、都城本「は(者)」

一 遺言書不依有無五日中跡職之願難申出儀候ハ、何様之訳ニ而差出候儀支有之候段、有筋與頭へ無延引可申出候、依其趣御取分可有之候事、

注1、都城本「義」

一 長々病氣有之候者遺言書も不致置、死後二親類共より繼目之願申出候共、其身油断之儀候条、御取揚有之間敷候、勿論御見合を以被仰付儀ハ各別候事、

注1、都城本「之」

一 組中二向後組頭列以上之人新家相立候ハ、御家老直触二仰付事候間、被得差図当與相除<sup>(注1)</sup>き御家老與二入候様可被問合事、

但、当時之與頭衆も御役被差免候以後は、何れも御家老直触二罷成筈候間、御格式不乱様可有沙汰事、

注1、都城本「き」なし

一 六與之内より、向後与頭以上之人新家二相立候<sup>(注1)</sup>坎、又ハ與頭以上之御役被仰付候ハ、御家老與帳二可被召入候、尤御役付候而其身計御役之格と被仰付候人ハ其身計御家老與帳二書載、家内之者は本之小與二可被残置候、尤御役御免たりといふとも家督内は御家老與に被入置、隠居以後家督之家内二可被入召候事

注1、都城本「は(者)」

一 直触格之号、宝永四年亥十月より被相定候、左候而右直触格之儀を寄合并と、正徳二年辰十月被相改候、寄合并は與頭格と小番格

之間之格を為被定置事候、尤触流等ハ御家老與之組頭より可相伝候事、

注1、都城本「は(者)」

一 御家老與之内寄合并人数は別冊有之、御家老與帳二冊有之候得共、此節より惣人数一帳二被仰付候、左候而一所持・二所持格・寄合・寄合并之列を合<sup>(注1)</sup>、名書之次第は不構御役家筋格式次第被書載事候事、

注1、「分」カ、都城本「分」

一 其身之家筋二付而御家老與帳二入候人は、與頭并二其外之御役被仰付候而も御家老與之本帳は申間鋪候、尤與頭杯相勤其與帳二書載候儀ハ有来候通可仕候、左候得共御家老與之本帳二も與頭之與帳二も双方へ名書有之筈候間、御役内は諸触事等御家老與は相除、御役之與々二而相伝候様可仕候事、

注1、都城本「二」なし

一 寄合并之内より御番頭被仰付御役御免以後は、御番頭列にて被仰付候御役内相果候は、嫡子之儀は尤御番頭列二而候間、御家老與之本帳可書載候、二男末子之格式は嫡子之介抱内二候ハ先嫡子之名、次に御家老與之帳面二相載置、以来之格式ハ依人品可被相極候事、

注1、都城本「内」なし

一 寄合并之面々御礼果之御目見罷成候節は、御番頭并御番頭列之



二男三男入交(注1)罷成、御目見可仕候、御用人より前御用人御目見仕候席にて御礼可申上候、尤嫡子計(注3)八親同前、御目見可罷出候、二男より以下は罷出不及候、不限御城内於何方も右之次第可相心得候事、

注1、都城本「罷出」注2、都城本「二而」注3、都城本「は(者)」

一諸事付而列を分、其列之相中より進上物又は書付等仕候節(注1)ハ、寄合并人数も寄合并同列之人数計二而列格可仕候、且又御番頭并御番頭列以上之末子之部屋柄より進上物等仕候儀も有之節は、寄合并之同列可相加候事、

但、御番頭以上之御役又は其身独礼之人無役之一所持・一所持格・寄合之人数より進上物仕御祝儀申上候、連名之次第ハ御格式被定置別冊御家老座へ有之、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「は(者)」

注3、都城本「有之候」

一組頭以上之二男分地別立被仰付候節は、與頭之格二は依分地之程又は依人品可被仰付候、其外ハ小番可被仰付由被仰出候、右付而ハ嶋津堅峯江島津中務より高六百石程附属仕筈之由二而別立之願二申出候節、分地之員數付而は、往々與頭格之御奉公ハ可難統事候故、内存をも御聞せ候處、分地之員數ハ右之通候得共、與頭格被仰付儀候ハ、以來之儀ハ相心取立為相勤申覚語之由被申出、其段達 貴御聞候處、格式之儀ハ中務二男之儀候間、直觸格可申付置之由被仰出、此時より直觸格新格二相始候、向後為見合此段記置候事、

注1、都城本「聞七」注2、都城本「相応二」  
注3、都城本「御」なし

一諸士二男三男家二而三代も別立罷在候は、嫡家又は二男家跡職無之節、自分之家を禿致相統候儀有之候、此儀家相統之為二ハ尤之儀候得共、代々別立罷在候家を禿候儀は如何之事候条、向後右躰之者は被仰付間敷候、其身之代に別立候者又は子孫之内二男三男有之者、又ハ一類之内より致相統者有之候ハ、其者を跡職願可申出候、若右類之者も無之家及断絶事候ハ、代々別立罷在候者にても跡相統不致候而不叶訳も有之候ハ、其身之跡を仕居可申候間、相統御免被下度旨願可申出候、尤外城養子二而も願可申と存候者ハ是又願可申出候、依其趣御沙汰次第可被仰付候条、可被得其意候、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「へ」注3、都城本「と(与)も」

一角入前髮取之儀、寄合并より以上之面々は、月番御家老宅江願書可差出候、左候は於御城御家老并大目附致見分相応之人願之通御免之段可申渡事、

注1、都城本「執」注2、都城本「目付」

一角入御免候而前髮取願之儀、六七ヶ月過候而申出候様可申渡候事、  
以上、

吉貴公仰出

一弓馬鎗兵法鉄炮稽古之事

一大小身によらず、若面々弓・馬・鏑、兵法鉄炮之内、得方之儀を致修鍊候様平日稽古可仕候、勿論及争論致立合間敷候、  
一右付而之諸道具結構を好まず、畢竟用方之善悪を専穿鑿仕可相調候、

一鉄炮打之儀、近年は立物小クいたしあたり之数を好候迄之由不可然候、随分達者打習候儀を第一に可致稽古候、

右之趣 御意候、依之御家老中より申渡候趣左二記之、

一馬之儀は馬形宜迄を好不申、足つよく有之候を第一相心得不申儀は、兼而御馬廻之格二不被仰付置ものにて、馬乗候儀心かけ候ものハ、向後可被遊 御覽節は御馬をも被為借、又は致借馬候而成共乗候て罷出候様被仰付儀も可有之候、馬具等美麗を好申儀無用之事、

一鉄炮之儀、偶心懸候ものも近年ハあたり数を好ミ、地中に腰迄堀入台を仕かけ候躰仕打候由、鉄砲之儀ハ別而達者打習不申候得は無其詮事候間、向後ハ立居共達者二打習候儀を専に可心懸候、

注1、都城本「罷出候様被仰付儀も可有之候、馬具等」が脱漏

注2、都城本「は(者)」注3、都城本「達者二」注4、都城本「へ」

注5、都城本「に(爾)」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一八五)」(『鹿児島県史料』)

薩摩藩法令史料集一(一八五)所収

#### 一衣服定之事

一御直士男女共布もめん・日野絹・紬・郡内織之類、晒地加賀絹可用之、屹立候御祝儀等之節、又ハ他国より之御使者可有之節、

為可用之候条、紗綾・羽二重被差免候、医・隠両道は格別候、一番頭列已上之女房娘迄に下着二白小袖・ひちりめん・さや差免候、縫金糸鹿子入衣服之儀、不依誰人堅停止候、

一右外之女中之内、御目見二罷出来候ものハ、白小袖・ひちりめん・さや之下着差免候、

一不依大小身家中之男女衣服、内外共布木綿之外下着帯迄も停止候、

一御連枝方へ被付置候女中之儀は、諸士妻女之衣服に可準候、

一足軽・御小者・奥付足軽・御中間類之一身賦被下候者并寺門前・

社家・町浜之者は、衣服帯迄も布木綿之外用候儀堅停止候、

一百姓之儀、男女共無地・小紋付用之、其外之染一切停止候、

一惣而御直にあらざる女之分は、衣服之染夏冬共に無地又は小紋付に紋所を付可致着候、ちらしもやふ杯之染出し停止候、

一白帷子之儀、女之分は下輩迄も着用御免被成候、

一寺門前・町浜浦人召仕之男、衣服夏冬共無地紋なし、下女之儀ハかた付紋なし可着用候、

注1、都城本「は(者)」注2、「絵」カ、都城本「絵」注3、都城本「以上」注4、都城本「儀は(者)」注5、都城本「者は(者)」

注6、都城本「大身」注7、都城本「江」注8、都城本「もやう」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一八六)」(『鹿児島県史料』)

薩摩藩法令史料集一(一八六)所収

#### 一諸節句衣服定之事

一年頭・月次之 御目見に罷出候諸役人ハ髪斗目着可仕候、無役二而も御一門・一所衆・與頭・御番頭并同列之子共迄はのしめ

着可仕候、乍然小身者は勝手次第たるへく候、右之外はのしめに及ましく候、江戸二而は御馬廻新御番はのしめ着可仕候、

一 上巳・端午・重陽、御役并無役二而も何れも月次御礼之衣服同断可仕候、

但、重陽春之物八八身二而も態用候儀無用候、有合候ハ、格別候、

一 七夕・八朔、御一門・一所衆・與頭・御番頭并同列、且又右面々之嫡子迄は白帷子着可仕候、雖然右之格式二而も当時相勤候御役之品、白帷子不致着格之勤場二而もハ、同役并之衣服可致着用候、與頭・御番頭不相勤候共、御役之格式を與頭・御番頭之格と被仰付候人は、白帷子可致着候、二男三男并格式不被仰付内は白帷子着用致無用へく候、御家老直触格之面々も白帷子着用儀可致無用候、

一 御一門・御家老・若年寄惣而歴々之一族、且又月次御礼罷出候子共二男三男二而も、家来上下御免被成候、右子二而も月次御礼二も不罷出、末々二成候而ハ召列候家来上下御免不被成候、一地頭持之儀八家来上下着せ可申候、子共之儀同家来を召列事候得共、子共儀家来上下御免不被成候、

一 常式毎日之勤道具持せ罷出候人、其身計家来之上下御免被成候、子共之儀召列候家来上下御免不被成候、

一 正月其外道具為持候儀并家来上下着せ召列候儀は、何ぞ御役被仰付候節、御家老直申渡程之人計御免被成候、右之外は御免不被成候、

但、御一門・一所衆之歴々は可為右外候、

注1、都城本「二」注2、都城本「は(者)」注3、都城本「と(与)も」

注4、都城本「まては」注5、都城本「儀は」注6、「候」カ、都城本「候ハ」注7、都城本「勉」注8、都城本「被成御免」

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一八六)」(『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集一(一八六)』所収)

一名遠慮之事

一 国名を付候而も不苦面々、御兄弟衆・御城代・御家老・若御年寄・大目附、

一 百官・関東百官之内を付候而も不苦面々、與頭・御番頭并御番頭嫡子、

一 御兄弟衆・寛陽院様御子・御城代・御家老・若年寄・大目附、同名は官名迄付候格之面々も致遠慮付申ましく候、

一 與頭之儀大勢候間、仲間同名有之候も不及頭候、

一 江戸御老中様并御同格之御方・京都諸司代・大坂御城代・若御年寄之御名八付申間敷候、

一 近国之御大名又は御身近御一門様方之御名は付申間敷候、一 與中之士、自分與頭之名は付申間敷候、前々 御前より為被附置も、自分與頭同名可有之節は其訳可申出候、他與之與頭之名は不遠慮候、

一 支配頭又は同席二相話候役人・上役之名ハ致遠慮付申間敷候、一 外城士之儀も地頭と同名八付申間敷候、

注1、都城本「若年寄・大目付」注2、島津光久 注3、都城本「大目付」注4、都城本「之」注5、「改」カ、都城本「改」注6、

都城本「江」注7、「所司代」カ 注8、都城本「は(者)」注9、都城本「鋪」注10、「不及」カ、都城本「不及」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三（一八七）」（『鹿児島県史料』）

薩摩藩法令史料集一（一八七）」所収

一 無役之面々八七月番御家老宅・與頭宅、又ハ支配有之面々は其支配頭宅へ稀々可罷出事

一 御家老直触之内、無役ニ而罷在候人、無役之地頭持稀々ニは月番之御家老宅江朝五ツ時前ニ罷出可致対面、第一御機嫌之程をも為奉承知候、

一 與中之士無役之面々は「与頭宅へ右之通可罷出候、

一支配有之面々は其支配頭宅へ」右同断可罷出候、

注1、都城本「は（者）」注2、都城本「へ」

注3、「・・・」の文は都城本で補充した脱漏分

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三（一八八）」（『鹿児島県史料』）

薩摩藩法令史料集一（一八八）」所収

一 御家中儉約之事

一 御家中儉約之儀付而毎度被仰渡置趣有之候、然共近年諸士中何れも不勝手ニ成行候間、猶以致欠略往々勝手令相統、御奉公可相勤儀肝要之事情、依之此節被仰出候趣左ニ申渡候、

一 御一門歴々・御城代・御家老・若年寄・大御目附其外重御役之面々、平日供之もの大勢召列候儀可為無用候、他所より之使者杯二出会之節ハ各別候、御城向惣而御奉公方付而大勢寄集候節ハ、挑灯之儀、供中之目印又はしまり之為ニ罷成事候間、左様之節は其相応に有之可然候、供之ものも年頭・諸節句・歳暮其外折目は各別候得共、右ニ準軽方ニ可仕候、

注1、都城本「は（者）」注2、都城本「に（爾）も」

一出火之節は供人数挑灯・高挑灯之儀も、右之趣に可準候、

但、火消方被仰付置候面々は勤之事情間、乍漸勤場之用相達候様可仕候、

注1、都城本「は」なし

一 諸役人鑓持せ候儀は先比被仰渡候、若党召列候儀は御普請奉行・御記録奉行・長崎御附人・高奉行・物奉行・御厩別当・納殿役人・御小納戸役・御供目付・御右筆迄は若党老人ハ召列可申候、不勝手付而召列不申候共不苦候、奉行職之もの其外之役人平生若党召列候儀無用可仕候、年首其外折目之節は各別候、乍然二両人之上は可為無用候、御小姓之儀は御側廻被召仕、大身之ものも有之候間、若党一人召列候儀は可為勝手次第候、御側医師も若党召列候儀勝手次第可仕候、軽キ役人御歩行之格勤仕者且又小番相勤候もの候ニ男杯、若党召列候儀年頭ニ而も可致無用候、

注1、都城本「セ」注2、都城本「先頃」注3、都城本「ハ」

注4、都城本「一人」注5、都城本「は（者）」注6、都城本「者」

注7、都城本「老」注8、都城本「之」注9、都城本「と（与）も」

注1、都城本「は（者）」

一小番相勤候面々、平日若党召列候儀ハ可為心次第候、

一 衣服之儀、此程被仰渡候通相守、連々は綺羅かましき躰致間敷候、御目通ニ罷出候とても弥最前被仰渡候通、もめん衣服可致

着用、惣而徒費無之様可相心得候、

一家督元服婚礼其外屹立候祝之節、料理之儀以前被定置候趣を以、猶又分限相応よりも輕可仕候、屹立候祝之節は先首尾能一通相仕廻、不及長座筭之御格式も有之事候間、以其心得早々祝可相濟候、

一婚礼之取立置諸道具等、近年華麗二成立不可然事候間、大身二而も物入之結構可為無用候、差当り用物之外調置之諸物ハ費之事候間、可致其考候、勿論至末々は随分輕相調、不相応之結構堅可為無用候、

注1、都城本「と(与)も」注2、都城本「之」注3、都城本「は(者)」注4、都城本「皆」

一右式祝之節、互之祝物取替之儀も品迄二輕ク可仕候、雖為大身重キ道具等引出物に遣候儀令禁止候、

注1、都城本「ク」なし注2、都城本「二」

一饒別・土産之品、親子兄弟之外ハ兼而停止被仰付置事候間、弥其旨相守成程可仕候、

一女性供廻之儀ハ取分可有減少候、御奉行相勤之面々二而も諸式減少之事候得は、内証之儀は引替随分可有減少候、

注1、「奉公」カ、都城本「奉公」

一大身之妻女供之女乗物猥乗せましく候、供女乗物にのせ来候人にて、不晴立節ハ供乗物差扣候方に相心得可然候、至末々候而も御直之人二而も乗物致無用、相成程ハ歩二而可致徘徊候、

注1、都城本「セ」注2、都城本「と(与)も」注3、都城本「は(者)」

一大身妻女二而も向後前繪乗物相調候儀令停止候、従前々持合候ハ、夫限二可用之候、拵置候ハ、あしろぬり・星釘打、其外御座包已下相応二輕可相調候、

注1、「蒔絵」カ、都城本「蒔絵」

一女性衣服之儀も此程被仰渡置候間、弥以龜相可相調候、

一吊日数之儀、大身小身共二一日執行可仕候、出家人数は吊之恰好次第輕可致供養候、惣而仏事吊等之儀は施主之実儀第一二致事候得は、名聞迄を存、輕薄之莊嚴は無益之事候間、質朴之志可為肝要候事、

注1、都城本「候」なし

一布施物之儀、導師へ青銅百疋を限、夫より已下次第身上相応輕可遣候、吊之料理猶以及結構間敷候、

一香奠は大身小身共二青銅百疋を限、夫より以下段々可遣候、

注1、都城本「限り」

一石塔之儀、先年被相定置候間、御定之通弥可相調候、此段も施主之実儀第一候得は、分限不相応之儀は却而不宜候間、結構之仕立可為停止候、

注1、都城本「通り」

一音信・贈答・振廻并饒別・土産等之儀、被定置外無用可仕之旨、

従前々被仰渡置候処、頃日緩為罷成由候、弥以御定之趣を相守候様にと此節被仰渡趣有之候、然共従前々被仰渡候趣難取覚、紛敷儀も候は如何候、右躰之儀一切無用仕、茶・たはこ之類二而相済置、無據節は成程軽キ料理を出候様相心得可然候、

注1、都城本「仕」なし 注2、都城本「き」

一 祖父母・両親共・兄弟・姉妹・舅姑・聾・孫致死去、中陰法事致執行候節、香奠贈候、

注1、「子共」カ、都城本「子共」

一 忌中之者可有之節、別而無據訳二候ハ、人二より其時宜次第品物遣候、

右式行分限より、別而些少二見合、志迄遣候分ハ心次第苦間敷候、尤可成程ハ品物不遣方二可有之候、

一 地頭所又ハ在所なと之到来物・手作之野菜類又は態と不用品少分二見合相贈候儀苦間敷候、

注1、都城本「に(爾)」 注2、都城本「は(者)」

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一八九)」(『鹿児島史料 薩摩藩法令史料集一(一八九)』所収)

### 一 出家成之事

一 御直士之子共は二男より御免被成候、

一家来之者は主人心次第、嫡子二而も御免罷成候、

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九〇)」(『鹿児島史料 薩摩藩法令史料集一(一九〇)』所収)

一 士以下之者、士に對し無礼法外之仕形二付而候事

一 士以下之もの、士に對し無礼法外等候仕形有之、士より咎目候付而刀・脇差を抜かけ、其外急に讐を可成といたし候付而打果候儀有之節は、御詮儀之上其段於紛なきは先例通打捨候分二而士二は御構有間敷候、士方二も不事足所有之候ハ、勿論其訳に應じ御咎目可被仰付候、

注1、都城本「付て」 注2、都城本「無紛」 注3、都城本「之通」  
注4、都城本「鋪」 注5、都城本「二」

一 士に對し無礼法外等之儀仕候ハ、其主人又は支配頭へ其訳急度可申届候、急二讐を可成程之儀無之節、楚忽に打捨申間敷候、右之差別無弁楚忽に打捨候ハ、急度其咎可被仰付事、

注1、都城本「鋪」

一 士に對し士以下之もの無礼法外等之仕形無之様にとの義ハ、従前々被仰渡置候処、下々之者緩せに存候故、時々事立候儀有之候条、弥以慎仕候様主人又は支配頭より兼而稠敷可申付候、士に對し已下之者致慮外候付、士方より其訳申届候ハ、其者之主人又ハ支配頭より相糺何分二も其料可申付旨被仰出候、

注1、都城本「者」 注2、都城本「は(者)」 注3、都城本「せに」  
注4、「都城本「對シ」」 注5、「其料」カ、都城本「其料」

一 士に對し下々之者より急に讐を可成と企候節ハ格別候、無礼一通之儀は其主人又ハ支配頭へ申届、何様二も其仕形相応二可処事候処、何分之心遣も無之、殊二手にも不立下々を相手之様心

得早速打果候儀、却而士二ハ不相応之事候間、向後は右 仰出之趣を可相守候、末々之者候は主人又ハ支配頭より右之趣兼々稠敷可申付置旨、是又被仰出候、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「に(耳)」

注3、都城本「に(爾)ハ」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九二)」(『鹿児島県史料』)

薩摩藩法令史料集一(一九二)所収

一士之非仕形所行付而死罪被仰付候者子共之事

一此以後士にハ不被仰付之旨被仰出、西九月廿五日其趣一通申渡置候、右式死罪被仰付候者之子共之儀ハ、其親類方二而親類札を取置、其者共之儀後年相応之御奉公可相勤器量有之、其段願出候ハ、其節吟味之上、願之通右之格式之御奉公仕候儀御免可被遊由被 仰出候、尤子共右式に被仰付儀候得は、家内二罷在兄弟共之儀も右格式二其親類方之親類札を取置、後年御奉公願之儀は右子共同前可有之候、左候而御奉公器量相応之者向後願出旨有之節は逐吟味可申候、

注1、都城本「者共儀」注2、都城本「へ之」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九二)」(『鹿児島県史料』)

薩摩藩法令史料集一(一九二)所収

一乱心者快気仕困出之事

一親類・近所之者証拠相立申出候得共、寸切と快気不仕候而も親兄弟歎をもたしかたく証拠相立儀も可有之由、且又病氣致再発悪事出来候而も証拠人二何ぞ御咎目口口、依之輕存証拠相立儀

候得は不可然事候、若致再発何様之儀も仕出候ハ、応様子証拠人二も急度可被仰付候間、向後能々入念細密に相糺候上、平生不相替致快気候と身及候ハ、可致継書候、右之趣與頭中承立、與中之面々江は寄々申伝候様と申渡置候、

注1、都城本「候」注2、両本とも空白、「無之カ」注3、都城本「存し」

\*参考史料 「島津家歴代制度」卷之三(一九三)」(『鹿児島県史料』)

薩摩藩法令史料集一(一九三)所収

一輕キ御直士其外不依何者譜代之家来二あらざるものを抱候而召仕様之事

一輕キ鹿児島士并外城衆中其外何者にても、譜代之家来にあらざる者一節抱候而召仕候儀有之候処、其元永代之家来にてハ無之と存心底有之候付、抱主より申付候儀を不相守致気候候もの多々有之由候、一朝一夕とても致隨身候へは、主従之儀は不遁事候間、勿論抱主より申付候儀堅固相守、惣而主従之礼義を不亂、譜代之家来同前可相勤候、

注1、都城本「ハ」注2、都城本「勉」

一家中奉公いたし候士は何れも不幸付而之儀候得は、諸事勤方誰人にてても相替堅固相勤、一度御直之御奉公を可相勤とこそはけミ可申事候処、其儀を不存、元は士にて永代之家来二而ハ無之と申事のミを心底にさしはさみ罷在、却而気候をいたし、抱主より申付候儀をも致大形、剩主人之供いたし御供先下馬先などの下知をも不相守もの有之由、不届至極候、

注1、都城本「勉」注2、「二而は(者)」注3、都城本「者」

一 鹿兒島士外城衆中外之抱者共之儀も、永代之家来二而無之と存候心底故、右同断致氣隨之由、不届き至極候、

注1、都城本「嶋」 注2、都城本「候」

一 右通之者、抱主二対しあたをなし候者有之候ハ、永代之家来より主人にあたをなし候同前に、類中之者迄も重科可被仰付候、  
一 一朝一夕二而も致隨身扶助を受候者ハ勿論、扶助を不<sub>レ</sub>受一旦為見馴隨身いたすの契約候上は、主從之<sub>レ</sub>礼儀可<sub>レ</sub>乱道理無之、尤惣而之<sub>レ</sub>儀家来格式不<sub>レ</sub>致候而不<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>筈候処、其旨を不<sub>レ</sub>存致氣候、主從之<sub>レ</sub>礼儀を乱し、不<sub>レ</sub>謂無礼之働なといたすものあらず、抱主より永代之家来同前に可<sub>レ</sub>申付候、無<sub>レ</sub>惣儀付打捨候而も御構無之候、

注1、都城本「は(者)」 注2、都城本「家来之」 注3、都城本「は(波)」

一 右之趣、末々者迄も不洩様時々申聞置へく候、<sub>様</sub>様之儀一旦舐渡候而も、末々之者致忘却候得は無<sub>レ</sub>註事候間、向後は召抱候節之手形に右之趣相調可<sub>レ</sub>申候、

注1、都城本「今様」

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九四)」(『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集一(一九四)』所収)

#### 一 養子違変之事

右養子罷成致家督候者不<sub>レ</sub>縁付違変之儀、今迄は養父方家断絶に無<sub>レ</sub>構致違変来候得共、向後は不<sub>レ</sub>致違変候而不<sub>レ</sub>叶<sub>レ</sub>訳有之候節は、<sub>家督</sub>家督相統之ものを見立其跡に仕すへ置、其身は隱居之願可<sub>レ</sub>申出

候、其以後依申分は本家に立歸候様二も可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付候事、

注1、都城本「者を(越)」

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九五)」(『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集一(一九五)』所収)

#### 一 縁與并離別之事

右縁與之儀、急度申出候人又は願申出二不及人、幼稚之内より内々二而致契約置者有之候縁與、はやく取與之儀不入事候、且又頃日女房致離別候者多々有之不宜候間、向後左様無之様右之心得を以、寄々可<sub>レ</sub>申通旨御沙汰有之候事、

\* 参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九六)」(『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集一(一九六)』所収)

一 士以下之者、途中二而士二行逢候節無礼之仕形於有之は、<sub>籠込</sub>籠込又は路次にさらさせ又は手鎖可<sub>レ</sub>申付事

注1、都城本「ハ」

一 鹿兒島并諸外城士以下之者、士に行逢候節無礼有之、於途中不致下馬罷通、又は荷馬を口付なしに遣し、<sub>旁氣</sub>旁氣候二成仕形之もの有之候、惣而いんきん可<sub>レ</sub>致旨先年より段々申渡候得共、遂而不相守候間、向後右躰之者於有之は擲之、依其仕形牢込申付、又は一旦路次にさらさせ、又ハ手鎖可<sub>レ</sub>申付候、

注1、都城本「二」なし 注2、都城本「者」 注3、都城本「ハ」  
注4、都城本「は(者)」



一士にても下臈同前之為躰二而罷在候節、士に行逢候時ハ下臈同前可致慇懃、其身士と存下臈之躰二而罷在候節も致無礼候ハ、是又可及沙汰候、

右之趣得其意堅可相守、就途中之儀は他国之者も罷通候処、高下之無差別、風俗は御仕置届さる筋相見得、別而不宜事候故、毎々其旨申渡候得共、遂而相守らず別而不宜候間、未々まで人別申渡、支配頭よりは折々可致其沙汰候、不時見分之もの可差廻候間、聊緩せに存間鋪候、

注1、都城本「は(者)」注2、都城本「とも」注3、都城本「緩かせに」

\*参考史料 「島津家歴代制度卷之三(一九七)」(『鹿兒島県史料 薩摩藩法令史料集一(一九七)』所収)

#### 與分被仰付候事

一鹿兒島中與之人数方々入交候付、此節被相改最寄を以與分被仰付候、方角限被仰付候儀ハ御触流之通達無滞為にも候間、與中に相伝候儀無遅々可次渡事、

一時々被仰渡御掟之趣、無違背可相守候事、

一切支丹宗・一向宗、弥以稠敷被制禁候条、万一怪者も於有之は可遂言上候、

一御奉公難渋ケ間敷申出儀令停止候、

一口事沙汰、先與中二而可相濟候、與中之捌二而難渋儀は可有披露候、惣而結党候儀一切令停止候、

一志不宜者又は諸人之妨罷成者於有之は可申出候、

一依科御仕置被仰付候者有之刻、雖為親類無御差図面々其場へ致

#### 推參間鋪候、

一與中之死人は早速與頭へ申出、追而之儀御法之通可申出候、

右與分二付御掟之儀、委細は追而可被仰付候、與中之面々申合諸事首尾能可仕候、内々不宜儀有之節令大形候故、事立候儀も致到来候間、令油断大破成立候は御詮議之上、與中迄も其咎可被仰付候、組頭小頭又は與中へ無礼不熟之者於有之は可被行嚴科候、

宝永二年四月廿八日

注1、都城本「限二」注2、「は(者)」注3、都城本「二も」注4、都城本「ハ」注5、都城本「敷」

#### 御家老與并諸與之事

一合士人躰二千九百二十五人、

右與合之儀、宝永二十年之比始而被仰出、與十番外二、御家老與・寺社家諸座與十六與有之、以上二十六與二而候、其以後六與并御家老與一與二被召成、寺社家諸座與二而罷在候士は六與御家老與之内二被召入、其外之者諸座付二而被召置候、右最初與頭被仰付候人数左之通、

一番 島津安芸久雄 新納四郎久辰

二番 島津市正久広 佐多又四郎久孝

三番 桂又十郎忠知 吉利下総忠張

四番 島津左近久守 樺山又九郎久広

五番 町田出羽忠尚 種子嶋左近忠時

六番 伊集院源助久朝 島津美作久基

七番 伊集院右衛門久国 川上上野久運

八番 祢寝七郎重永 川上將監久將

九番 鎌田又七郎正勝 入来院伯耆重高

十番 伊勢兵部貞昭 島津中務久茂

御家老與島津彈正久慶 島津図書久通

注1、「寛永」カ、都城本「寛永」

\* 関連史料 「島津家歴代制度卷之二（一一五）」（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集一（二二五）』所収）

一 御家老與人躰之儀、宝永五年より御城代・御家老・若年寄・大御目附、其外一所持并一所持格・寄合・寄合并迄二被召成、最前御家老與二被召入置候諸士之儀は、一番與・三番與・六番與二被召成候、尤當時六與之與頭被仰付置候面々は、其與々二而御触等有之候付而相除候、且又御家老與之儀、前方は與頭兩人被仰付置候得共、宝永七年正月より御家老中練廻承之候事、

御家老與所御家老宅練廻一月宛被相定候処、明和七年より御城内鷲之間末江御家老與所被相立、筆者兩人相勤與方月番御家老は家来一人ツゝ相勤候筋被仰渡候、

注1、都城本「与」 注2、都城本「とも」 注3、都城本「衆」  
注4、都城本「勉」

覚

一 火事有之節、其場へ狼に不可罷越之旨、此以前より雖被仰出之、頃日人おほく相集之由其間有之候間、役人之外一切火事近所江不可参事、

一 火事見分に遣之輩は、其場迄不参遠所より見届之、早速可被帰、

とひ口不可持参事、

一 火本近所之辻々に用事なくして有之輩は可召捕之旨、両町奉行江被仰付候条、兼々下々に可申付事、

以上、

丑二月 日

注1、都城本「罷歸」

天下御禁止

一 火事喧嘩之場江参候事、

一 刀式尺八寸以上、中脇差は壹尺八寸以上之事、付、色鞘銀之角鏢之事、

一 縷子・縷珠・天鷲絨・緞子之類、歩・若党、或襟袖縁或袴に仕事、付、小者・中間、上下帯絹紬之事、

注1、ビロード

一 右同断之者、頭なてつけ、付、うしろさかりにさかやきいたす事、

正保二年九月九日

従公義異様之躰就被仰出禁止

一 一かちほし毛きんちやく之事、

一 たんたら筋之衣類之事、付、革帯之事、

一 刀ものすふくろの事、付、丈まねきの事、

右之外にも目に立候儀仕間鋪候、此中も公儀御目付衆異様之者被捕御法度之御扱有之候間、恒其心得可仕者也、

慶安三年 寅五月廿一日

注1、都城本「御禁止」 注2、都城本「ほふし」

掟

一諸士就私用御屋敷外江罷出候節、一月二直札二湯札二に被相定之候条、御定之外外方江不罷出様二相心得、右之札数二而用事可相達之、依時宜直札申受候以後無據儀有之、不依昼夜御門外へ不罷出候而不叶儀候ハ、御用人へ相付可申出之、用事之旨趣により令免許之事、

注1、都城本「江」 注2、都城本「候」

一直札并湯札申受候節、且又可相納砌は自身罷出可致首尾、刻限之儀は直札は暮六時限、湯札ハ可為昼九時限、每暮御門番札之改有之管候条、御定之刻限過迄相残札於有之は、御門番之者より横目へ差出候様申渡候間、可得其意事

注1、都城本「限り」 注2、都城本「は(者)」 注3、都城本「江」

一諸士御屋鋪外へ一宿并御定之刻限より遅成御屋鋪へ入来面々於有之は、或寺領或逼塞・遠慮・過料、依其時宜段々二可有之候、且又御門出入札、或おとし或損或借札或御門番所にて失札・損札於有之は、此儀も段々過料有之候、士以下之者も可為同断之条、可得其意事、

注1、都城本「敷」 注2、都城本「候」

一無礼二被仰付面々も御屋鋪外へ罷出候砌ハ、御定之刻限二罷歸候様可仕候、用事付而刻限相違可有之節は、其折御用人へ可申達之、

支配中は其頭へ可相断候、且又居付其外毎度外方へ不依何付不罷出候而不叶面々は、兼而其旨申出御免之上御門可致出入候事、

注1、都城本「敷」 注2、都城本「断」 注3、都城本「江」  
注4、都城本「何時」

一面立候人々、其外にも御用可有之人は達遺聞御暇被下候間、御門出入之儀も御掟之趣に心し可致其心得候事、

右之趣堅固可相守之、違背之輩於有之は可及沙汰者也、

元禄三年六月廿七日

右衛門  
大学

注1、都城本「貫聞」 注2、都城本「致」

掟

一公儀御法度別札之趣、謹而可相守之事、

一飲酒之儀猥無之様可相慎、且又遊女狂之儀従前々御大禁之條、違背之人於有之は急度曲事可被仰付候間、可得其意事、

一出火有之節、兼而被 仰渡置候賦之通、役目之儀堅固二可相勤、右牀之御奉公肝要之事候条專可心掛、大形存不勤之人於有之は可及沙汰事、

注1、都城本「勉」

一諸役人之面々、堅固役目可相勤之、諸事徒之費無之様可心掛儀可為肝要、尤御為宜方見及之儀於有之は無遠慮可申出之、附々之人私曲有之者は可遂披露、右牀之悪意有之候輩、奉行人乍存知令猶予儀於有之は奉行人同意之可為御沙汰之條可得其意、且又役目付

賄賂之進物令受用儀可為禁止事、

一 御家中衰微之時節付而、別而御簡略被 仰付儀候処、其旨をも致忘却、或は衣食之費、或遊興等二致失墜儀不可然候間、内々之儀は諸事用儉約驕<sup>ケ</sup>間敷儀仕間敷事、

一面々、長屋火廻無油断可申付事、

一 途中二而欠落者見逢候共、卒爾二不可捕之、當時之主人を問極、其所へ召列此方欠落者之通髓二届置、其旨可令披露、主人無之者は宿主江可相断事、

一 遊山見物猥に仕間敷候、無用之処へ令徘徊事を於仕出は、及御沙汰曲事可被仰付候事、

注1、都城本「候」なし

一 諸事御規模之儀は、御国元吟味之上被 仰付事候処、詰中之面々申合毎度及訴訟儀不可然候、向後不差立訴訟申出候共、御用人被請付間鋪之条可存其旨、支配付之面々向後訴訟申出候節は、奉行手前二而遂吟味、不応道理儀於有之は抑留之、猥取持於令披露は可為不勘事、

注1、都城本「は(老)」なし 注2、都城本「敷」 注3、都城本「候」

一 御門出入之儀、可随別札之趣、札申受相納儀<sup>(在)</sup>二付而、私二令内証於致聊爾<sup>(わようじ)</sup>は可有御沙汰事、

注1、都城本「調」

一 於御番所高雜談、惣而無沙法<sup>(なしほう)</sup>之為躰仕間敷候、御家人御通之節被成御礼候ハ、成程応懃謹而可罷居事、

注1、都城本「沙汰」

一 於御屋形中基・将基<sup>(在)</sup>・双六等之盤上仕間鋪事、付、御屋敷中之長屋外向二間得候処二而、小歌・三味線可為停止事、

注1、「基」カ 注2、「将棋」カ

一 互之振舞・音信・贈答之儀付而は、仰渡之趣有之候間、可相守其旨事、

一 召仕之者、無作法無之様常々堅固可申付、若違輩之族有之は主人之可為油断、<sup>(在)</sup>口来之者主人之不用下知気任之者於有之は、段々被仰付様候可有之候間、可遂披露、兼々緩に有之到其期打果儀楚忽之至候事、

注1、「家」カ、都城本「家」来 注2、都城本「も(茂)」

一 御当地罷立候節、御国許より召列候下人跡に不可残置、若無據子細有之におゐてハ、其断申出可請差凶事、

右条々堅固可相守之、若違背之輩於有之は可及沙汰者也、

元禄三年六月廿七日

右衛門  
大 学

條々

一 去ル巳年被 仰出候は、御家中<sup>(在)</sup>之面々徒狂之事は勿論、惣而遊山ケ間敷儀、自前々御制禁之処漸々無沙汰成立、猥外方へ罷出致遊山、剩傾城町へも參者共多々為有之由被及聞召不届深重二被思召候、自今以後右躰之無沙法皆而無之様堅可申<sup>(在)</sup>付、其上於相背輩は為懲急度曲事」可被仰付旨 上意候、此旨各謹而奉承知此節之儀、

弥相嗜御奉公可相勤事、付、於長屋乱舞<sup>ケ</sup>間敷遊興自前々御禁止之間、<sup>(注5)</sup>可得其意事、<sup>(注6)</sup>

注1、都城本「家老中」注2、都城本「猥に(爾)」注3、都城本「被聞召及不屈」注4、都城本「思召上」注5、「・・・」の文は都城本で補充した脱漏分注6、都城本「候」注7、都城本「候」

通昭録卷之

\* (十三行空白)

甲斐

一御屋鋪<sup>(注1)</sup>中頃日物每華麗成立、内々徒之費有之由不可然儀候、内証参会互之贈答専用、儉約公界向綺羅能相調候可掛心事、付、諸士家来共、分際不似合致驕無作法有之故、漸々行廻御下国前にいたり、或盜或致欠落者多々有之候、畢竟主人申付大方故如此候間、連々入念稠敷可申付事、

注1、都城本「敷」

一御屋鋪<sup>(注1)</sup>御門外へ罷出儀、如先規一月四度、但、湯札三直札一に申付候、勿論申受相納候作法之儀、掟書之趣に随ふへし、普請方御屋鋪<sup>(注1)</sup>之儀は跡々より出入之札無之候、雖然当御屋鋪<sup>(注1)</sup>之者必御作法、猥罷出へからざる様に可相嗜事、

注1、都城本「敷」

一御掟之趣於相背人は、横目之面々見立聞立少も無用舎、毎度申出候様に稠敷申渡候条、可有其覚悟事、

一或御供御使、或御番替合之節、刻限無相違可罷出、惣而傍輩中必並相交、聊不可失士道之本意事、

右條々堅固可相守、若緩之儀於有之は、急度可及沙汰者也、

未八月五日

藏人



通昭錄卷之四十一





通昭録卷之四十一

公義法令三

- 一 主人殺親類罪科 (二)
- 一 御科者親類遠慮 (二)
- 一 追放輕重並改易追扨 (三)
- 一 死罪除日並除月 (四)
- 一 乘輿願 (五)
- 一 陪臣乗物駕籠願 (六)
- 一 一切支丹宗門改証文 (七)
- 一 鉄炮改証文 (八)
- 一 評定所御預人式法 (九)
- 一 中川八郎左衛門切腹次第 (二〇)
- 一 渡辺半左衛門御預次第 (二一)
- 一 曾根平兵衛御仕置次第 (二二)
- 一 日光御社參御行列 (二三)
- 一 日光御名代 (二四)
- 一 日光御成今市御番 (二五)
- 一 音信贈答衣服器物等之事 (二六)
- 一 御精進日江戸出府 (二七)
- 一 産穢忌中書狀 (二八)
- 一 御暇給出足延引 (二九)
- 一 御仮養子之事 (三〇)
- 一 御廻勤ヲ御家老御使者之事 (三一)
- 一 御入輿付御家老二人江戸詰之事 (三二)

一 江戸往還供廻供鏝供馬 (二三)

一 石塔場定 (二四)

一 御忌掛之事 (二五)

一 御代替誓詞 (二六)

一 御城江女中使 (二七)

一 御外城有無日 (二八)

公義法令三

(一) 主人殺親類罪科

主人殺親類罪科

一 貞享元年甲子極月、主人殺之御仕置付而、親類罪科之儀、御老中

御列座ニ而被相窺之、御相談之上被仰渡御書付、

主人殺者之親類罪科之覺

父母 女房 子男女共 兄弟姉妹共 繼父 甥 從父兄弟男計

子十二月廿六日

(二) 御科者親類遠慮

御科被仰付者之親類遠慮之覺

一 死罪ハ 忌掛り候親類者御番遠慮、

  賀・舅・小舅者御目見遠慮、

一 遠流ハ 父子・兄弟・伯叔父・甥者御番遠慮、\*

一 御改易并御預ケ 遠流ニ同シ、

一 閉門ハ 父子・兄弟御番遠慮、

  伯叔父・甥御目見遠慮、

一 逼塞八 父子御目見遠慮、

(三) 追放輕重並改易追放

追放之面々

重八 関東八ヶ国 京都 大坂 堺津

奈良 伏見 長崎 大津 東海道筋

木曾路筋 駿州 甲州 尾州

紀州

輕八 江戸十里四方 京都 大坂 大津 東海道

日光并海道

少輕八 江戸十里四方 京都 大坂 堺津 奈良

伏見 日光並海道 長崎大津 東海道

甲府 名護屋 和歌山 水戸

宝永八年卯四月、秋元但馬守様より江戸町奉行へ被成御渡候御書付

覚

一 重追放 一中追放 一 輕追放 一 江戸何里四方追放 一 江戸追放

右之通、五段二候哉、其所々書付可被出候事、

一 改易

右、追放二者違之訳可被出事、

一 追放之者、刀・脇指何方二而相渡遣候哉之事、

一 追放私、追放次第如何様二相分候哉之事、

以上

秋元但馬守様江戸町奉行衆より被差出書付之写

覚

重追放

関東八ヶ国 武蔵・相州・上野・下野・安房・上総・下総・常陸

中追放

江戸十里四方 京 大坂 堺 東海道

日光 日光海道筋 名護屋 和歌山 水戸

輕追放

江戸十里四方 京 大坂 東海道 日光 日光海道筋

江戸追放

右之通、六年以前戊八月廿四日被仰渡、四段二分御座候、江戸五

里四方追放申付候儀毛御座候、

一 改易

右改易者、申渡候得者宿へ罷歸、早速屋敷引払申候、先々罷在候場所御構無御座候、追放八、宿へ不罷歸、直二常磐橋・呉服橋外二而追放シ、御構之場所輕重御座候、改易トハ違申候、

一 追放、追放私誤違申候儀ハ、追放八右之通御構之場所輕重相立候、

追放八先一所を追放申候迄二而御座候、刀・脇指も渡遣申候、

丹波遠江守

松野壹岐守\*

坪内能登守

享保十乙巳年六月御定追放之事、

一 重御追放 武蔵 相模 上野 下野 安房 上総

下総 常陸 山城 摂津 堺 奈良

長崎 東海道筋 木曾路筋 駿河 尾張\* 紀伊

中御追放 江戸十里四方 京 大坂 堺 奈良 伏見

長崎 東海道筋 木曾路筋 日光  
 日光海道 名護屋 和歌山 水戸  
 輕御追放 江戸十里四方 京 大坂 東海道筋 日光  
 日光海道  
 江戸御追放 江戸十里四方

(四) 死罪除日並除月

正徳三年巳五月十六日三奉行江秋元但馬守様被仰渡候、死罪除月日  
 一 死罪除日

朔日 二日八月・十二月計除可申候 三日七月計除可申候\*  
 四日 五日八月計除可申候 六日二月計除可申候 七日 九日  
 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日  
 十七日 十八日 十九日 廿日廿一日 六月十月計、廿二日  
 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 晦日六月  
 計除可申候\*

死罪除月

正月\* 二月 四月 五月 九月 十月

右之通可相心得候、

御精進日前日茂死罪之外改易・追放等苦ケ間敷候、  
 但十六日ハ改易・追放茂可相除候、以上、

(五) 乘輿願

乘輿願証状

一一筆致啓上候、拙者儀当何年何歳罷成候、日本之神偽二而無御座候、依之乗物御断申上候、恐惶謹言、

年号月日

御目付中不殘殿書

名判

表書之通紛無御座候、我等<sup>組二付、支配二付</sup>裏判如斯御座候、以上、

月日

右者、致付紙<sup>紙</sup>二折、如書状片面二書留候様可認之、若御目付中大勢二而片面難書留時は裏へ引廻し可相認之、

(六) 陪從乗物駕籠願

陪臣乗物駕籠願之覚

一行年五十歳以後願之、但家老ハ乗物其外ハ駕籠免許也、

一 右願之事ハ、主人書付<sup>\*</sup>を以、月番之御老中へ被申達、御老中より

御目付衆へ被仰付、月番之御目付衆宅二而、願之者誓詞血判致相

済也、

一 御老中へ願之証文

江戸詰家老

苗氏仮名

右、御家来二而御座候而、当地差置用事申付候、当年何十歳二御座候、何病氣二而馬上之勤難相叶御座候付、乗物被遊御赦免候様

奉願候、以上、

年号月日

堀 周防守居判

宛所なし

但柳原式部太輔殿より八月番御老中注したる由也、

右之趣者、向寄之御目付衆へ様子被相尋候上二而、如左被認候、

堀田筑前守御用番之節、留守居之輩ヲ以被達候処、件之趣御目付

衆江被仰渡候間、向寄之御目付衆へ願之旨差越、誓紙いたさせ可

然由御差図也、

御目付前へ願之者差越時書札案

一 一筆致啓上候、私家老何某と申者、当年何十何歳罷成候、当地差  
置用事申付候、持病眩暈、其上不步行御座候、馬上難叶御座候、  
其身誓紙被仰付、乗物御赦免被成可被下候、恐惶謹言、

年号月日

宛所御目付衆不殘銘々、但月番方を先二注又由、尤折紙也、

一 願人誓紙案

起請文

私儀、何十何歳罷成候、何持病御座候、馬上二而者奉公難勤御座  
候、依之周防守様方ヨリ乗物御赦免之御断申上候通御座候、右之  
申趣於偽上は、

式目之神文、尤牛玉二血判、但宛所御目付衆不殘様書也、

右者、御目付衆一人之前二而血判シ、夫ヨリ御礼と而御目付衆不  
殘廻ル、

(七) 切支丹宗門改証文

切支丹宗門証文、付三枝撰津守殿聞合文書

一切支丹宗門、従前々無懈怠、今以相改申候、先年被仰渡候御法度  
書之趣、又者切支丹宗二類族之者・悲田宗共、家来下々知行所至  
迄逐穿鑿候之處、怪シキ者無御座候、依之譜代之者ハ寺受状手前  
へ取置申候、年季一季居之儀ハ、寺請状受人方へ取置申候段、請  
状書入召抱申候、知行所ヨリ者檀那寺並名主五人組方より村切二  
手形取置申候、若相替御座候ハ、急度可申上候、為後日証文仍如  
件、

年号月日

大久保淡路守殿

何之誰印書判

(八) 鉄炮改証文

鉄炮改証文、右同断

一 拙者知行所並御朱印地之寺社領共、鉄砲之儀入念相改、猥二鉄砲  
打不申、且亦獵師輩畜類防二事奇惡事仕間敷段、堅申付置候、為  
念証文如件御座候、以上

年号月日

何之誰殿

何之誰印書判

一 拙者知行所御朱印地之寺社領共、鉄砲之儀入念相改候処、所持之  
者無御座候、自今以後鉄砲所持仕候者、其趣御断申上、証文可差  
出候、為其如此御座候、以上、

年号月日

何之誰殿

何之誰印書判

(九) 評定所御預人式法

御預人有之時評定所式法図並次第

一 御預人有之時ハ、前日月番之御老中へ御預り人之留守居老人被召  
寄、御内意有之事、  
一 当日御指図之場所江人数差遣、評定所ヨリ一左右ヲ相待、留守居  
之輩ハ若党老人・草履取一人召連、評定所玄喚迄罷越、御徒目付  
衆へ相達候事、  
一 右之節、及断、步行士老人評定所之内二入置候、御預人受取候少

前二、又及断、乗物並六尺物頭一人・馬廻士一人・步行士三人・足輕五人玄喚涯迄入置也、外二中間一人・足輕一人跡二残シ置、是又刀箱持也、

一 万事御徒目付衆へ伺之、御徒目付衆差図有之、

一 広間ヨリ四間奥迄罷越時、寺社御奉行衆ヲ始其外御役人衆御列座二而被仰渡、長口上成故書付候へトノ儀也、懷中硯二而書付置、御目付委細之儀御加筆之事、

一 其後御徒目付衆同道二而御預人之居候所へ參候得ハ、御徒目付衆被引合、同道可仕旨被申渡、其時縁側通り、北之行当式台之際二枚戸之所迄致同道大事ノ御預人之時ハ脇差を差置、此所二而式台へ有之物頭・目付可呼上、三人二而乗物二乗スル、此時御徒目付衆差図なと候得ハ、伺之御預人之衣類又ハ懷中鼻紙袋等迄改之、乗物之錠ヲヲロシ、網ヲ掛ケ、留守居相残り、刀・脇差改之、請取候而乗物之跡へ為持候事、

一 御預人有之旨御内談之時、人数積り人数置所之義伺之事、

一 御預人之家来、途中二而逢申度旨ヲ申、又ハ金銀杯遣度由申候事有、荒ラケナク不申、何某へ御預候間、屋敷へ追而可參旨断之、近辺へ寄付申間敷候事、

一 御門ナド通候節ハ、先達而断之可申事、

一 露頭之人不及払、但御三家杯御通候ハ、留守居輩先達而可及御断事、

一 受取相済、御用番之御老中へ相届候事、

一 御預人屋敷へ着候得ハ、其俣致行水、衣類・帯迄着替サセ候事、

一 大事御預人之儀ハ、小路々々二モ見隠二人差置候事、

一 朝夕御馳走ハ、其人体ニ寄ルベシ、相伴人ハ無之事、

一 御尋之儀有之御預人、評定所二被召呼時ハ、受取候時之人數二而評定所玄喚迄圍ヒ參リ、御徒目付衆へ相渡候事、

#### 重而伺之覚

一 御預人対面アルベキヤノ事、

一 扇子・楊枝・鉢・毛抜・髪口杯ヲ可相渡哉ノ事、

一 御預人之親類・家来等ヨリ之書状・金銀杯内見致サセ届ケサセ可申哉ノ事、

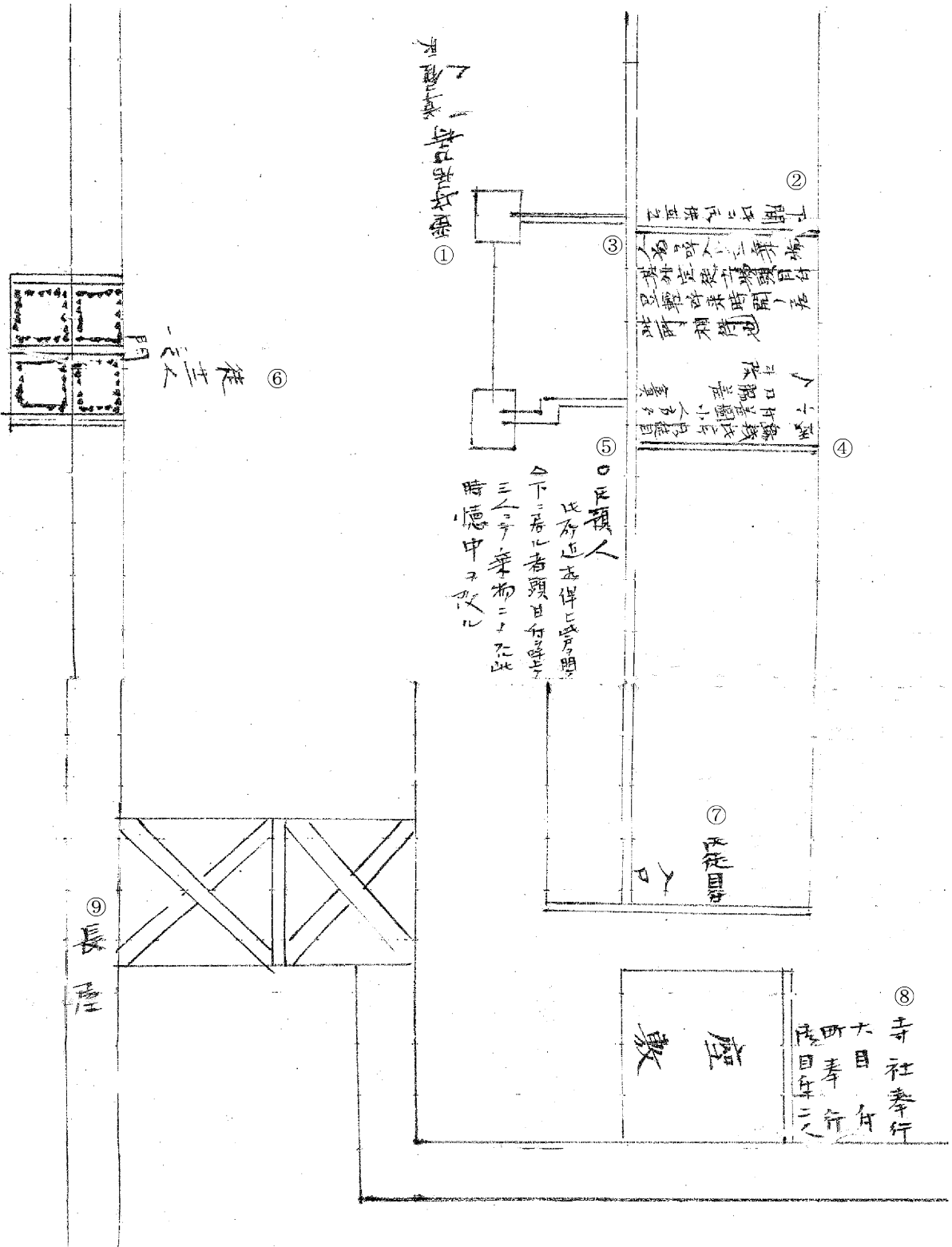
一 御預人在所へ差越途中二而相煩候ハ、致逗留、医師之御差図請可申哉、又々手医之薬二而差置可申哉之事、

一 御預人家来入用之儀、夫々に応シ御預人給候事、

#### 御預人有之時大躰受取人数之覚

一 物頭羽織二人 同大目付一人 馬廻士同三人 麻上下留守居一人馬

廻士七八人、是ハ馬ヲ毛引セ羽織計二而 乗物ヲ取廻し供入、步行士五六人・足輕三四十人、対之羽織、袴ハ不持、但有之時ハ芯ツ、刀箱 乗物カヲケ跡に持タスル也 之後二持、騎馬ノ外二、牽馬九疋十疋計



(参考) 前掲図中の注記

- ① 上段中央↓下から「留守居・刀持」、割書「草履取一人」
- ② 上段右上↓「下間、此二御供在之、」
- ③ 上段右下↓②の下「人数ヲ呼入レ置、乗物其外定徒士・物頭・目付、足輕呼来時開ノ居、此所ニ相待也、」
- ④ 中段右方↓③の下「御小人 跡残、此ニテ御徒目付差図、小人人方ヨリ刀・脇差 金具ヲ改、」
- ⑤ 中段中央↓「○」の箇所「御預人 此所迄相伴ヒ、此戸ヲ開ク、」  
「△」の箇所「下二居ル物頭、日付ヲ呼上ケ、三人ニテ乗物ニ乗スル、此時懷中ヲ改ル、」
- ⑥ 中段左方↓「御徒士一人 表門」
- ⑦ 下段右上↓「御徒目付 入口」
- ⑧ 下段右下↓「寺社奉行・大目付・町奉行・御目付二人 座敷」
- ⑨ 下段左方↓「長屋」

(二〇) 中川八郎左衛門切腹次第

中川八郎左衛門切腹次第  
 一天和二年極月二日、中川八郎左衛門儀青山泉州へ御預、同日八ツ時、彦坂壱岐守・日根長左衛門・能勢惣十郎、御徒目付式人、御小人目付四人、不意ニ泉州宅へ入来、泉州對話、其後八郎左衛門ヲ書院ニ呼出シ、御科之次第被仰渡、八郎左衛門切腹也、壱岐守者被仰渡以後帰宅也、  
 一書院之内ノ間之白砂ニ畳三帖敷、其廻リへリ取ヲを敷、  
 一八郎左衛門装束下ニ白小袖・上黒小袖・麻上下ヲ着被仰渡、相済、八郎左衛門ヲ小座敷へ入置、介錯人八留守居弘沢加左衛門、麻上

下着候、

一日々話々ニ、給人・歩行士・足輕羽織袴ニ而守之、  
 一八郎左衛門事、留守居加左衛門白砂畳之上へ致同道、御目付衆へ注進候得者、惣十郎・長左衛門右之場所へ出、泉州列座也、御徒目付衆縁側敷居際二居、御小人目付衆八白砂へ伺公也、「礼有之、三方二小脇差ヲノセ、中小姓上下ヲ着シ、八郎左衛門右之方三尺計置テ直入、其時引寄膝ノ上ニ置候処を打之、足輕之小頭兩人ニ而三疊敷計ノ蒲団ヲ持出、死骸ノ上ニ掛ル、  
 一死骸ノ事、御目付衆へ伺候処、旦那寺へ可遣旨差図ニ依テ、留守居方へ物頭壱人・足輕少々差添、吉祥寺へ送候而、尤先達而吉祥寺へ案内有之、泉州ヨリ金子五両吉祥寺へ送候而、尤御預之内衣類・諸道具・刀・脇差等、吉祥寺へ遣入、其後寺江附届無之、

(二一) 渡辺半左衛門御預次第

渡辺半左衛門事、相馬弾正少弼江御預之次第弾正少弼在所有之  
 一延宝九酉年六月廿六日、堀田筑前守様御家来衆ヨリ御用之儀候間、弾正少弼・留守居壱人只今罷出候様ニト御意之旨申来候付、留守居罷出候、筑前守様被仰渡候者、御預人有之候間、明昼時評定所へ罷出受取可申候、馬上三騎・步行士九人・足輕廿人程ニ而警固可仕候由被仰付候、依之受取申候而者如何様仕差置可申哉ト申上候得者、長屋ヲ困（あひだ）用所ヲ付無油断様ニ可仕候、其外何之儀共有之候ハ、稲葉美濃守様へ伺候様ニト被仰付候、  
 一同廿七日、於評定所松平山城守様、両町御奉行彦坂壱岐守様・青木遠江守様・田中孫十郎様・松平孫太夫様御列座二而、山城守様被仰渡候也、

渡辺大隅守不届有之付、流罪被仰付候、依之子半左衛門事、彈

正少弼江御預被成候間、受取同道可仕候、

一 刀・脇差取可申候、以後迄相渡事二而無之候、

一 半左衛門家来一人御免被遊候間、半左衛門江名を聞呼取可申事、右之通被仰渡候、

一 御目付衆四五人、半左衛門殿を同道二而敷台迄御出、留守居之者へ御渡被遣請取、乗物乗七申候時分、留守居之者半左衛門殿へ、御大法之事候間、御懐中を見申度と申候得ハ、鼻紙袋・巾着被差出見届候也、

一 大小扇子、御徒目付衆より受取、太刀箱入持參申候、

一 乗物者繩引候網を懸、左之方を釘二而打付、右之方錠をおろし、窓をも木ニテれんじ成程強く仕候、

一 同廿八日伺之事、御預人煩候節医者之儀、手医者二而も不苦事、

一 同断在所指下候道中、家老老人・物頭二人・歩行士十人・足輕廿人程可然候、仕度出来候ハ、一日モ早発足可仕事、

一 同断不慮二死去候ハ、死骸塩漬いたし可有注進事、

一 同断居所者、居城之曲輪之内しまり能所可然候、足輕番所二ヶ所肝煎侍二三人付置可申事、

一 同断家来、道中並在在所二而死去仕候ハ、死骸取捨可有注進事、

一 半左衛門殿発足、今朝御老中様へ留守居之者罷越、発足之儀申上候、

一 半左衛門殿御預被成候間、従在所以使者御老中様へ御受申上候、

一 半左衛門殿道中無異儀在所へ着候儀、以使者御老中様へ申上候、御関所二而渡辺半左衛門殿御預付、在所へ同道仕候由申候得ハ、

御大法ニテ候トテ、乗物番所ニテ改之、窓ヨリ内ヲ見申、通し被

申事、

一 廿八日伺宛行之事、是八十五人扶持、夏冬衣類被遣、其外ハ御構有間鋪事、

(一一) 曾根平兵衛御仕置次第

曾根平兵衛事山内大膳亮へ御預之次第

一 貞享二年六月五日未刻、御用番戸田山城守殿封御状被遣、御切紙之御紙面如斯、

御預之者候間、別紙書付之通、家来早々甲斐庄飛彈守役屋敷迄御差越、評定所二案内仕、奉行衆差図次第可被受取候、以上、

六月五日 戸田山城守

阿部豊後守

山田大膳亮殿 大久保加賀守

覚

一 騎馬 貳人 一 侍 拾人

一 足輕 拾五人 一 乗物 壹挺  
以上 網掛候事、無用

六月五日

右之御受、折紙二認之、粘封を付、

御預之者被仰付候間、御別紙御書付之通、甲斐庄飛彈守御役屋敷迄家々早々差越、評定所へ御案内申、奉行衆差図次第受取可

申旨奉畏候、以上、

六月五日 山内大膳亮



大久保加賀守様

判

阿部豊後守様

戸田山城守様

参尊報

同時伺之覚 奉書折紙二認上、包有、

奉伺之覚

一 居屋鋪之内差置可申哉之事、

居屋鋪之内二可被差置事、

一番ノ侍何人程付置可申哉之事、

番人大勢者無用<sup>※二</sup>候、脇へ御預之儀尤<sup>※</sup>二候、

一 扇子並楊子ナ卜遣申間鋪哉之事、

扇子並楊子之儀、用時計被相渡尤<sup>二</sup>候、

一 髮結申候節<sup>※</sup>入可申哉之事、

髮之節<sup>※</sup>入不苦候、

一 病氣之節他医之薬用可申哉之事、

煩之節手医者之薬可給候、

以上

六月五日

山内大膳亮

右御受並伺之書付共二、戸田山城守殿未刻差出候伺之書付二御差

図、山城守殿ヨリ附札二被成御越也、

一 同時阿部豊後守殿へ、以使先刻御内意被成候御紙面之通、委細奉

畏候、為御請以使者申上候由、相応之御返答有之、

一 申ノ中刻甲斐庄飛彈守殿御役屋敷迄遣人数、留守居二人麻上下、

物頭一人・大目付一人、袷・羽織、何毛馬上、中小姓六人、歩行  
目付一人、徒者五人、何毛式人、袷・羽織、為使番歩行者式人、  
足輕十五人程、押足輕二人、何毛対羽織着之、刀箱一・足輕持二  
二人、乗物壹挺錠前有之、六尺八人、箱提灯十ツ紋付、棒三十本、  
渋紙包二包ニシテ中間式人二而昇持、合羽籠三荷、

一 甲斐庄飛彈守殿御役屋敷ニ参着、則留守居之者取次芹沢与奥衛門  
江口上申入、御預之者候間、貴様御屋敷迄家来早々差出、御奉行  
様方御差図次第受取候様被仰下、依之家来差遣申候、御差図被成  
可秘下卜ノ由也、右之取次、奥ヨリ挨拶之趣、飛彈守申置候由二  
而、御評定所へ申遣候処、御左右有之迄相待可申候、人数目二不  
立様仕可差出由、書付被仰聞候間、乗物杯内<sup>※</sup>二入候様二と取次差  
図二付而、乗物並棒足輕腰掛之内江入置也、

一 西上刻御評定所二罷越候様申来候、人数不目立候様参候得卜被仰  
越候由、取次奥右衛門申二付、提灯杯不<sup>※</sup>燈、道之河岸ヨリ御評定  
所之脇迄、馬上之者毛歩行二而参着、留守居兩人御門へ罷越シ、  
御小人目付御門出合二付、山内大膳亮家来二而御座候由申達候処、  
内へ入候様申来二付、兩人御玄閔刀拔、若党持セ置、御式台左脇  
之間着座仕候、式台へ御徒目付佐山庄左衛門・町田伊兵衛・山本  
弥三左衛門・宗佐四兵衛・原田勘左衛門、此外御小人目付相詰申候、  
一 乗物並箱・提灯其外侍分内々入候様、御徒目付衆差図二付、留守  
居之者・大御目付御門へ出、手前之人数相改、紛無之様二入、留  
守居之者・物頭・大目付召列候、刀持一人・小者一人入申候、  
一 御奉行衆前二留守居衆一人御召出シ、御徒目付衆兩人同道也、次  
之間左二脇差拔候様差図二付、脇差拔置出座仕候、大目付林信濃  
守殿、町御奉行甲斐庄飛彈守殿・北条安房守殿、御目付小田切喜

兵衛殿・稲津五郎左衛門御列座、信濃守殿被仰渡候者、曾根平兵衛儀御尋之儀有之二付、御詮義之内大膳亮殿へ被成御預候、此旨ヲ大膳亮殿へ可申候、平兵衛受取参候様二トノ儀也、右被仰渡候内御徒目付兩人豊脇へ罷居候、被仰渡相濟、則刻退出、右之御徒目付同道二而式台へ罷出、平兵衛可相渡候御大法二候間、平兵衛懷中相改、刀・脇差ヲサツト相改受取可申候、平兵衛殊之外酒二被酔候間、其意得可仕候旨、御徒目付申聞、平兵衛殿ヲ御徒目付同道二而御式台へ被遣、其節刀・脇差拔有之候ヲ持セ来、留守居之者・物頭・大目付平兵衛殿側ニ寄り、懷中改可申由申候得者、座（奥座）上下ぬき、上帯毛被解、懷中改之、鼻紙一折有之内二觀音經一卷・珠數一連・楊子一本有之、外二扇子有之、是ヲ大目付受取也、其内刀・脇差御徒目付持出被渡之、留守居之者受取、拵（奥拵）ヲ見、ハバキ着を少シ抜見候、御徒目付申候ハ、平兵衛其許へ被参候、被入念改二不及候由被申候処、委細不改、刀・脇差・懷中之品々・扇子徒目付二相渡、刀箱二入候、平兵衛殿如前上下を被為着、何レモ同道ニテ御玄喚へ出、後之方之際へ乗物寄七、乘之錠（物説力）前ヲロス、右之節板之間ヲ御徒目付・御小人目付被出候、御評定所より為注進留守居老人先達罷出候、

路地行列 提灯

足輕棒持

道具持

馬取

自分提灯

若党同

馬上

大目付

草履取

馬取

若党同

提灯

足輕棒持

挟箱持

提灯 足輕 足輕 足輕

步行 提灯 中小姓 足輕 足輕 提灯

足輕 步行 乗物 平兵衛殿

步行 提灯 中小姓 足輕 足輕 提灯

提灯 足輕 足輕 足輕 足輕

足輕 平兵衛殿 足輕持之 赤紙色 中間持之 若党

使番 刀箱 棒拾本 馬取 自分提灯

步行 提灯 騎馬物頭

足輕 平兵衛殿用 右同 中間持之 馬取

使番 徒目付 挟箱 棒拾本 若党

步行

若党 道具持 自分 馬取 若党 同

草履取 提灯 騎馬留守居役 合羽籠 同 同

若党 挟箱持 馬取 若党 同

押 足輕

提灯

押 足輕

一教寄屋橋当番嶋津式部少輔※小輔・御番所大目付罷越、山内大膳亮御預人被仰付、評定所二而受取、大膳亮屋敷へ罷越旨申達通候、屋敷へ戌下刻到着、裏門ク、リヨリ入、屋敷内所ニ提灯燈之、

一平兵衛殿居所座敷也、次之間格子戸錠ヲヲロシ、用事有時計明ル也、

一平兵衛殿到着、則刻御老中へ為御届以使者達之、御用番戸田山城守殿・大久保加賀守殿・阿部豊後守殿へ口上、御預人曾根平兵衛於御評定所受取、路地無恙只今私屋敷引取申候、為御届以使者申上候、

一平兵衛殿到着、則刻為使者家老ヲ以口上、拙者方へ御預之旨從御老中今日八頃仰下サレ、俄之儀故座敷等見苦候、何二而モ御用等候ハ、可被仰聞候、早々御見舞可申候得共、御草臥二可在御座、致延引之由也、相応之返答有之、

一帷子・上帶・下帶、此座二而用候物、徒目付兩人持出為替申也、一行水之好候得共、酒二被酔候故、俄之儀二付万事仕度調不申候、今晚者行水延引之様斷申候、

一亥刻料理出ス、二汁七菜、酒二被酔候故、酒今晚不出、

一浴衣老ツ 一風呂敷一ツ 一手拭大小六筋

一蚊帳一ツリ 一小夜物 一蒲団（栗色）一浅黄羽二重両面

一ねまき 一御座式枚 一枕

右之通遣之、

一六月六日卯刻、御老中方へ大膳亮直二被參候、戸田山城守殿被掛御目、昨夜以使者申上候通、曾根平兵衛御詮義之内御預之旨、於評定所林信濃守殿被仰渡候、路地無恙屋敷引取申候、初而御用被仰付難有奉存候、私儀平兵衛へ逢可申哉、御差凶次第二可仕旨申達候処、逢候而見置可然候、料理ハ力口ク仕候様二ト、山城殿差図、

一同刻、大久保加賀守殿・阿部豊後守殿・牧野備後守殿へ大膳亮直

二被參候、曾根平兵衛御詮義之内御預付、昨晚於評定所林信濃守殿被仰渡候、路地無恙私居屋敷へ昨夜引取申候、初而御用意被仰付難有奉存候、夜前右之段以使者申上候処、夜更候故御門通申儀不罷成、途中ヨリ使者罷歸候由御申置候、

一今朝平兵衛殿ヨリ家老へ用有之由被仰二付、即刻罷出候、楊枝遣候而不苦候ハ、御借被成間鋪哉と被申候二付、御遣仕廻候ハ、此方へ御返し候様二ト申、杉楊枝遣候、仕廻候而即刻御返し候、以後二モ如此、

一今朝之御料理二汁五菜、酒出ス、

一巳中刻平兵衛殿へ御見廻候、平兵衛殿同道同座（東「同座」）へ廻、次之方格子戸際家老・用人・留守居・大目付罷在、即刻退出、

一拾 志羽二重 一帷子四（浅黄） 一麻上下一具

一上帶志筋 一下帶志筋

右、何モ平兵衛殿定紋三ツ巴付之、

一千菓子一折色（栗色）々々

右之通以使者遣之、

一林信濃守殿へ以使者口上、夜前曾根平兵衛御預二付而、於御評定所家来之者被召出被仰渡候趣、委細致承知奉畏候、路次無恙拙者居屋敷引取申候、昨夜夜更申候故、以使者不申入候、為御請使者申達候由返答、御口上之趣承届候、平兵衛儀路次無恙御屋敷へ御引取、一段之儀存候、不及申上候、料理力口ク御尤二候由、

一甲斐庄飛彈守殿・北条安房守殿へ、以使者昨晚曾根平兵衛御預二付而、於評定所拙者家来之者へ被仰渡候趣致承知候、路次無恙昨夜私居屋敷へ引取申候、昨晚八夜更候故延引罷成由、

一卯中刻、御奉行衆ヨリ封御状志通、御小人目付持參上書二、信濃

守殿・飛彈守殿・安房守殿名有候御使札、

御預り人曾根平兵衛儀、明七日之朝五半時評定所へ可差出候、  
為其如此候、

六月六日

稻生五郎左衛門

小田切喜兵衛

北條安房守

甲斐庄飛彈守

林 信濃守

山内大膳亮

折付粘付

一御預曾根平兵衛儀、東平兵衛明七日朝五半時御評定所へ可差出旨奉得其意  
候、恐惶謹言、

六月六日

山内大膳亮

判

右五人様

上書名、本書之通三人へ宛之、※字

右之使御小人目付へ吸物・酒出ル、

一申刻、戸田山城守殿へ以使者、先刻林信濃守殿・申斐庄飛彈守殿・

北條安房守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿ヨリ、曾根平

兵衛殿明七日五半時御評定所二差出候様被仰渡候間、明朝差出可

申と奉存候、將又奉何度儀、別紙書付申候、御差函被成可被下候由、

奉伺之覚

一曾根平兵衛詮義二付、御評定所差出候節、昨日被下候御書付之通  
人数差添可申哉、

尤二候、※※※

一乗物二網口掛申間敷哉、東房為敷掛  
網無用候、

一御評定所へ差出候節、刀・脇差箱二入為持差出可申哉、

刀・脇差箱二入遣可然候

一近所火事之節、私下屋敷へ送り可申哉、

尤二候、※※※

一類方ヨリ音物並書状参候節者、如何可仕哉、

音物御戻シ、書状内見二而、此方へ可被相伺候、

一平兵衛儀、親類書状遣度との儀候ハ、如何可仕哉、

内見候而此方へ可被相伺候、※

一衣類如何様二可仕哉、

此儀者見計次第尤二候、

一煙草所望候ハ、遣可申哉、東平兵衛

所望之時計遣、則取可被申候、尤家來衆可付置候、※

一硯儀入用之節ハ相渡可申哉、※

硯儀入用之節ハ御渡シ不苦候、

一毛拔望候ハ、如何可仕哉、東平兵衛

無用二候、※

以上

六月七日 山内大膳亮

右之通、大奉書折紙二認、美濃紙二ツ折にして、山城守殿付札被  
成候、

一同七日、平兵衛殿へ使者ヲ以口上、今朝評定所二御出候様、御奉  
行衆ヨリ只今申來候間、御仕度候ハ、御出可被成候、御着用品々

進之候、相応之返答、

一羽織袴 羽二重

一上下式具

一帷子三染せつ  
白式つ

一下帶老筋

右之通被遣候、上下・帷子・羽織何二モ定紋巴ヲ付、

一辰上刻、平兵衛殿加賀染帷子・下着白帷子・麻上下着用、鼻紙懐中、惣ト供前通、留守居之者老人麻上下着用、スキヤ橋御門嶋津式部少輔御番所大目付罷越候而、山内大膳亮へ御預人御評定所へ同道申候由相断候、

一數寄屋橋御門入候而、留守居之者先達而御評定所御門迄辰之中刻參、御門前へ御小人目付出向有之二付、曾根平兵衛殿同道申候、押付是へ被參候由申達、則御奉行衆へ申達候、内へ入候而、侍分並平兵衛殿刀・脇差計内へ入候様二卜御差図有之由、御小人目付申候故、足輕八外へ残置、乗物玄喚之板間之際へ寄、物頭・大目付・留守居、刀・脇差家来へ為持置、板之間へ上ル、板之間御徒目付罷出、平兵衛出候様二卜差図有之時、徒目付乗物錠明、物頭・大目付・留守居之者乗物之際へ寄、戸ヲ明出入、則御目付衆・御小人目付差添候而、平兵衛殿御同道、御座敷へ被通候也、此以後此方構無之、留守居之者御敷台次之間二居ル徒目付刀箱持候、足輕八内腰掛二居ル、乗物ハ玄喚右脇之堀際二置、留守居・若克壹人・草履取一人内二置也、

一右之刀箱、平兵衛殿脇差・觀音經・珠數・扇子・鼻紙・楊枝ヲ入、箱錠前ヲロシ、鍵ハ徒目付持參、内二入、日記出之、

一町奉行衆一昨五日御出座之、御衆中・徒目付衆同前、

一御奉行衆二口上、曾根平兵衛今日差出候様、昨日被仰付、評定所へ差出候由、御徒目付原田勘左衛門ヲ以申達ス、

一平兵衛殿差添遣侍・下々又者二至迄、弁当遣之、御評定所外腰懸二テ給之、

一申ノ中刻御詮儀終候而、御座敷へ留守居之者被召出、山本弥三右衛門・原田勘左衛門同道、右両人差図二而、次之間脇差抜罷出ル、林信濃守殿・甲斐庄飛彈守殿・北條安房守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿御列座、信濃守殿被仰渡、今日平兵衛差出シ、方々町人共召寄候通り罷出候付隙入申候、平兵衛ヲ家来衆相渡差遣申候由、次二留守居之者二被仰聞候、惣而世間二而預ケ人料理・衣類結構二被申付候様相聞候、不義之者脇へ御預ケ被成候、結構二被申付訳二而無之候、左様可被相心得旨被仰聞候、口上相済、即刻御敷台へ退出、供之侍並六尺内二入候也、平兵衛殿ヲ御徒目付衆同道二而被出、物頭・大目付御玄喚板間迄參り受取、乗物二乗セ、徒目付錠前ヲロシ、則同道罷歸申候、申下刻屋敷へ到着、

一同八日、平兵衛殿へ使者衆一紙遣之、

一同十日辰下刻、林信濃守殿・甲斐庄飛彈守殿・北條安房守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿ヨリ封状一通来ル、御小人目付持參、

御預り人曾根平兵衛儀、後刻評定所へ被差出候様申遣候儀可有之候、為御心得申入候、以上、

六月十日

五人連名

折紙粘封御預り人曾根平兵衛儀、後刻評定所へ被召寄候儀も可有御座

旨、奉得其意候、恐惶謹言

六月十日 山内大膳亮

五人様 判

一 右之使、御小人目付へ吸物酒出ル、

一 平兵衛殿へ使者ヲ以今日茂評定所へ御出候様申来候間、御用意候而御出可被成候、為其以使者申入候由也、相応ニ返答、

一 平兵衛殿御評定所へ被罷出、染帷子・下着・白帷子・上下着、鼻紙同前也、已上刻出駕、付人如前、御評定所ニ而者様子去七日同前也、已中刻御評定所被参着、

一 御奉行衆・御徒目付衆、何茂最寄之衆中也、

一 御奉行衆へ口上、先刻兩度迄預御差紙候、任御差図曾根平兵衛差出申候、右之通御徒目付衆ヲ以留守居之者申上ル、

一 御評定所御留守居蘇我源五兵衛・佐藤小左衛門方へ帷子・单物式宛被遣候、御留守居銘々持参申候、

一 御評定所へ罷越、侍下々又者之分弁当遣、侍分評定所御留守居佐藤小左衛門座敷ニ而給候、其外腰掛ニ而給之、

一 平兵衛詮義畢而、申刻座敷へ留守居之者被召出、右五人之衆御列座、信濃守殿被仰聞候、曾根平兵衛被差遣候間、御家来衆ニ平兵衛相渡申由也、酉刻屋敷到着、

一 同十一日、平兵衛殿へ飽盛一徳利被遣之、

一 同廿六日、平兵衛殿へ以使者菓子一重被遣候、

一 已下刻、林美濃守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿封状一通来ル、使御小人目付、

曾根平兵衛儀二付、追付其許江可相越候、為御案内如斯候、以上、

六月廿六日 三人連名

山内大膳亮

切紙無判形粘封

曾根平兵衛儀二付、追付爰許へ可被成御越之旨、奉得其意候、

以上、

六月廿六日

三人様

一 午下刻、徒目付中寫甚五左衛門・小田惣左衛門・町田伊兵衛並御

小人目付六人罷越候、御徒目付使者之間へ通候、御小人目付八御目付御先玄関前二被居、御徒目付衆・留守居之士共ニ内談、曾根

曾根平兵衛儀、今日討首被仰付筈二候、右之通談候様御目付衆御差図者無御座候得共、為仕度候故、内談為申聞候由、依之場所使

者之間庭御徒目付衆被見合候処、少セマク候得共、此所可然候由御差図也、

一 平兵衛殿被仰渡濟候而庭へ被出候節者、書院之庭之路地口ヨリ乗物ニ而討首之場所迄被出可然由、御徒目付差図也、

一 平兵衛殿被仰渡候節、座敷へ被出候節、敷台之跡ヨリ出シ可然候、御目付衆使者之間之後二可有御座候、勿論平兵衛殿出候節ハ、此

方之者左右後二差添可然候由、御徒目付申候、首ヲ討候者之名並年書付越候様、御徒目付被申候、

嶋村団助四十一歳

右之通、書付団助ト申者ニ申付候、是ハ在所之郷侍ト申者ニ候、

給人並之者二而候由申達候、御徒目付団助へ御逢候而、首打捨候儀申談、討候而首を指上、御目付衆へ懸御目候様二卜也

一御目付衆御出以前、玄関前白洲之両脇二、手桶・かいけ添出シ置也、

一表門番、物頭老人・取次老人麻上下、歩行之者三人袴羽織着之、常之番之者門下二薄縁敷居へ、御目付衆御退出無之内、客並使客並使者等有之者、門二而受取、御用不相濟内、惣而他所之者門之者門内へ入申問敷旨申付候、

一裏門、中小姓三人・歩行者三人、袴羽織着之詰候、表門同前、

\*敷台、番取頭人麻上下着之、此外給人・中小姓等五人、何モ羽織袴着之、

一敷台、歩行之者・拾人、羽織袴着之、

一堀重門、徒目付一人・歩行之者一人附置、供之方<sup>※供之方</sup>へ断申、堀際寄申問敷旨申付候、

一書院之庭ヨリ使者之間庭へ通候所、徒目付一人・歩行一人罷在、役人之外内へ入申問敷旨申付之、

一屋敷中火之用心、給人三人、足輕添廻ル事、

一未之上刻、林美濃守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿被差越、此時家老・用人・留守居麻上下着シ、玄関迄罷出、歸候節同前、敷台板之間迄御出迎同道、使者之間後之座敷へ御通り、此一

御目付衆御出之節、麻上下着、敷台板之間迄御出迎同道、使者之間後之座敷へ御通り、此時信濃守殿被仰、平兵衛儀、討首二被仰付候、其仕度申付候様二被仰聞、右之段平兵衛へ可申渡候間、是江出候様可申聞由也、

一平兵衛殿二使者を以、只今御目付衆御出、御用之儀候間御出候へ卜被申候間、御出可有之由被申遣、則乗物二而被出候、但錠ヲ口

シ、附参人数物頭老人・大目付一人・給人三人・中小姓五人、何モ麻上下着之、外二歩行之者十人並下横目二人・平兵衛殿刀箱持足輕老人、小玄関二而乗物ヨリ出し、座敷へ右之人数付参、刀箱者小玄関二差置之、座敷へ被参出節左之通、

大目付一人 中小姓一人 同一人

平兵衛<sup>帷子淺黄  
麻上下着</sup> 給人一人  
中小姓一人

物頭一人 中小姓一人 給人一人

右之通附罷出候得共、大勢者無用之由、御徒目付衆差図二付、物頭一人・大目付一人・中小姓一人付罷在、残之者八次之間二扣罷在、右之附人何モ脇差を抜附罷在、使者之間後之座敷御目付衆三人並

御徒目付一人列座、大膳亮出座、平兵衛殿へ同座之内被入候様差

図之時、物頭・大目付・袖ヲ扣罷在、中小姓一人後二罷在、信濃守殿被仰渡趣、其方儀町人ヲ語ラヒ待二不似合儀仕候二間、死罪

二被仰付候旨被仰渡候、次喜兵衛殿被仰聞候、急度可被仰付候得共、ケ様二被仰付候段難有可奉存候、平兵衛殿難有存候旨被申、

且又信濃守殿被仰候ハ、日比之悪事達

上聞候卜被仰候、其時御徒目付衆迄御受被申候、即刻退出、玄関ヨリ乗物二乗セ、錠ヲ口シ書院之庭二廻入、附人右同断、信濃守殿被仰渡濟二而被歸候、此時大膳亮玄喚迄送ル、

一御小人目付敷台へ出ル、

一使者之間庭二白洲之間、上堀窓二掛戸懸サセ候、

一討首場へ荒筵敷、平兵衛殿座所新敷畳式枚敷、其廻り筵之上薄縁敷、

一薄縁之上毛氈敷、薄縁下二毛薄へり鋪之、

一薄縁之楷之下二草履敷テ置也、

一 火用心桶水入、かいけ添、手拭モ差添置也、

一 御目付衆前留守居之者被召出、平兵衛儀宿へ書置可致也、先右之居所ニ遣早々持参在之様ニ被仰付候、直ニ出シ申候テハ如何可有御座哉ト申候得ハ、必断申へク候間左様可仕と被仰渡候、依之庭之内ニ乗物居、乗物之内へ硯・紙を入、宿へ書状ニテモ遣シ被申候ハ、御調可被成と申候得ハ、内方へ文遣度由ニ付、文一通相認、外ニ観音経相添内方へ届呉レ候様ニト被申候ニ付、此方へ受取、則町田伊兵衛へ相渡候所、御目付衆へ相渡候、

一 御目付衆へ、平兵衛刀・脇差・衣類如何可仕哉、死骸モ平兵衛旦那寺へ遣可申哉ト、大膳亮被相尋候処、刀・脇差・衣類・死骸共旦那寺へ可遣旨被致差函候、

一 平兵衛殿へ旦那寺相尋候処、小日向総宣寺ニ而候間、是へ成共又ハ何方へ成共被遣候様ニト被申候、御徒目付衆へ旦那寺書付相渡ス、

一 平兵衛殿支度調候ハ、出し候様ニ、御徒目付衆差函ニ付、乗物ヲ書院之庭ヨリ使者之間庭ニ出シ、畳を敷候際へ乗物居ル、

一 喜兵衛殿・五郎左衛門殿、使者之間後座敷之畳縁へ出候時、大膳亮出座、

一 御徒目付薄縁罷在候、御目付衆居座敷前之薄縁へ薄縁敷、御小人目付六人、其次歩行之者十人被差置候、

一 畳ノ上ニ花色木綿長五尺四幅之袴蒲団敷、其上平兵衛殿ヲ直ス、右脇大目付、左脇物頭、後ニ給人・中小姓兩人附、嶋村団助麻上下着、刀・脇差桶之後ニ有之、其時御徒目付衆肩脱候得ト被申候ニ付、物頭・大目付兩方へ肩衣前ヲハツシ肩ヲ脱ク処、団助刀ヲ抜キテ首ヲ討、首ヲ持上、御目付衆之方へ掛御目候、此時御目付

衆へ如何仕廻可申哉ト、大膳亮被相尋候処ニ、如何仕廻可申ト被申候ニ付、仕廻候得ト被申候、其時下敷内度々死骸之上へ懸白張之、二枚屏風ヲ前ニ立ル、勿論縁類障子立之、

一 御目付衆前へ留守居之者を被呼出、書付一通喜兵衛殿被成御渡候、重而左右可致候間、其内預り置候様ニト被仰聞候、是先ニ平兵衛殿ヨリ内方へ遣被申候文・観音経也、

一 御用相濟候付料理出可申旨、御目付衆申達候得ハ、是ヨリ又外御用ニ参候、料理給候テハ先へ延引罷成候由御断付而、料理出不申候、御徒目付衆・御小人目付へ料理被給候様ニ、留守居之者罷出被申候得共、是又同前之断ニテ、申刻御目付衆罷歸候、此時大膳亮送被出候、

一 右為御届、御用番戸田山城守殿へ即刻大膳亮直ニ被参、先刻私宅へ林信濃守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿御出、曾根平兵衛討首被仰付候、右之段為可申上致伺公候旨、取次ニ御申置候、

一 林信濃守殿へ、以使者、先刻ハ御出御苦勞存候、為御挨拶以使者申達候由口上、留守居衆取次、平野理兵衛へ申置候、

一 小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿へ、以使者、右同断口上被申遣、留守之由、触番所へ申置候、

一 平兵衛殿死骸入候乗物、下に桐油ヲ敷、右之蒲団ニ包入、酉下刻寺江遣、給人耆人馬上ニ而、此外歩行人六人袴着之、足輕十人袴不着、歩行目付耆人・乗物かき十人、其外提灯持五人、小日向総宣寺へ遣候、彼寺門外ヨリ案内申入候得ハ、出家耆人罷出候付而、山内大膳亮申入候、今度曾根平兵衛殿我等へ御預ニテ、今日私宅へ林信濃守殿・小田切喜兵衛殿・稻生五郎左衛門殿御出、討首被仰付候、死骸旦那寺へ可遣トノ御差函ニテ座候間、当所ニ御取置



給候様二ト申達之、右之出家申候ハ、住持此比湯治仕、留主ニテ候間罷成間敷候ト申候付、御目付衆御差図候間御断不相叶間敷ト存候ト申候得ハ、左様御座候ハ、寺社奉行衆へ相伺可申候間、門外ニ相待候様二ト申二付、夜更大勢之者は二罷在候儀迷惑存候、御氣遣成事有御座間敷候、寺内へ入相待申度由断申付、寺門へ入、留守居之出家本多淡路守殿・口内記殿へ罷越相伺候処、取置候様被為差図候由、依之乗物客殿へ上ケ、出家衆出、引導相濟候而、出家衆申候ハ、寺内狭候故土葬ニ不仕候間、浅草へ持参火葬ニ仕候様ト申候付、左様之儀ハ存寄毛無之候、是非寺内ニ土葬之場無之候ハ、其趣之証文可給候、証文ヲ持参大膳亮へ相伺可申旨申候へハ、先左様二候ハ、土葬可仕由申二付、此方ヨリ穴ヲ掘、桶ヲ調候而入サセ、見届罷歸候也、乗物毛寺へ遣候、尤取置料白銀遣之、一総宣寺へ相渡候品々目録

曾根平兵衛殿自宅ヨリ着用覚

- 一 帷子 浅黄紋丸内三巴
- 一 一麻上下 衾具花色小紋紋同断
- 一 一上帶 老筋黒ちりめん
- 一 一 下帶 老筋
- 一 一 扇子 鼻紙
- 一 一 楊枝 老本
- 一 一 珠数 老連
- 一 一 刀 一腰 無銘 鞘黒又リ
- 一 一 脇差 一腰 撰州大坂作古守鞘黒又リ
- 一 一 以上
- 一 一 六月廿六日
- 一 一 曾根平兵衛殿へ差遣候衣類覚
- 一 一 帷子 八 四ツ浅黄
- 一 一 一麻上下 三具 二口花色小紋 一口栗梅小紋
- 一 一 一 裕老 茶羽二重 小小紋
- 一 一 一 羽織 老ツ羽二重 両面緋入

- 一 一 上帶 式筋 筋龍紋黒
- 一 一 下帶 三筋
- 一 一 浴衣 老ツ
- 一 一 風呂敷 老ツ
- 一 一 手拭 六ツ 白大小内式筋 片掛
- 一 一 蚊帳 一張 萌葱紅へリ
- 一 一 小夜着 老ツ 表羽二重 裏紅羽二重
- 一 一 蒲団 老ツ 表紫 裏浅黄羽二重
- 一 一 御座 二枚羽二重 縁取
- 一 一 寝回 老ツ サラシワタ入
- 一 一 枕 二ツ 老ツハヒロウラ
- 一 一 敷紙 老枝
- 一 一 以上

丑六月廿六日

一 御注文之通、無相違受取申候、為念如此候、已上、

六月廿六日

総宣寺内

山内大膳亮様御内

坪内平介殿

一 総宣寺住持湯治ヨリ罷歸候付、右為届使僧差越之、  
 一同廿七日、御徒目付町田伊兵衛大膳亮宅へ参、留守居之者へ申候、曾根平兵衛内方へ被書置候文並觀音経、留守居之者へ預置候、重而御目付衆ヨリ御左右可被成旨申置候、御目付衆右文杯写サセ御成候而、御老中へ被懸御目候処、御老中被仰候而、公義之構事無之物ニ者御食着無之由被仰候、左様成上ハ最早御目付衆ヨリ御左右毛有之間敷候、此方ヨリ御伺候而も御差図被成間敷候、右之御封ヲ拙者仕置候候処、御目付衆右之段拙者へ被仰聞之、右之文並觀音経先へ御届候欵、又ハ御焼捨候トモ不苦物ニ候、拙者印判御座候間相渡可申候、右之趣家老衆へも可申談候由ト申候付、家老罷出、右之様子伊兵衛ニ承候、此儀如何様ニ被成候得ト、拙者差図者不罷成候役儀二付、左様之事曾テ不申候、自分了簡次第ト

申候、此方ヨリ申候、御老中御食着毛無御座物ニ而候ハ、平兵衛殿内方へ可遣候ト存候ト申達候得ハ、如何ニモ御尤ニ存候、火中ニ被成候テ者、相果候平兵衛残念之事ニ可存候、御了簡之通尤至極之由、伊兵衛挨拶仕候付、平兵衛内方居所相尋候得ハ、先小普請組清水平左衛門殿方へ可被居候、屋敷牛込御留守町ニ而候間、内方へ留守居方ヨリ為持遣可然と、伊兵衛申二付、同廿九日、平兵衛殿内方へ之文書通並觀音経上封、清水長左衛門殿家来迄留守居之者方ヨリ歩行之者為持遣候、留守居共方ヨリ口上、今度山内大膳亮へ曾根平兵衛様御預ニ而御座候、然処去ル廿六日御仕置被仰付候、御文書通並觀音経一卷奥方様へ被遣度由、平兵衛様被仰置候間、為持遣申候、御受取可有之候、右之通口上ニテ申遣、則平左衛門殿家来へ相渡、受取手形取来ル、

一御預人御座候内、客有之候ハ、不致対面候事、  
 一御預人御座候内、屋敷へ他所之者一切入不申候、魚屋・八百屋者大目付方ヨリ札ヲ出シ出入為仕候事、  
 一平兵衛殿夕飯後毎日行水させ候節、湯殿へ坊主其外目付老人ツ、付置候事、

一朝夕之料理ハ二三日過一汁三菜程ツ、申付候事、  
 一平兵衛殿へ毎日盃並夜素めん類、又ハ冷食・餅類・吸物・酒出入、

貞享二年六月廿六日

討首 曾根平兵衛  
 切腹 同 右京  
 切腹 同 内記  
 右、平兵衛儀、侍ニ不似合町人ト内談仕、不義之仕形有之候ヲ不

届ニ被思召、御仕置被 仰付候故、預ケ山内大膳亮宅ニテ林信濃守・小田切喜兵衛・稻生五郎左衛門申渡候、世倅兩人、前田相模守宅ニ而申渡之、

曾根平兵衛家来

伊藤弥一右衛門

右者、於牢屋討首、浅草ニ而獄門ニ懸ル、

伊藤桑之助 廿六

同 源五郎 九

右兩人せかれ、於牢屋死罪、

曾根平兵衛一宿

町人兩人

右、於牢屋死罪、

右之通被仰付候、

(二三) 日光御社参御行列)

日光寛文御社参御行列之覚

一酒井雅楽頭 久世大和守 酒井河内守 稻葉丹後守

土屋但馬守兩人

之内老人ツ、

酒井日向守 土井兵庫頭 是迄御先番

御間なし

ナメシ皮袋二入・金二而御紋付

袋狸々緋

御幕串

御鉄砲

御幕長持二 奉行一騎

御玉葉筒頭 御先筒頭一騎

右同断

御鉄砲

五十挺

右同断

袋狸々緋

袋狸々緋

與力十騎

御鉄砲五十挺 三鏢

與力十騎 御先弓

百人頭一騎

右同

百人頭

與力十騎

右同 五十挺

右同断 右同断

なめし皮皮袋二入金御紋付 十五本 袋狸々緋

五十張 頭一騎 與力十騎

御旗竿 奉行 御先筒

御旗長持

十五本

五十張 頭一騎 與力十騎

右同断 御先筒

右同断

右同断

三十挺 頭一騎

與力拾騎

御使番一騎 御徒目付

三十挺 頭一騎

与力拾騎

御目付一騎 御小人目付

虎皮

御持筒五十挺 頭一騎 御櫛鞘二十五本

与力十騎中ヲ步行

松平民部少輔

松平筑後守三人之内一人ツ、与力十騎中ヲ步行

与力中ヲ步行

森川下総守

御持筒五十挺 頭一騎 右同断

奉行 御召替御駕籠 御召替御馬 御挾箱十 御弓立二

台力サ

御徒

御長刀 御徒持

御空穂二

御傘

御床机 同

四組

御腰物筒

台力サ

同

御長刀 右同

同

小十人頭一人

御腰物持衆

小十人組

御手筒

御

御小道具

御徒目付

小徒頭一人

御葉込之衆

小十人組

御手筒

御小人目付

御召御馬

御馬印

御持筒五十挺

御弓

御徒組

御召御馬

御馬印

御持筒五十挺

御鉄砲

御小人目付

御太鼓

御持筒五十挺

御鉄砲

與力拾騎 頭一騎

森川下総守

御馬衆

與力拾騎 頭一騎

板倉筑後守

御小姓組番頭 大森信濃守

松平民部少輔右三人之内

御詰小姓衆 御小納戸衆 中奥小姓衆 御目付衆 御使番

二騎ツ、二騎ツ、

御小姓與頭同御番衆御徒頭 小十人頭 土屋但馬守御小人目付久世大和守替之

家来一騎 御徒押 同勢 御小人 若党 草り取 諸道具奉行 御小人 若党 草り取

鑓弓 鉄砲 牽馬 阿部豊後守 家来五騎 御跡堀田備中守 鑓弓 鉄砲 牽馬

御跡押 阿部播磨守百騎 安藤対馬守六十騎 將軍家従日光還御江府御城入行列之次第

一御玉葉箱 御矢箱 頭耆人 御鉄砲百人苦味二頭兩行 頭耆人

御先手御弓二頭 長持 請筒 御旗長持 頭耆人

御旗竿 御旗奉行組御旗奉行 御使番頭 持鑓老本 御徒目付

右同 右同 御旗奉行 右同人 持鑓老本 御徒目付

板倉筑後守 御持筒老組 頭 虎皮 御擲鞘 松平民部少輔 頭耆人 御擲鞘 森川下総守 御持筒老組 頭 御擲鞘 右之内一人ツ、 虎皮

同 御召替御馬二疋 御召替御駕籠 挟箱 御蓑箱 兩行

御弓立 白御鞘 黒同 御玉葉箱 御傘 御立笠 御弓立

御床机 御徒 御長刀 御腰物筒 小十人頭一人 御腰物持衆 御徒 御長刀 御腰物筒 小十人頭一人 御葉込衆 御

御道具 小十人組 御手箱 御徒衆 御小人目付二人 小十人組 御手箱 御徒衆 御小人目付二人

御徒衆以上 御召之御馬 小長持二入 御馬印御徒衆付 御太鼓 同断 小長持入

同断 御手箱 御徒衆

御旗同心付 御持弓 頭

御旗長持

伏見勘七郎 御側衆

御持弓 頭

三人之内一人

御徒目付二人

御小姓衆・御小納戸衆 中奥衆 御目付衆 御使番二人

御小人目付二人

御小姓組之組頭 御小姓組御番衆二組 寄合 御徒頭 小十人頭

久世大和守

御徒目付二人 御小姓目付二人 一人ツ、御徒押

土屋但馬守

御小人

同勢 若党二行 草履取二行 挾箱 諸道具奉行

御中間

鑓弓鉄砲 馬

お泊 岩付 古河 宇都宮 壬生

(二四 日光御名代)

天和二年正月廿日日光御名代 石川主殿頭

人数ノ覚

一士三十人 一歩行士廿人 一覆人坊主十二人

道具ノ覚

一弓 一鑓五長刀廿 一甲箱一荷 一旗竿

一弩俵 一早負 一挾箱 一立笠

一乘代馬 二疋 一乘掛馬

江戸注進ノ書札

一筆啓上仕候、兩上様倍御機嫌能可被成御座、奉恐悅候、然者私儀、昨十九日至日光山參着、梶左兵衛・久留嶋左兵衛並理龍院江御奉書相渡、御門主へ御樽肴持參、上意之趣申達候処、忝思召候、今日天气毛好、於御堂御法事無残所相濟、御名代之奉拝相勤候、拙者儀発足仕候、猶歸府ノ節可申上候、恐惶謹言、

正月廿日 石川主殿頭

大久保加賀守様

阿部豊後守様 堀田筑前守様格書

人々御中 人々御中

御宮御仏殿献上

一御宮 御太刀馬代銀三枚 一御仏殿 白銀三枚

御音物之覚

一語門主 御太刀馬代黄金十両 余略

(二五) 日光御成今市御番

寛文三年日光御成今市御番之次第

人数並兵具之覚 酒井修理大夫

一騎馬 四十 公儀ヨリ一騎馬數被仰付、役人等四十騎之内也、以上、騎馬五十、但乘掛二乗馬ニテ馬ひかせ候共騎馬ノ外ナリ、

一侍數 百六十余 右之内無足人小知取与力式十人

一鉄砲 百五十挺 先筒持筒共

一弓 六十張 同断

一長柄 七十本

一旗五本 和田修理大夫殿俄二疾煩付松平甲斐守殿へ被仰付、

一牽馬拾三疋

同断江戸供廻之覚 本多下野守

一騎馬 八騎 一大小姓式拾六人

一持筒 十挺 一持弓

一鎗 五本 一徒士三拾五人

一牽馬 三疋 一騎馬拾疋是八大小姓ノ内拾人馬持也、

右惣人数四百八十九人

從白川直二日光へ参候人数之覚

一騎馬 四拾式騎 家老三入・中老式人・番頭三人

一弓 三拾張 足輕羽織、絹袖なし、

一長柄 六十五本 木綿羽織、染色之袖了り、

一旗數不知

右者人数五百八拾余

為入用持参道具覚

一幕 十対色々 一小姓幕八双 一棒俣式本

一戻 式本 一棒百本 一鳶口五拾本

一大提灯式十五 一升提灯五十 一水籠百

一手桶百ヒヤク共 一水籠三荷 一水溜式

一提灯立クワン計持参、竹三而於日光作 一腰掛二

一毛氈 一薄縁二百枚 一触台手燭入長持

一衛士籠二 一拍子木十組 一繩

一鎌 一鋤 一鍬

一栖楼日光二而作 一馬ツナキノ鉄三十組

一打釘 一力キ力ネ 一釘

一錐 一鉄槌 一細引

一松明 一染苧 一豊ノヘリ

番所之図、左二記ス、

雲寿院

本多

下野守

本陳

酒井修理大夫家中 本多下野守家中本番所

今市通 今市通

同断 同断

番所 宇都宮海道  
鹿沼海道

(二六 音信贈答衣服器物等之事)

覚

一 音信贈答嫁娶之饗応等、万事儉約を可用旨、前々より毎度被仰出候、弥以右之趣急度被相守、猶又此度被仰出候條々、右之通相心得可被申事、

一 婦人之衣服、近年結構二相見得候、向後大名の妻女たりといふ共輕金糸等用、隈に結構成衣類拵被申間敷候、殊に召仕の女に至てハ猶以て上下の差別有之候様、堅可被申付候、此度定置段、町中へ相触候間、其趣を可被存候事、

一 新規塗物之事、国持大名の調度たりとも解刺李子地・蒔絵に過へからず、妻女之乗物・挟箱・長持等之類は黒ぬり、蒔絵の紋より上の結構いたすへからず、其餘の輩は黒ぬり、輕き蒔絵或ハいつかけ等を用ひ、乗物は黒ぬり、のし金物又は天鷲絨包、挟箱・長持之類は黒ぬり、或は溜ぬりを用へし、蒔絵の紋無用の事、

但湯殿道具類は、木地溜塗の外一切致へからざる事、

一 夜着・ふとん或は貝桶・挟箱の覆、唐織金人の類不可用之、<sup>※の</sup>長持・

屏風箱之覆は、綿布又は葦を可被用事、

一 婚姻の行列供、乗物十挺に過へからず、

一 祝儀者饗応弥近例に随ひ、其内菜数等省略有へし、常の參會者大身なりといふとも、二汁六菜に過へからず、

但香物共に右の数たるへし、惣て吸物・肴共料理の菜数に準し

減少すへき事、

一 婚姻祝儀物の取替し、近年礼物被仰出候趣に準し可有斟酌事、

右之品々、万石以上其分限相応を計ひ可被用之候、以上、

享保九年辰六月

(二七 御精進日江戸出府)

一 參勤之諸大名並遠国御役人等參着の儀、御精進日二而茂不苦候間、勝手次第可在參着候、尤届被相廻候儀モ不苦候、

宝永七寅四月十日

(二八 産穢忌中書状)

一 産穢・忌中等の面々差合、以前差越之書状は、忌明之節迄差扣置<sup>※</sup>、何二付ての書状、産穢・忌中二付迫て可差出旨、其節留守居の者可相届候、

但注進状の類、先格二而産穢・忌中二て差出来ル分は可為只今之通候、

午九月

(二九 御暇給出足延引)

一 四月六日其外在所へ御暇被下候面々、御暇被下候当日より三十日程滞候分は断不及候、三十日を越候は滞府の訳断可有之候、

享保廿年七月

(三〇 御仮養子之事)

一 御仮養子御願書<sup>※御用掛</sup>、御用番御多用故、御対客難成付、御老中用人迄被差出候例、宝曆七年丑四月丹羽若狭守様ヨリ堀田相模守様用人へ御直二被差出候、

一 御仮養子御願書被差出候節、御口上之趣

両御所様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存候、御自分様二も御堅固御勤珍重奉存候、私儀御暇被下置、近日御当地発足仕筈御座候、

依之在國中仮養子書付差上置申候、

一 御參府の節、御老中様ヨリ以御使者御仮養子御願書御返被成候、  
依之御家老衆ヨリ左の通り御渡被成候、

去年御暇被下歸国仕候節、差上置候当分跡式願書、被返下之受取  
申候、恐惶、

七月廿三日

御名 御名乗御判

西尾隱岐守様

(二二) 御回勤ヲ御家老御使者之事

一 御代替御祝儀、太守様御登城御下りの節、桜田御屋敷へ御入、  
御風氣故、松平大膳太夫様御方へ御聞合の上、御老中様方へ、御  
廻勤の場を御家老御使者・御側御用人・若御年寄衆へ御家老御使  
者之筈候を、御番頭御使者ニテ相濟候、

(二三) 御入輿付御家老二人江戸詰之事

一 大隅守様留守ニ差置候家老嶋津大藏儀は、先達て御目見被仰付候  
段、前々留守中家老一人差置申候得共、竹姫君様御入輿以後一人  
ニテは彼是差支申候付、兩人為詰申候、此節島津全と申者出府仕、  
留守中大藏同前為詰申候、御用の為ニも候間、申上置候様ニと、  
大隅守申付候、以上、

御名内

享保十八年丑五月廿二日

相良弥一兵衛

(二四) 江戸往還供廻供鐘供馬

一 江戸中往還之の節、供廻小勢可被召連候段、国持たりとも騎馬一

騎欵二騎、供鎗二本欵三本欵不可過、惣躰又者等輕可被召列事、

寛延二巳十二月仰渡

(二四) 石塔場定

一 国持大名たりといふ共、石塔場二間四方に不可過之旨、大猷院様  
御墨印有之、四十九院之圍垣式間四方被越候儀不能成候、外ニ余  
地御座候ハ、不苦の由、蓮金院被申候、

但宝永元年比

(二五) 御忌掛之事

一 継豊公御逝去之節、重豪公御忌、実者御祖父ニ而、御世代は御曾  
祖父故、大目付服忌御掛大井伊勢守様へ被伺候処、御目付服忌御  
掛へ被仰合候而被仰渡、  
御付紙左之通、  
書面の通は、老人へ兩様の続有之時は、重き方服忌受候付、養方  
曾祖父定式服忌ニテ候、

(二六) 御代替誓詞

一 御代替誓詞相願候万石以上及交替寄合の内長病の分、快氣次第相  
伺候様可被達候、且又右の内十六才歳より以下の分誓詞ニ不及候、  
是又可被達候、

一 越前家誓詞御願書

今度就御代替誓詞の儀奉願候、夫ニも不及儀御座候得共、心底願  
筆紙候得は、本望之至奉存候、依之奉願候、以上、



(二七) 御城江女中使

一 御城へ御前様ヨリ女中使被差<sup>※</sup>上儀、宝永六年丑四月二日より始り候、御用番本多伯耆守様ヨリ御留守居へ被仰渡、上様・御台様へ妻女より向後女使<sup>奥以女使</sup>を以て献上物等可被致候、大奥女中衆へ可被相談候、

(二八) 御登城有無日

一年中御定式御登城日

正月二日 三日 御無官 十五日 廿八日 二月十五日 三月朔日

三日 十五日 <sup>有無前日</sup> 四月朔日 十五日 廿八日 五月朔日

五日 十五日 <sup>廻状</sup> 六月朔日 十六日 七月朔日 七日 廿八日

八月朔日 十五日 九月朔日 九日 十五日 十月朔日 十五日

十一月朔日 十五日 十二月朔日 十五日 廿八日

一年中御城登無之日

二月朔日 廿八日 三月廿六日 五月廿八日 六月十五日

廿八日 七月十五日 八月廿八日 九月廿八日 十月廿八日

十一月廿八日



通昭錄卷之四十二

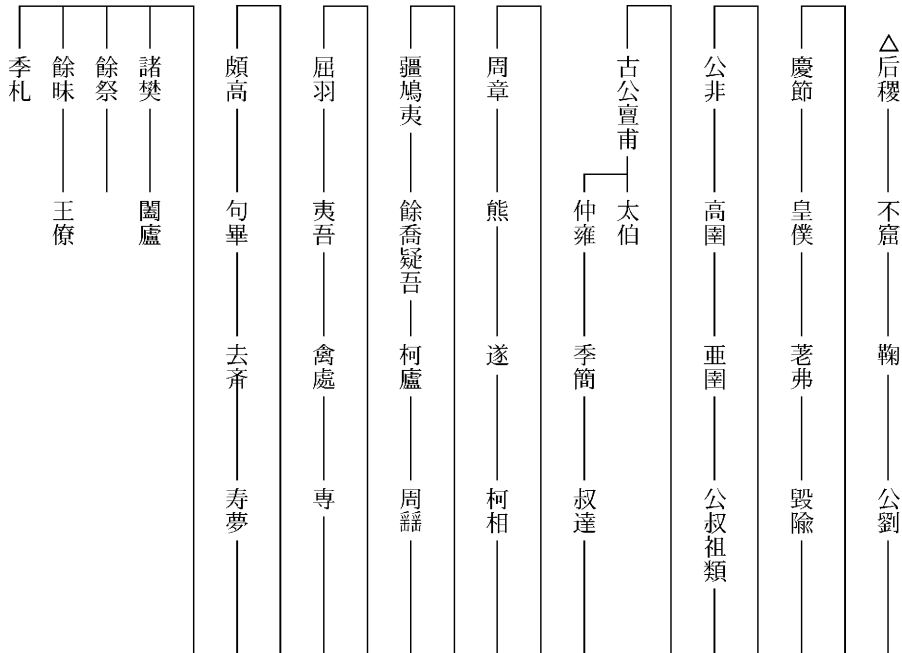


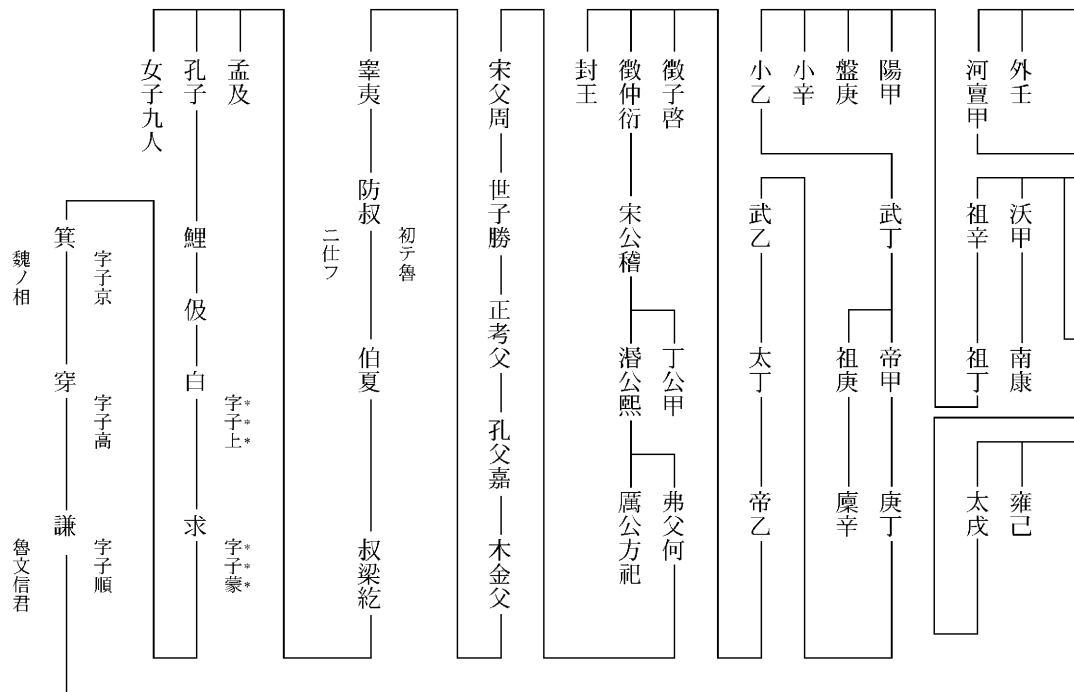
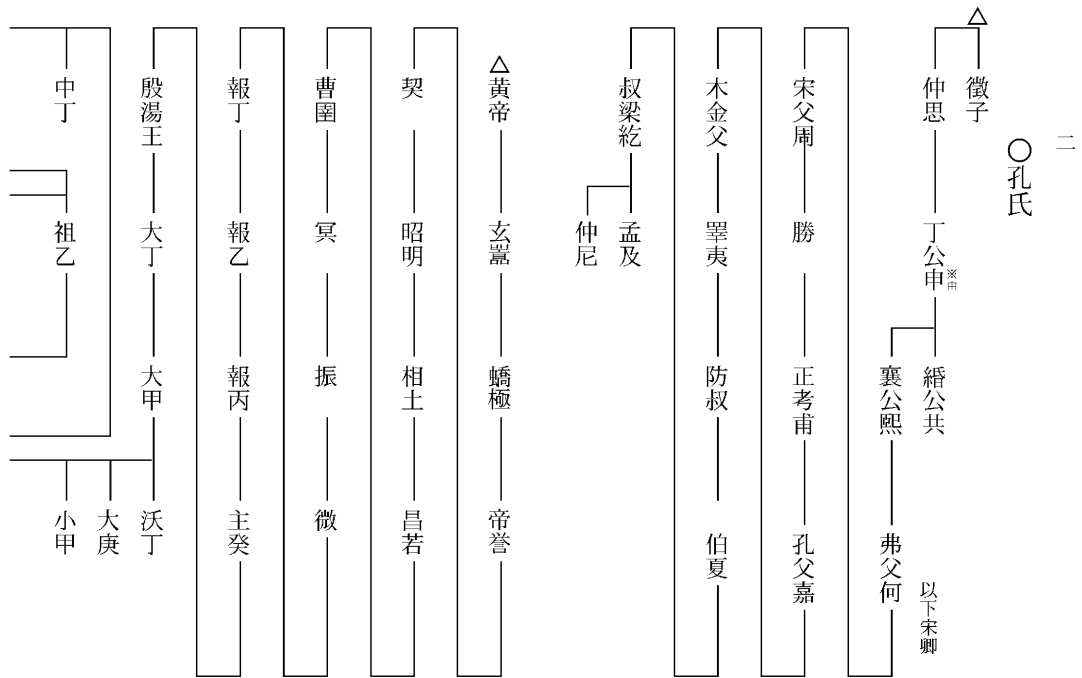
通昭録卷之四十二

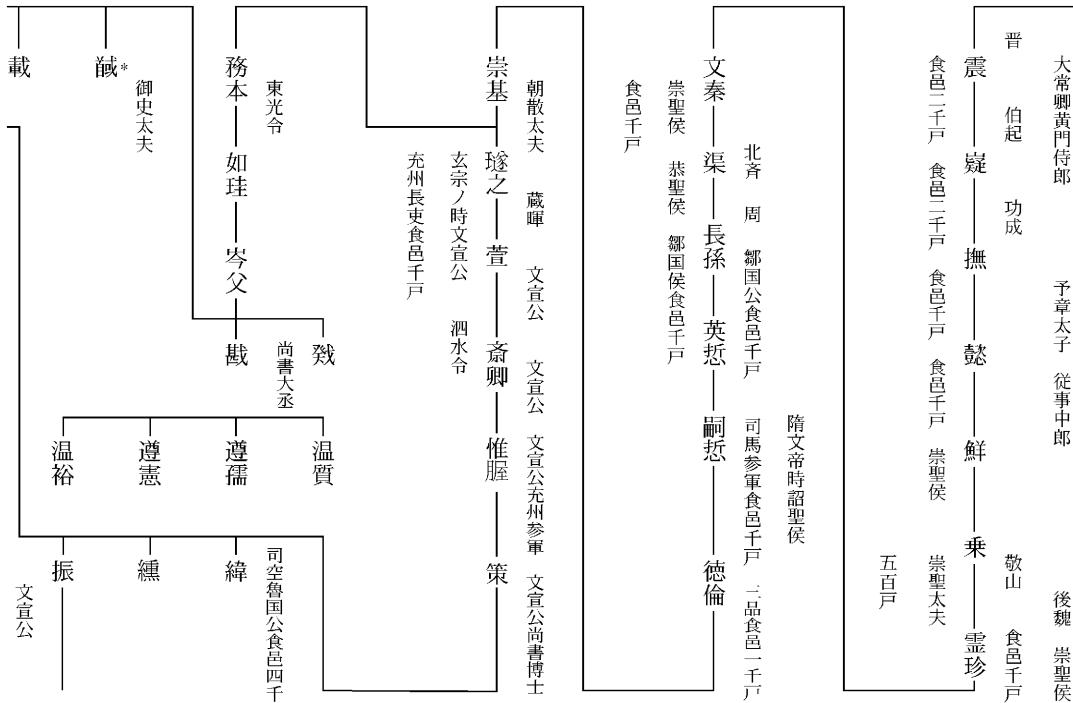
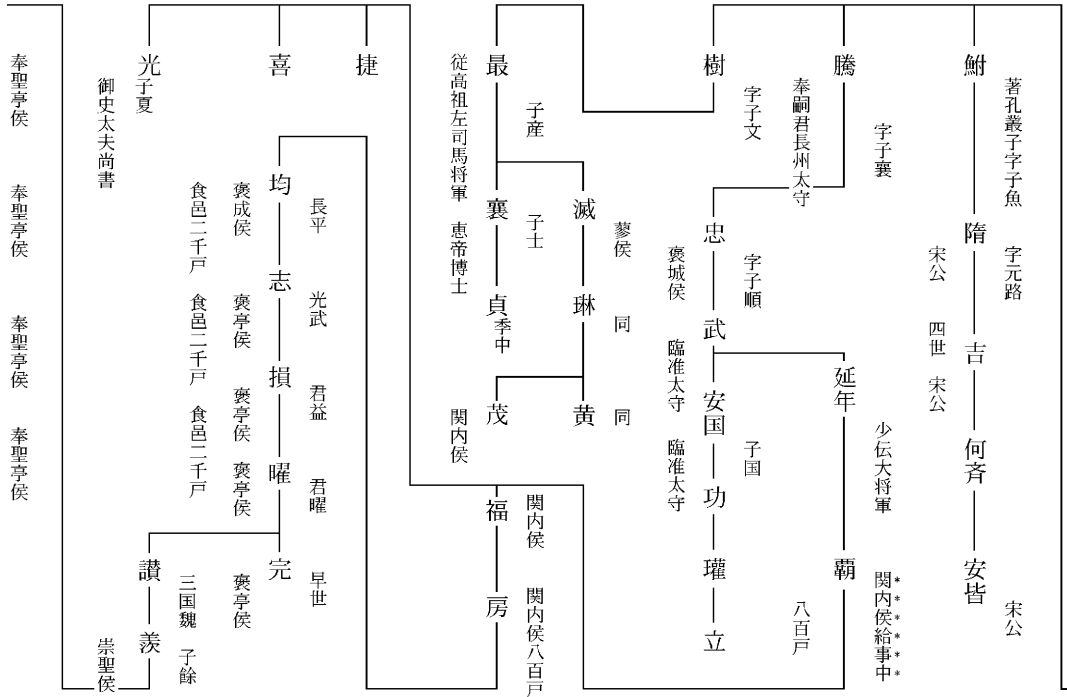
〔日中諸氏系圖〕

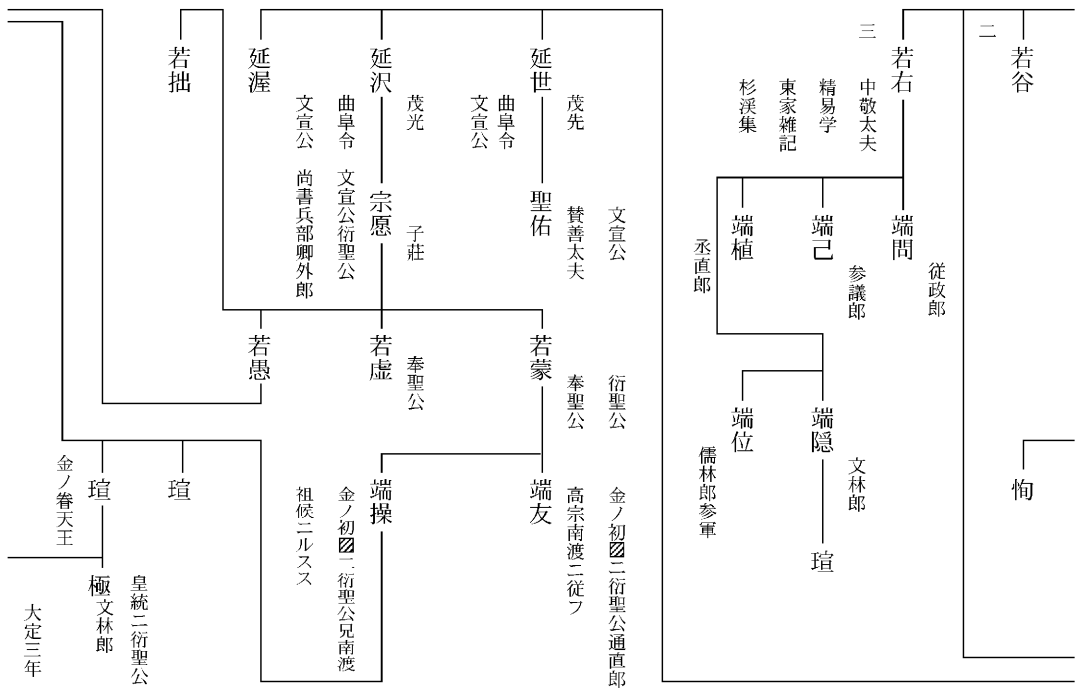
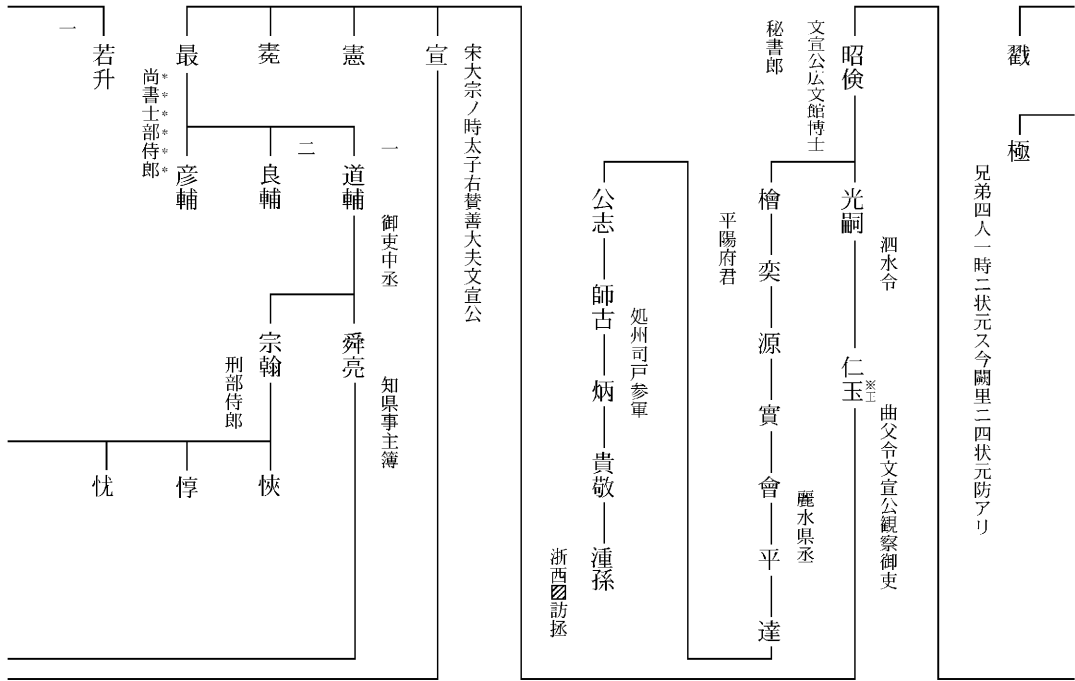
- |        |          |          |        |
|--------|----------|----------|--------|
| 一 吳泰伯  | 八 斯波     | 十五 信平流   | 廿二 佐竹  |
| 二 孔氏   | 九 武田     | 十六 南部    | 二三 志岐  |
| 三 漢世系  | 十 細川     | 十七 種子嶋   | 二四 河野  |
| 四 清和源氏 | 十一 平氏    | 十八 有馬    |        |
| 五 足利市  | 十二 畠山    | 十九 飯隈    | 二六 久留嶋 |
| 六 今川   | 十三 小笠原   | 二十 藤氏大綱  |        |
| 七 基氏流  | 十四 平松石井  | 廿一 藤有馬   | 二八 烏丸  |
|        | 二九 裏松    | 三八 羽田    | 四六 穎川  |
|        | 三十 勘解由小路 | 四十 藤崎坂元  | 四七 児玉  |
|        | 三一 東園    | 白石永田     | 四八 星山  |
|        | 三二 鍋嶋    | 四十一 梶原   | 四九 田中  |
|        | 三三 大友    | 四十二 鎌田二家 | 五十 税所  |
|        | 三四 伊達    | 四三 秩父    | 五一 幾朴  |
|        | 三五 高橋    | 四四 小倉    | 五二 細江  |
|        | 三六 荅田    | 四五 執印    | 五三 松元  |
|        | 三七 戸田    | 四七 川西    | 五四 荒武  |
|        |          |          | 六三 川田  |
|        |          |          | 六四 今村  |

○吳太伯

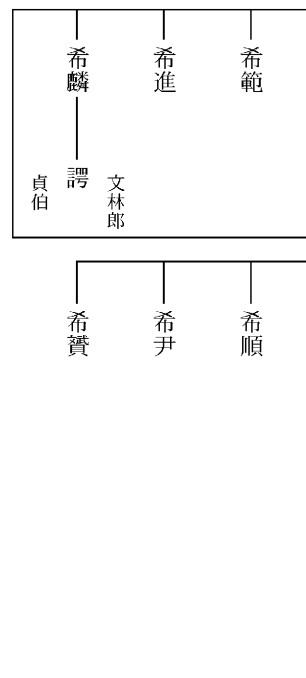
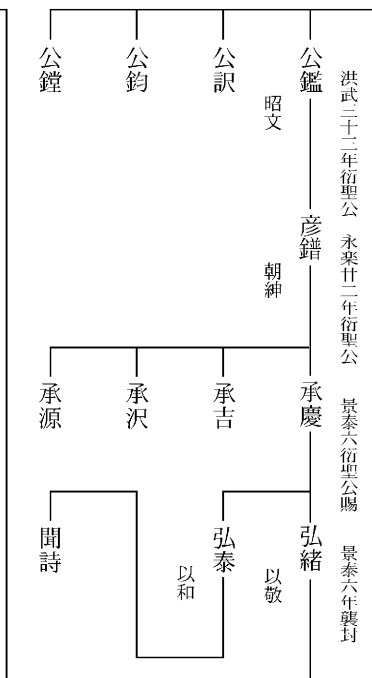
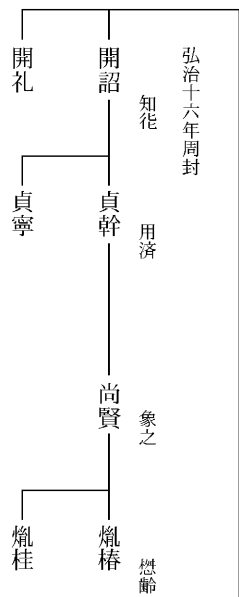
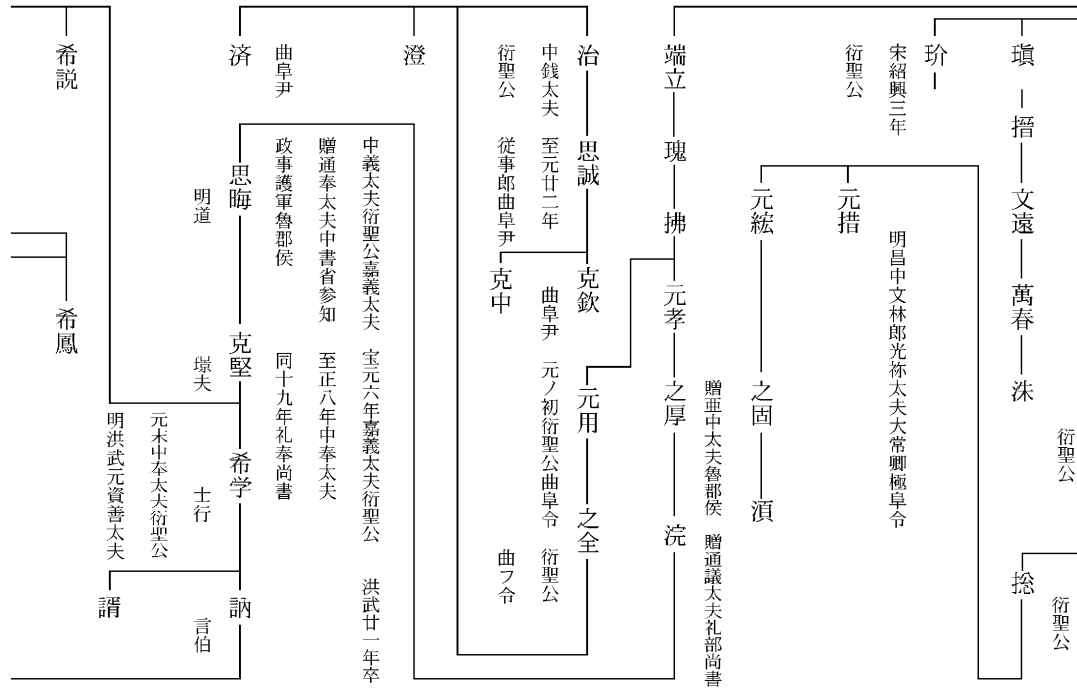




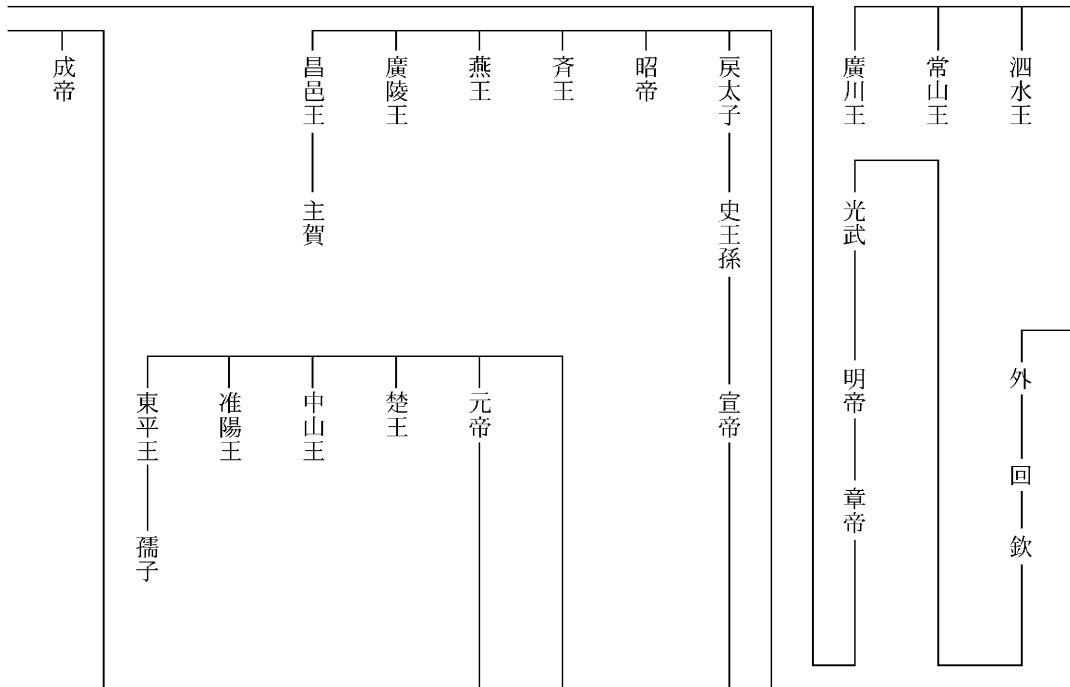
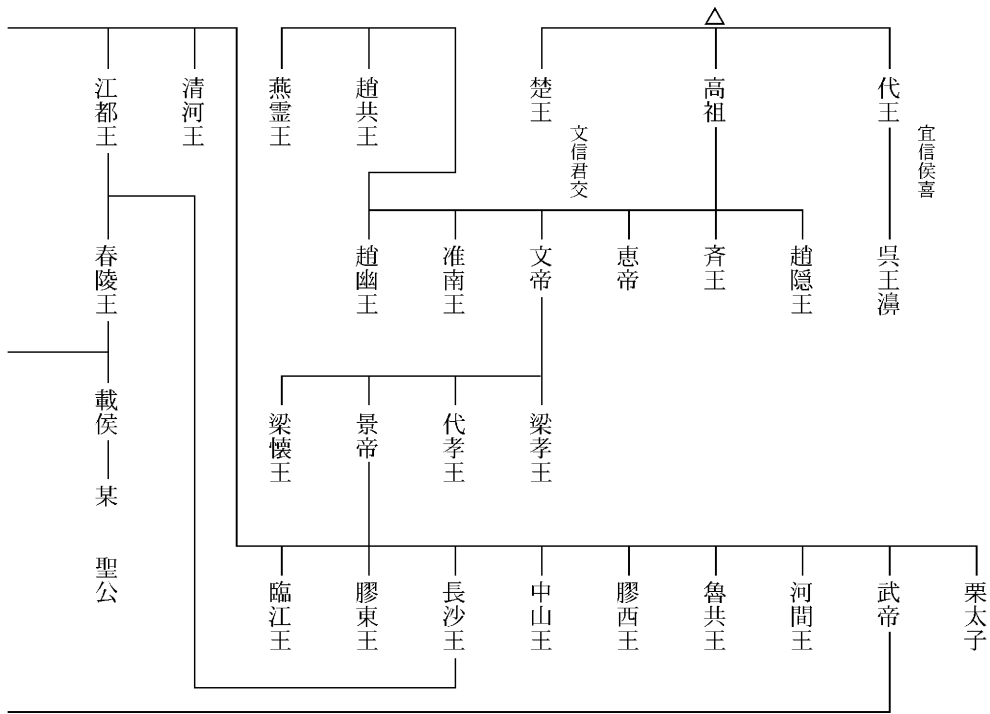


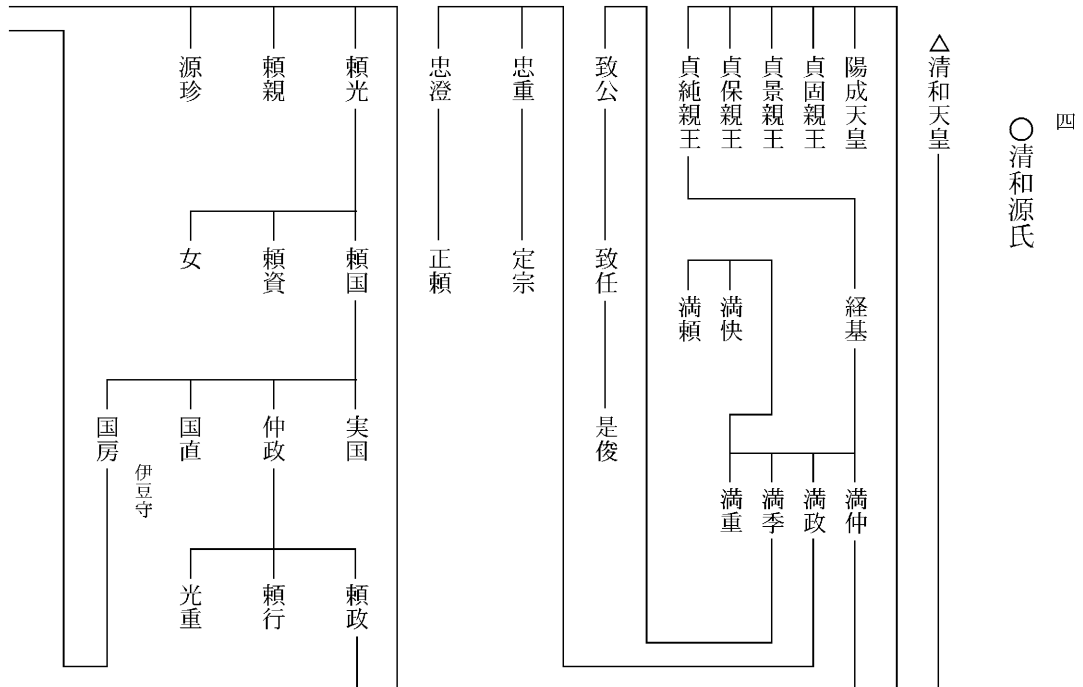
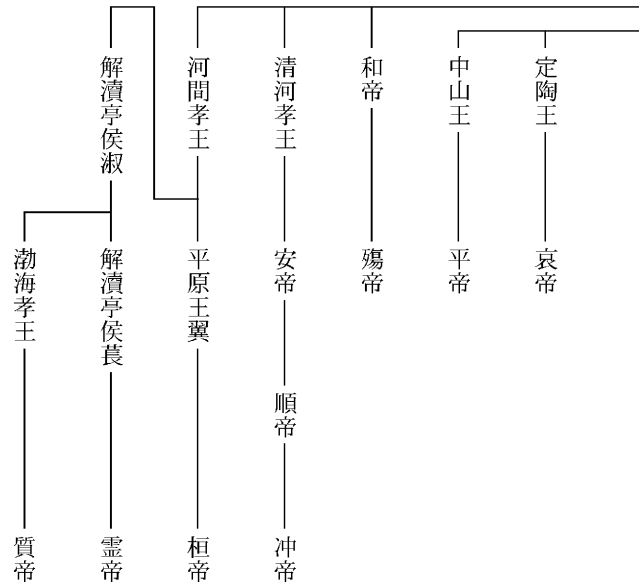


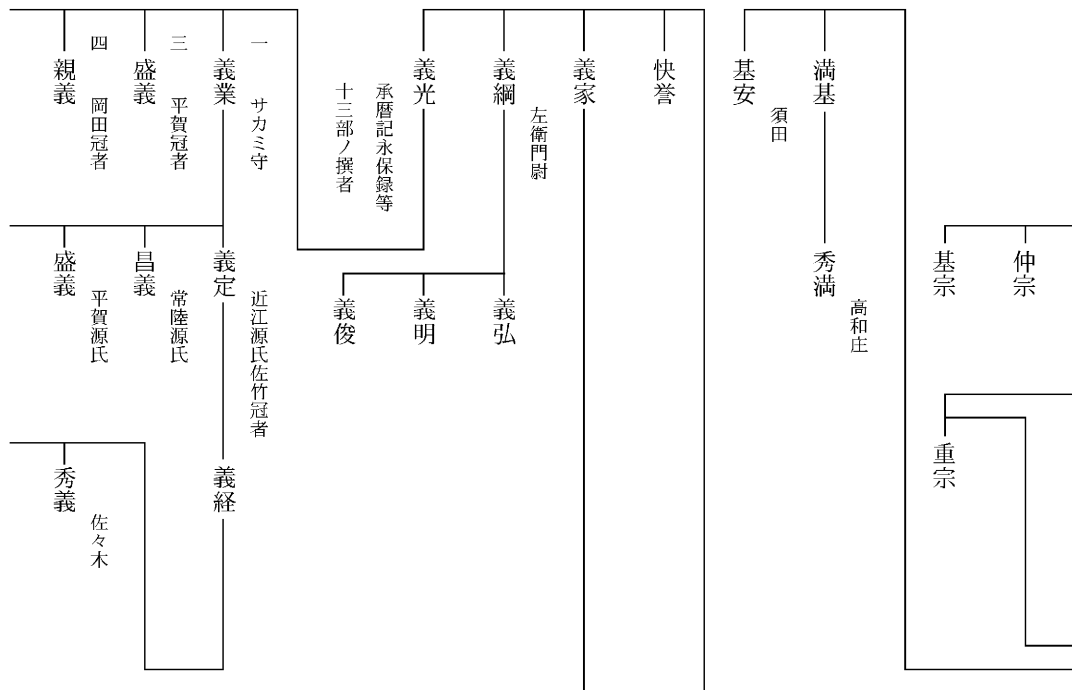
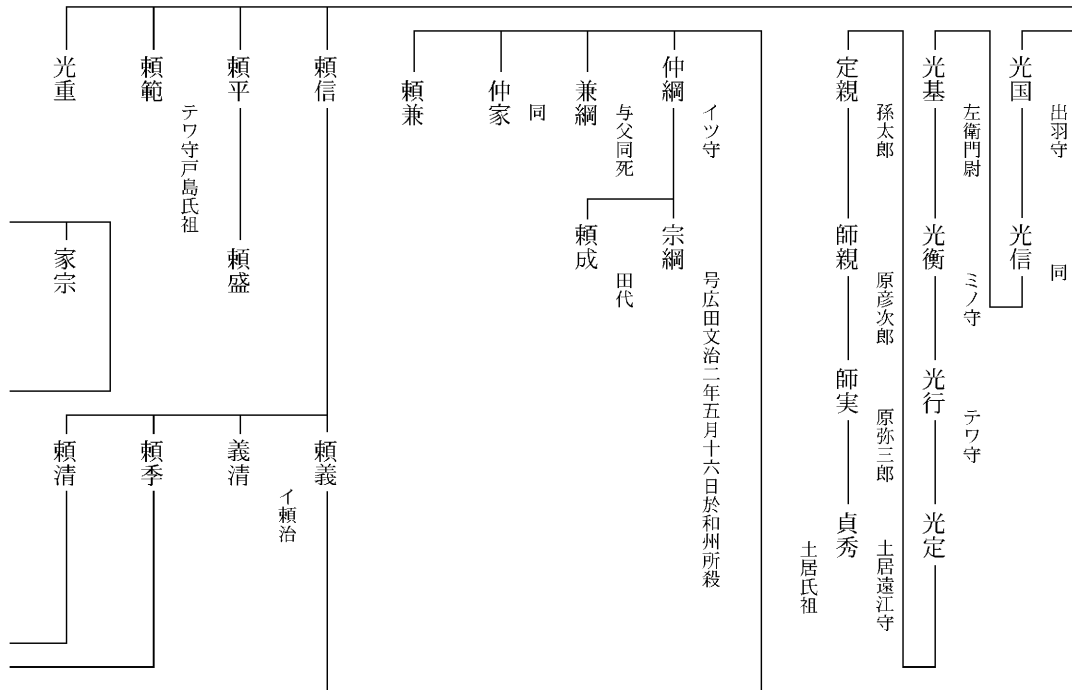


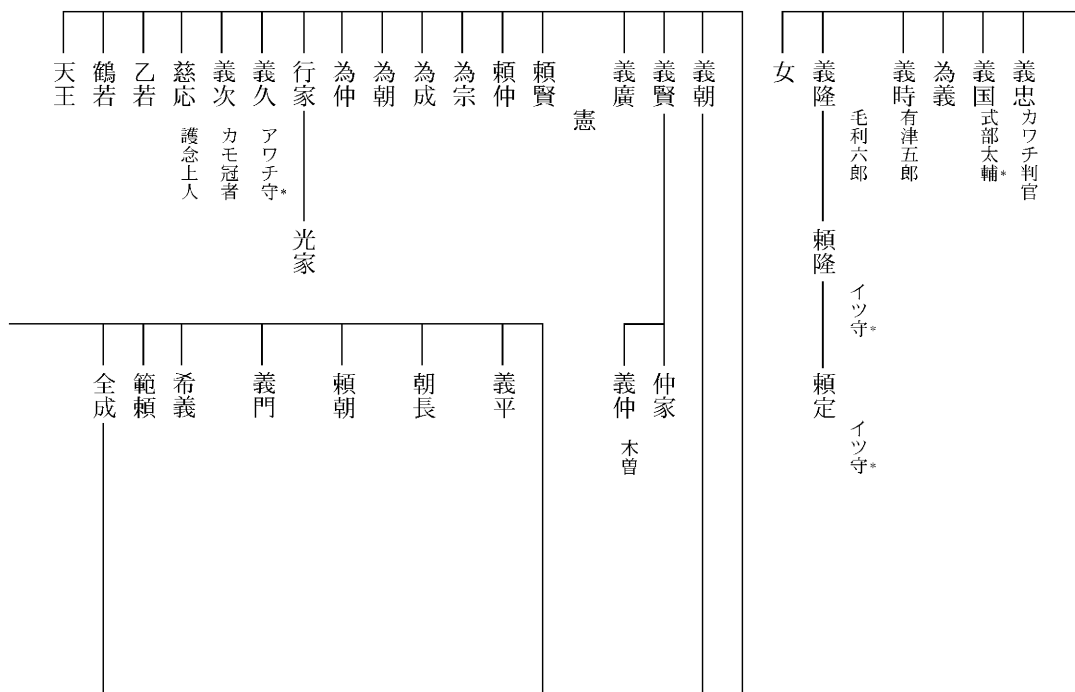
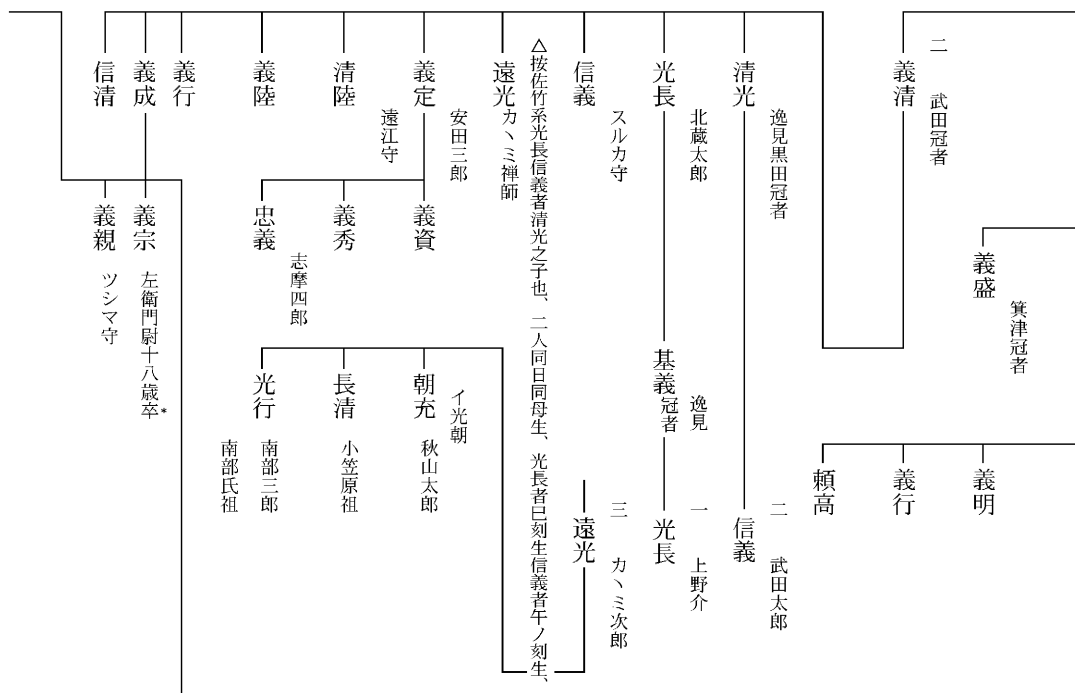


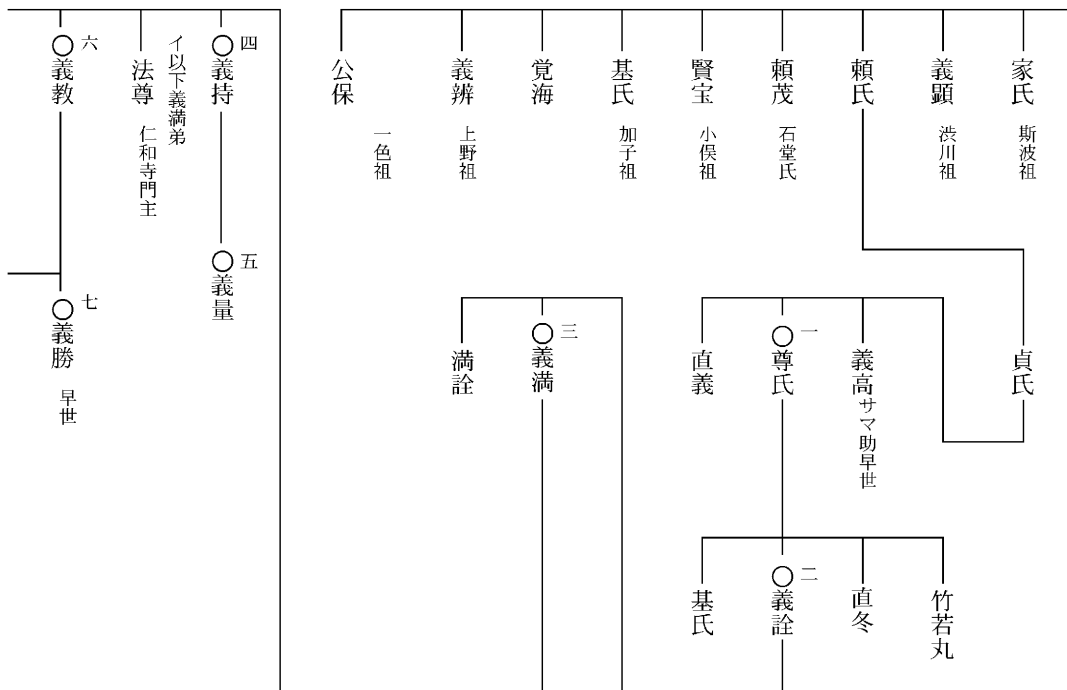
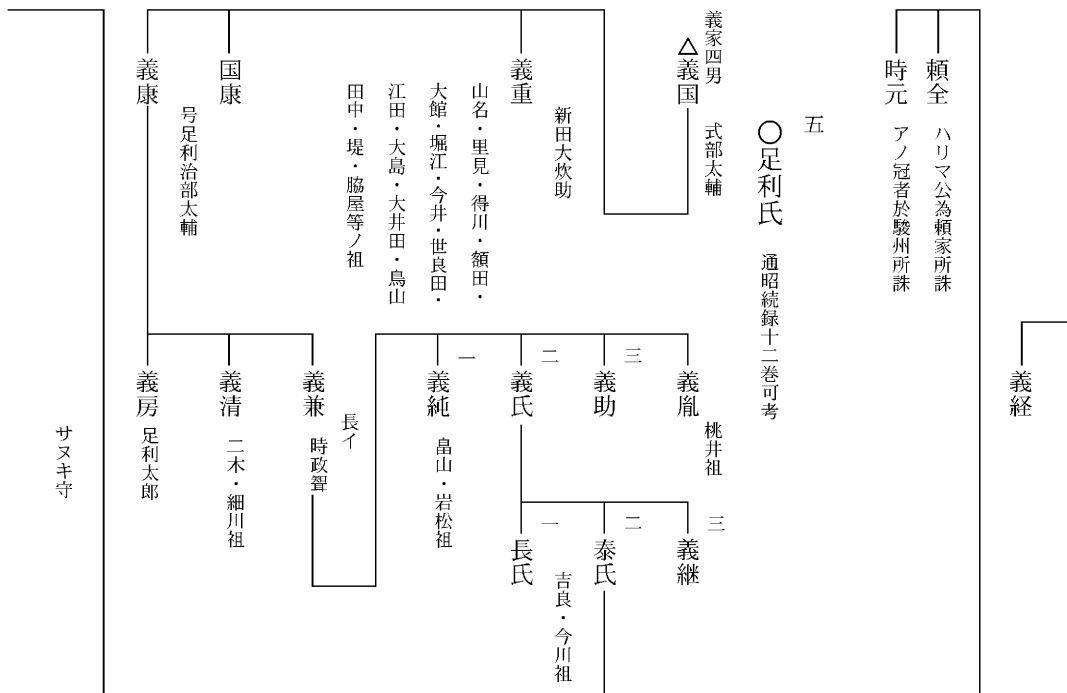
三  
○漢世系

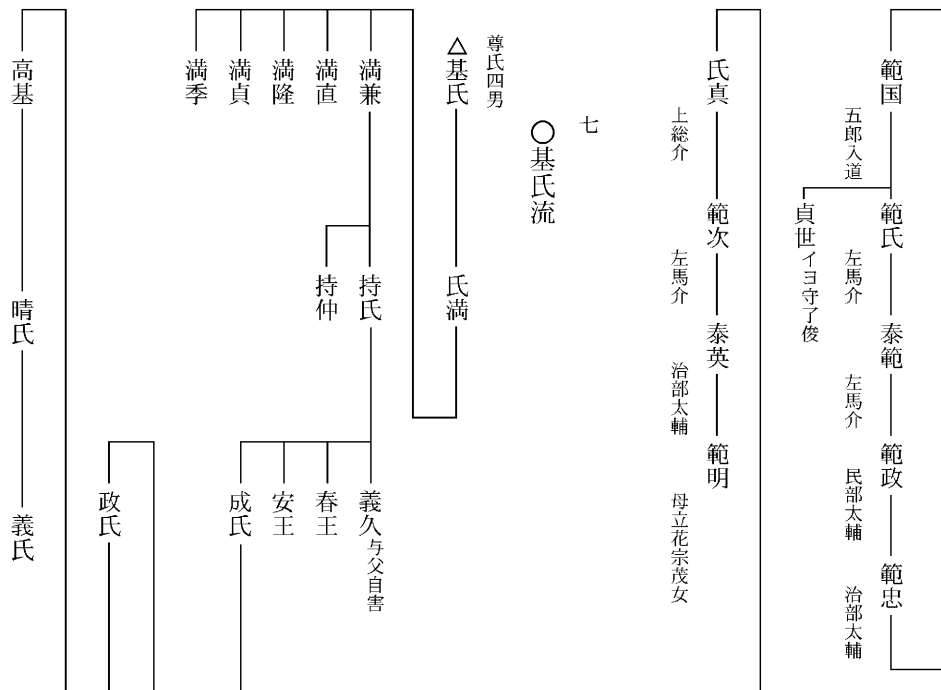
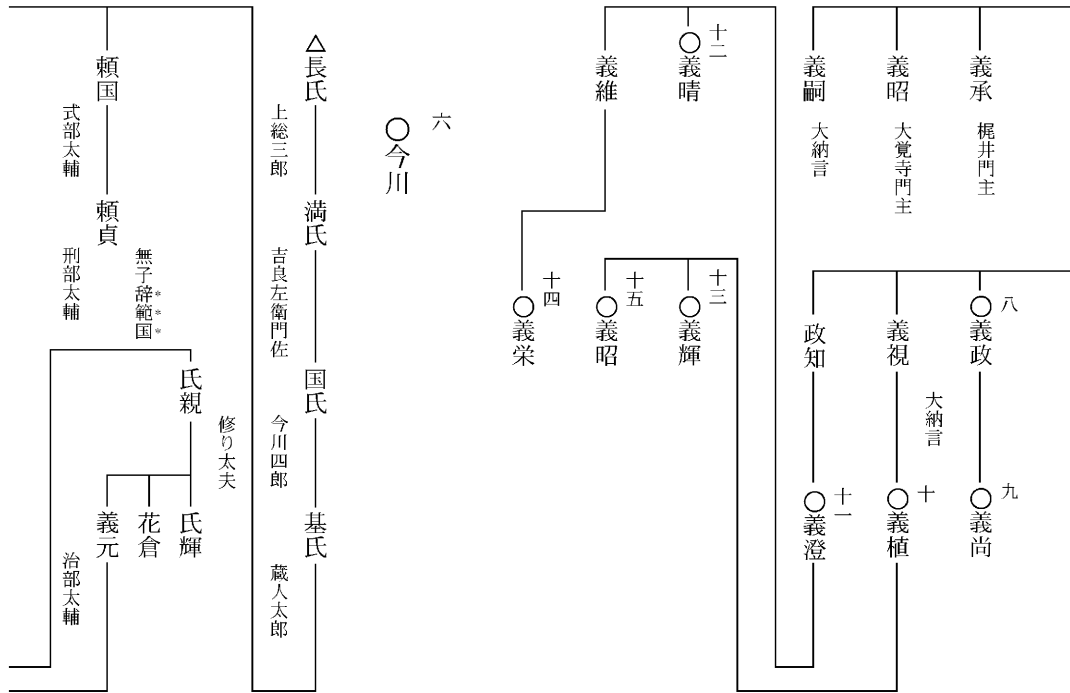






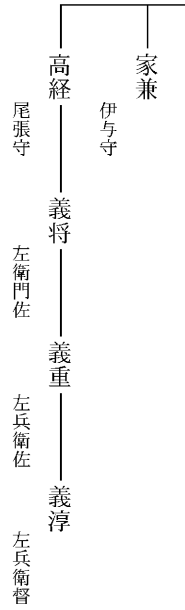
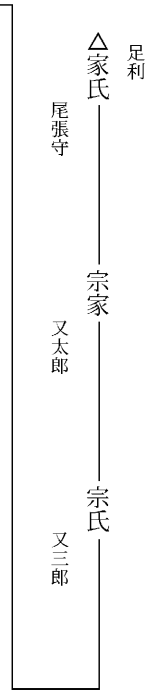






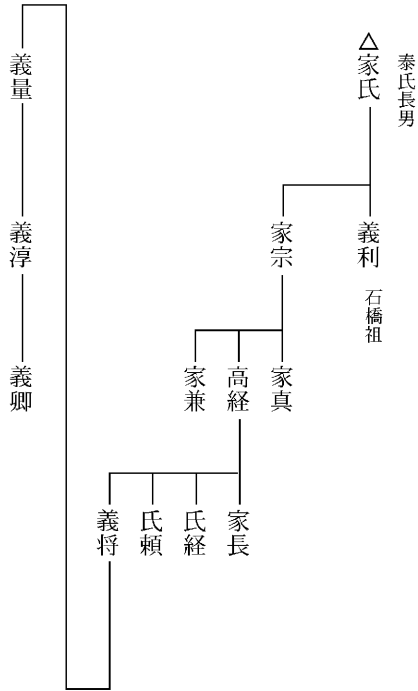
八

○斯波



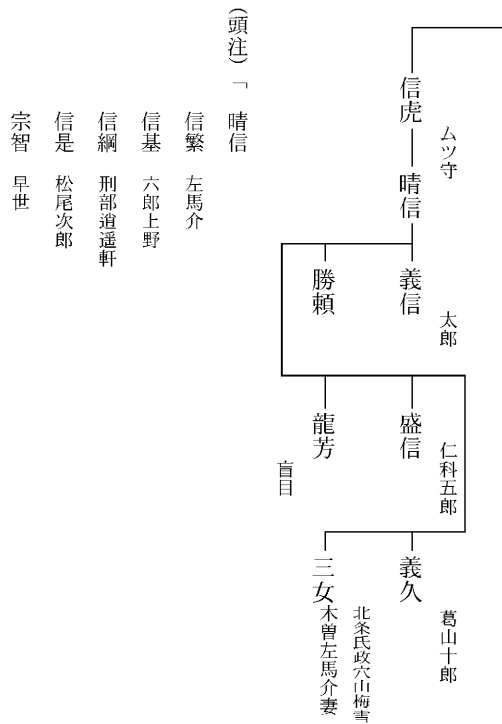
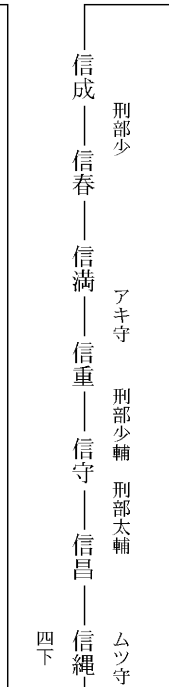
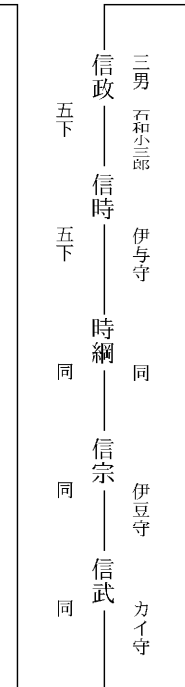
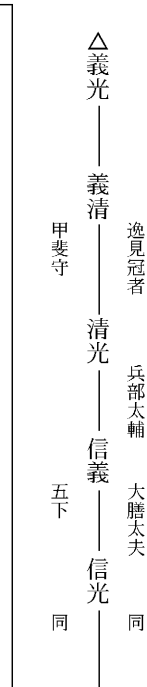
一本

○斯波氏

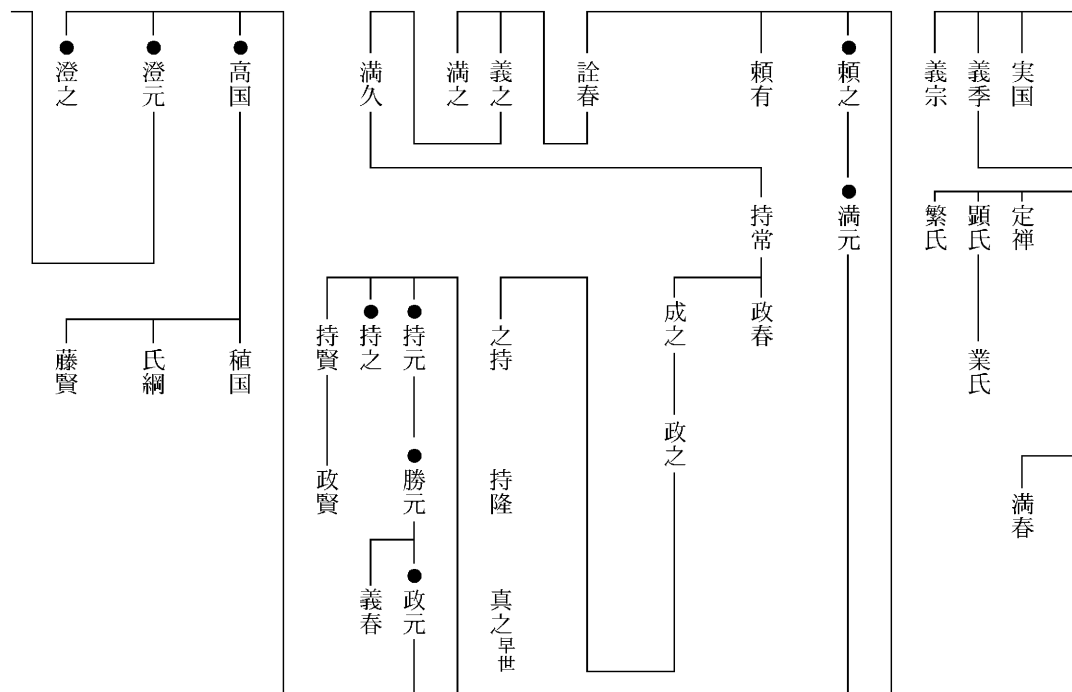
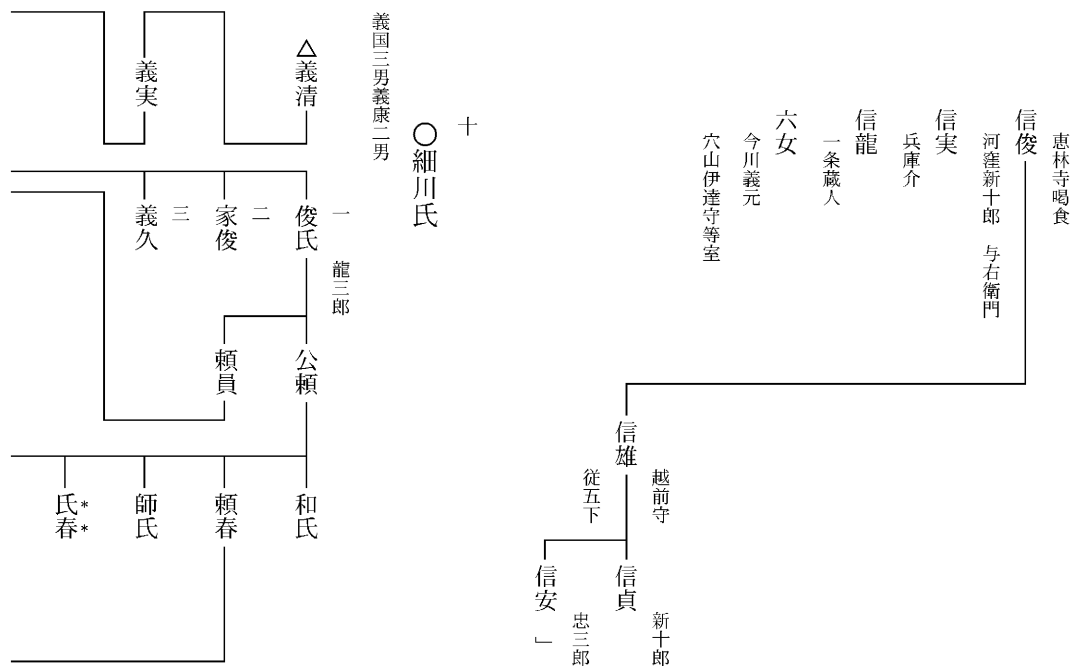


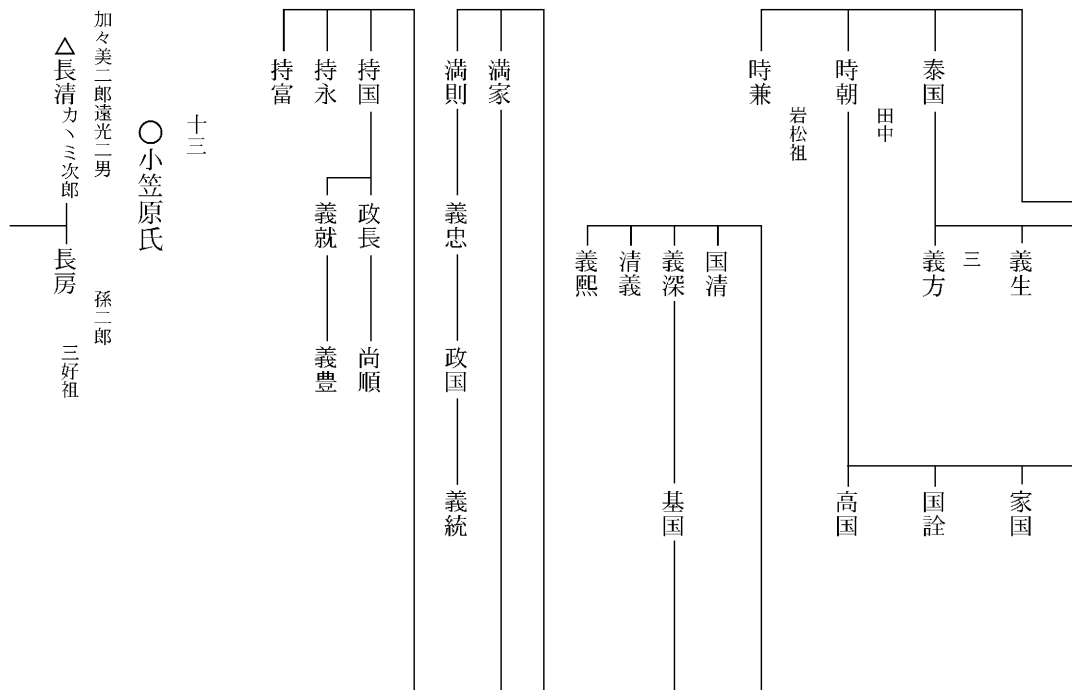
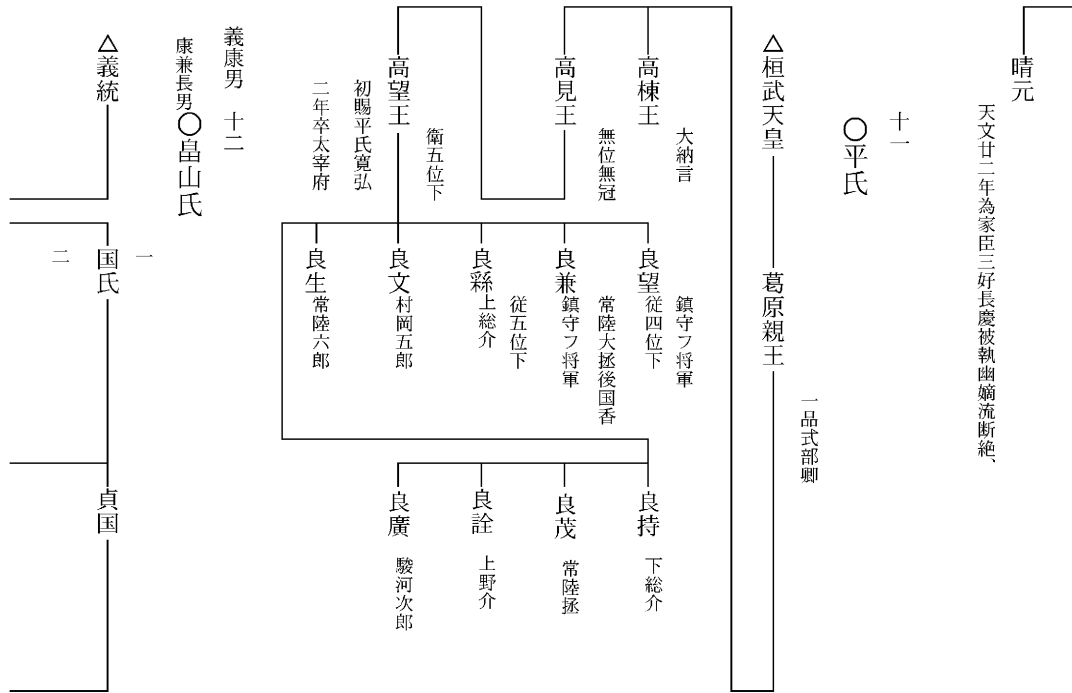
九

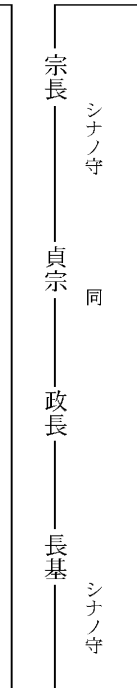
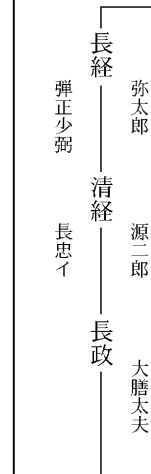
○武田氏





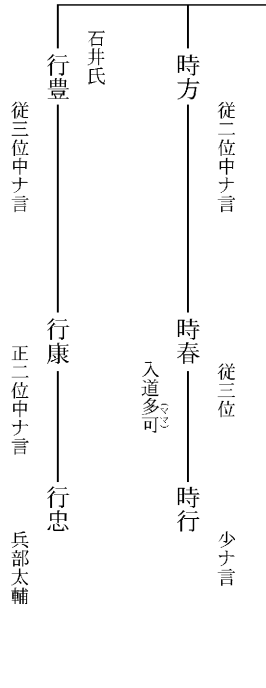
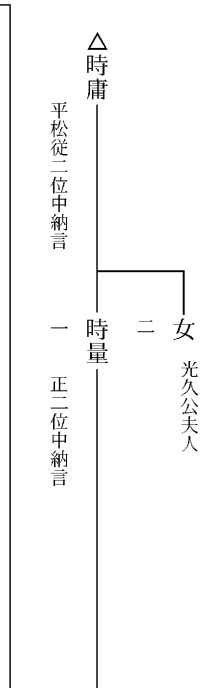






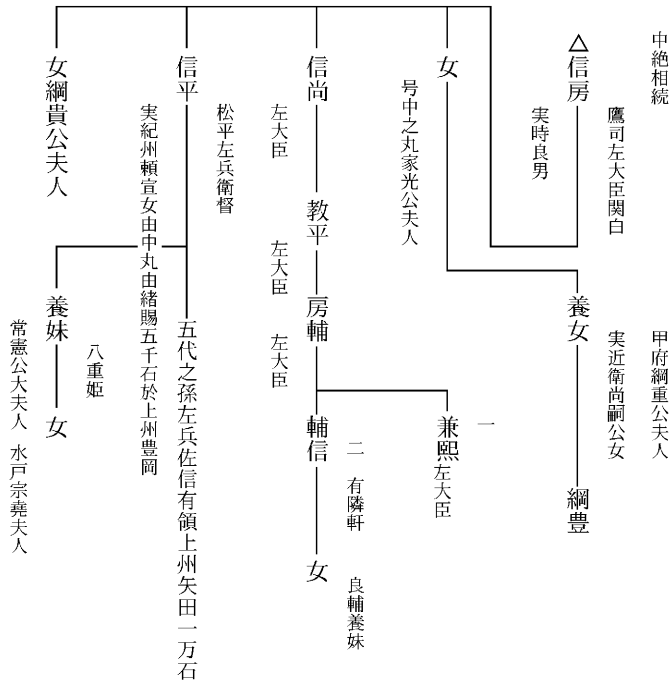
十四

○平松氏・石井氏



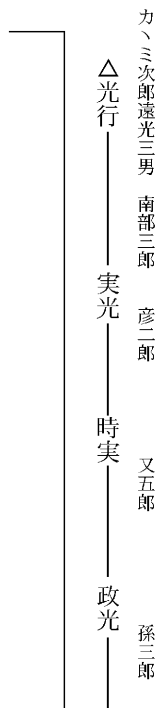
十五

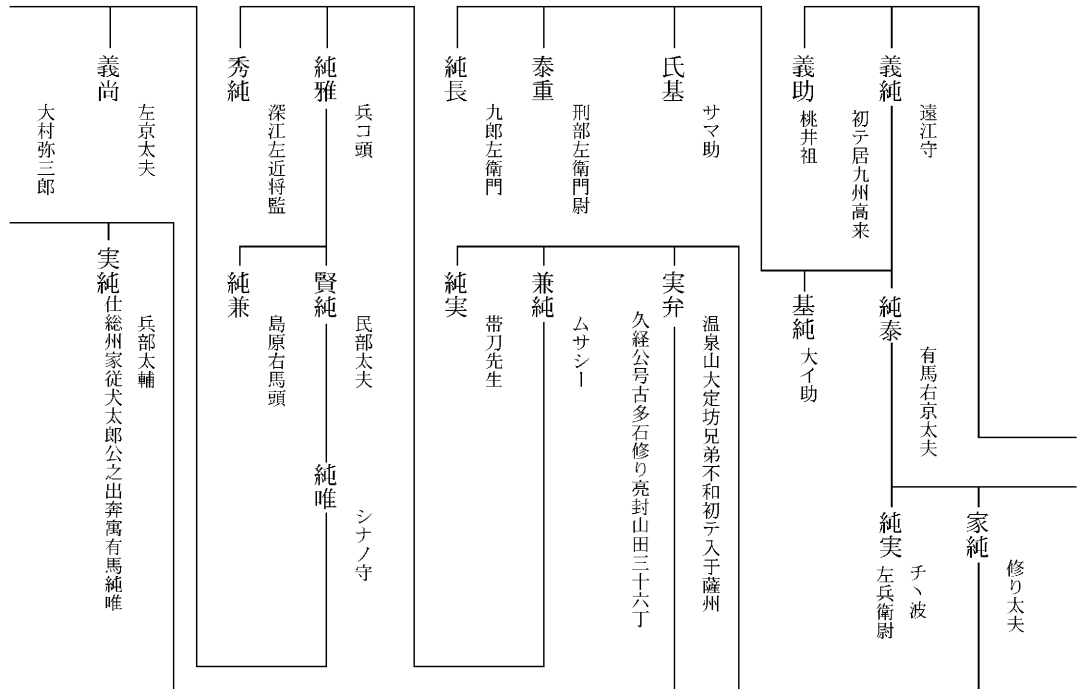
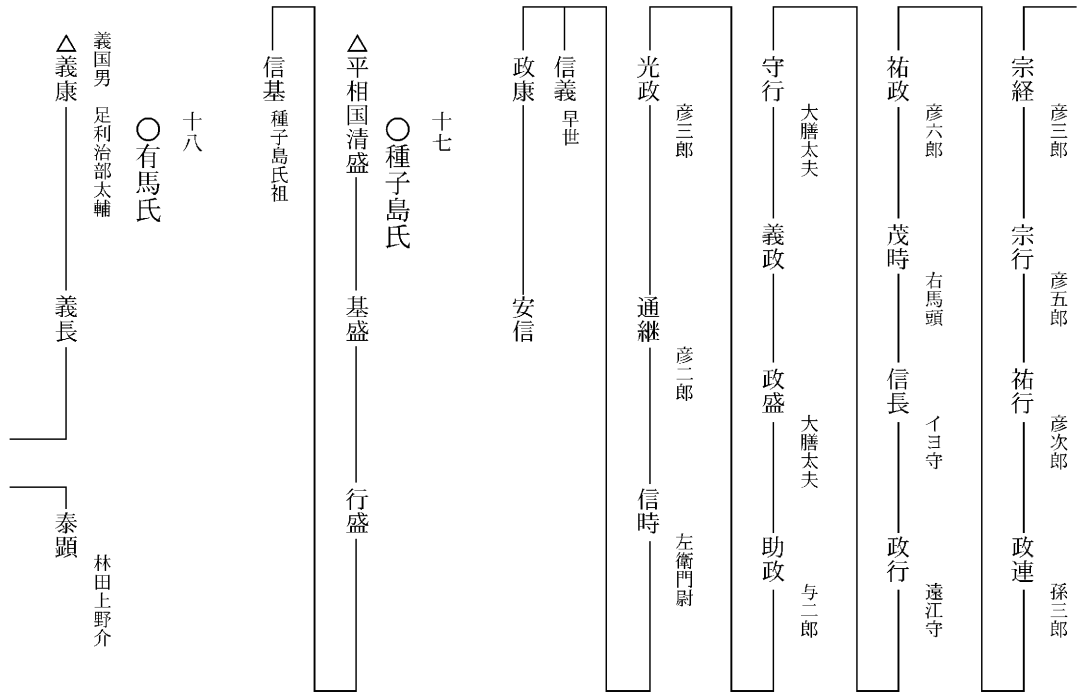
○信有家

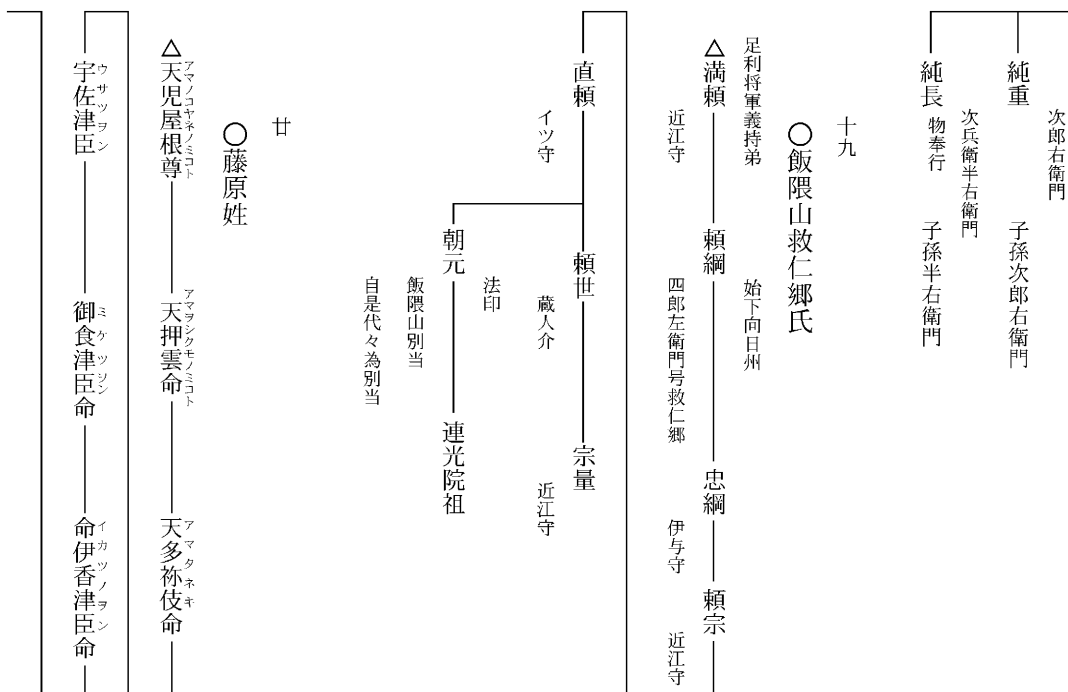
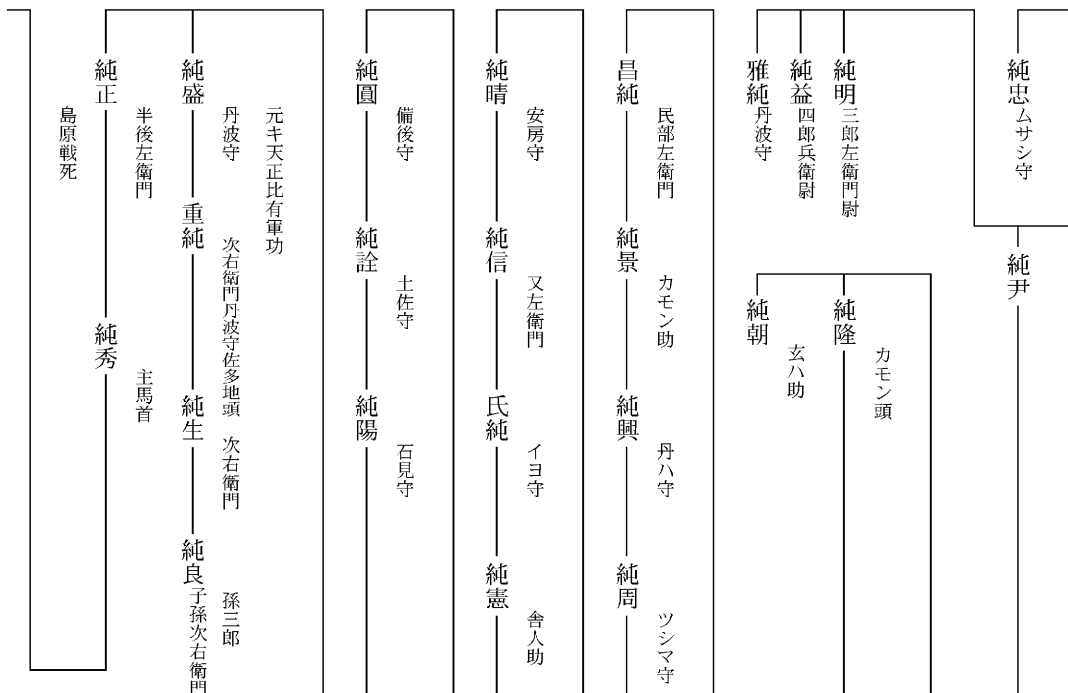


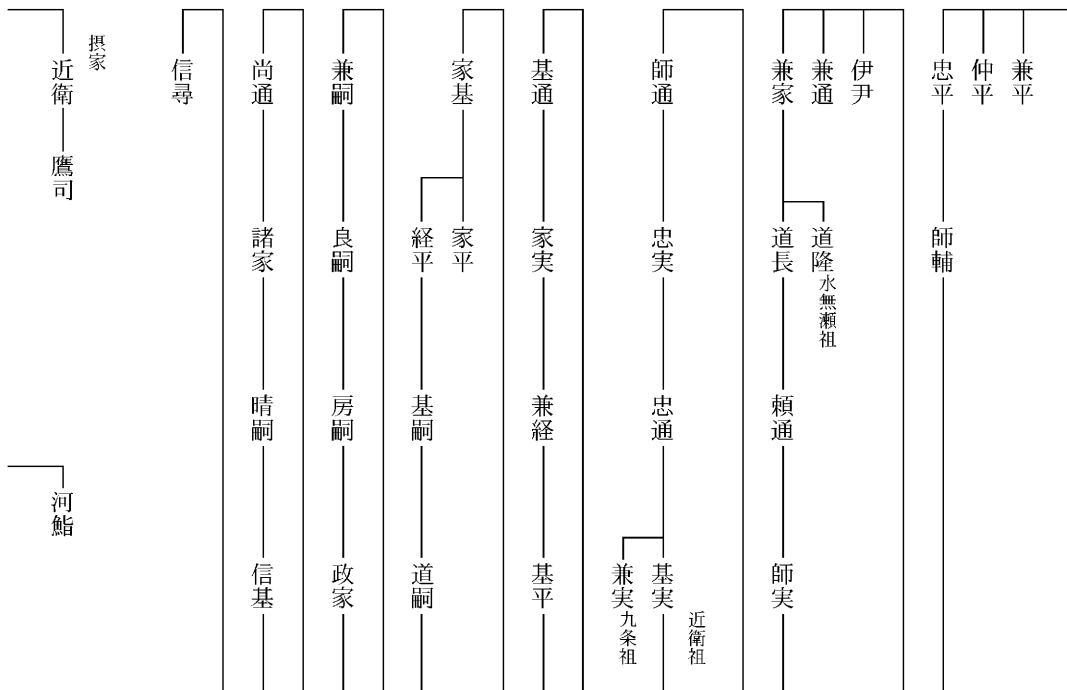
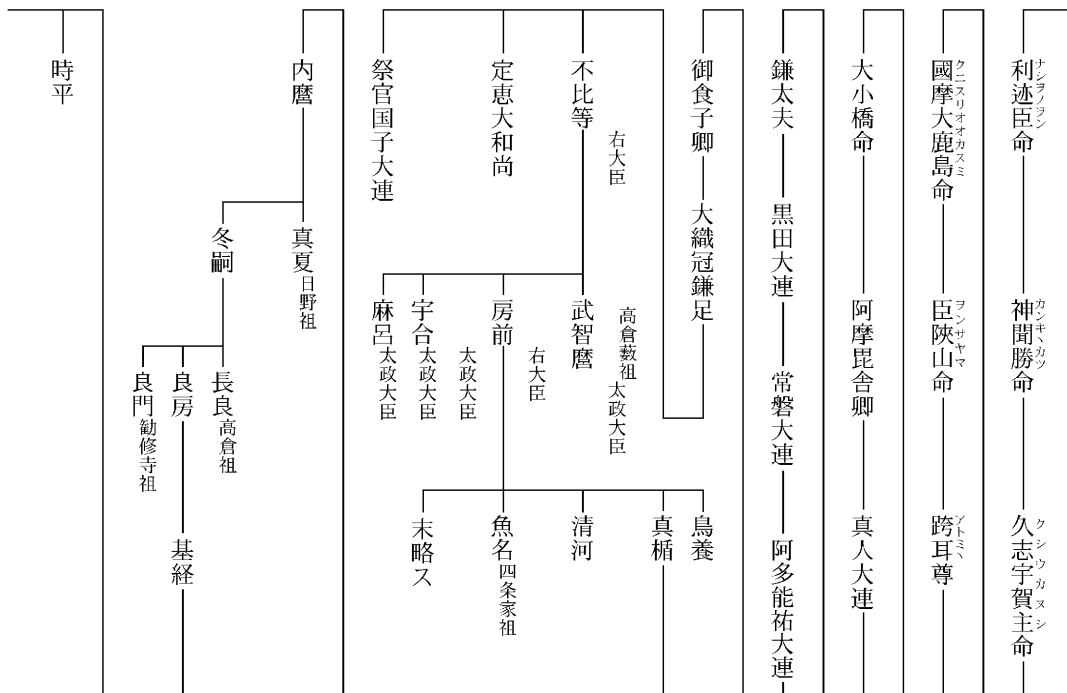
十六

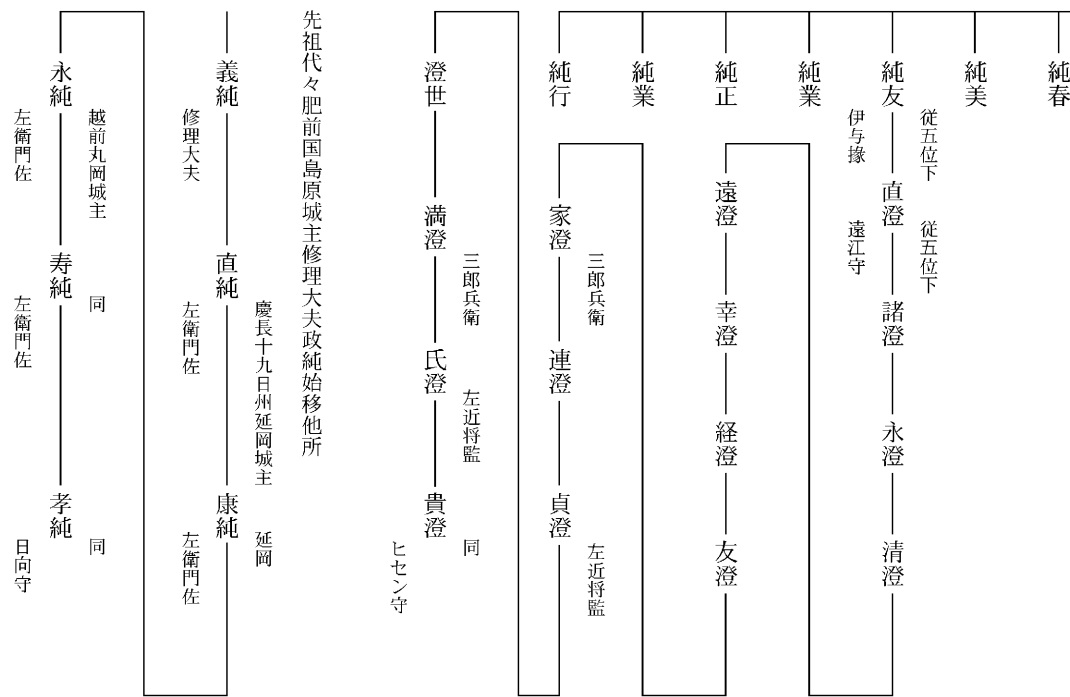
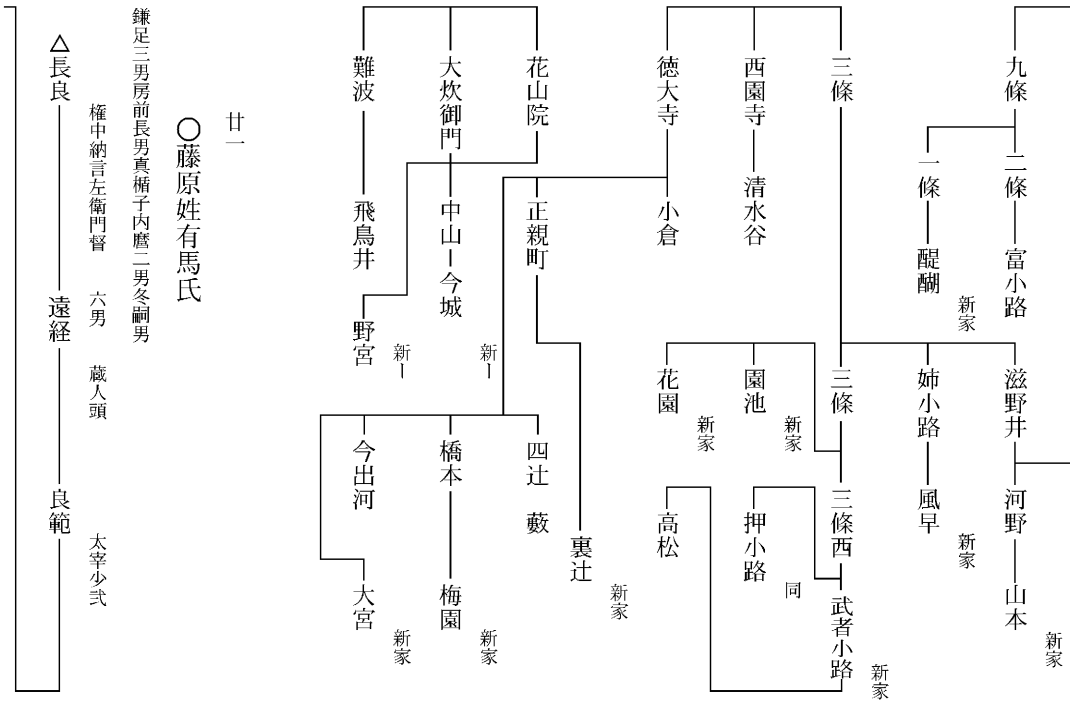
○南部氏



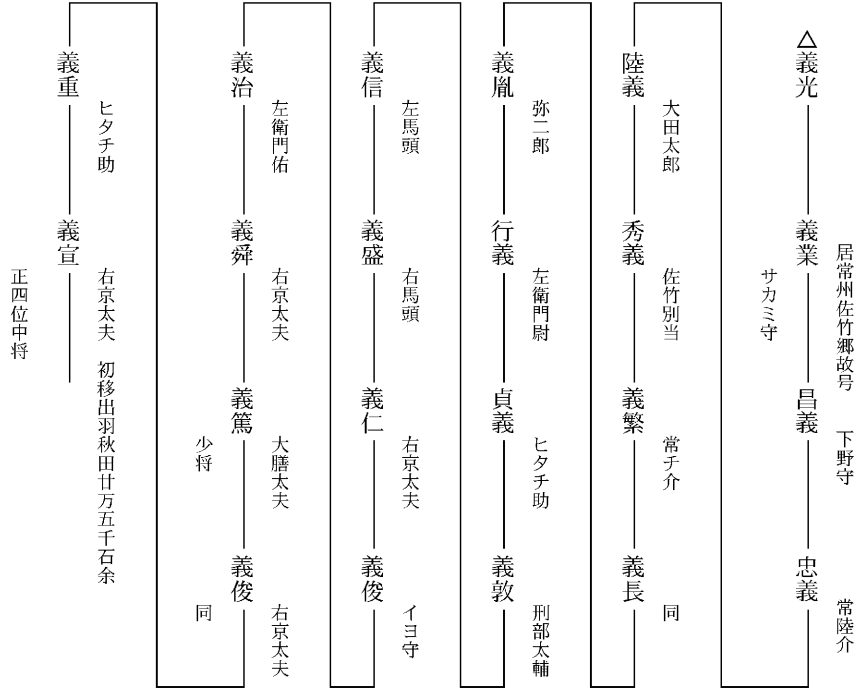




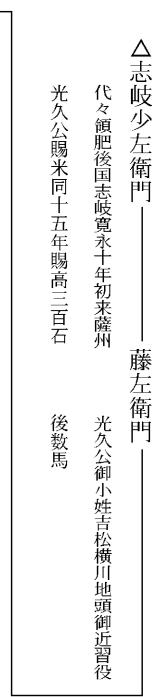




○佐竹氏



○志岐氏

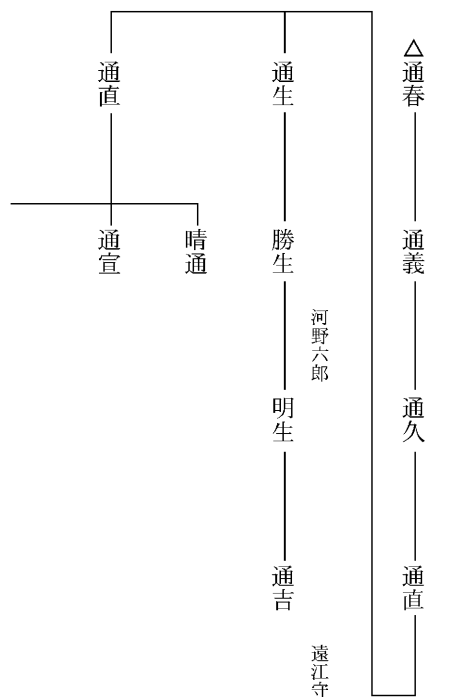


藤左衛門 — 藤右衛門 — 兵藤次

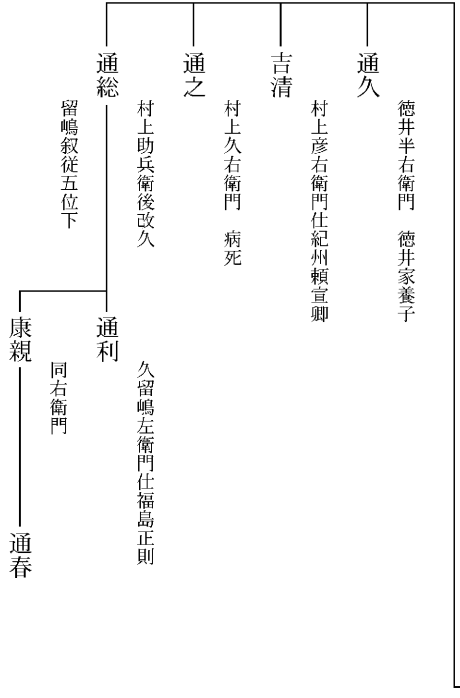
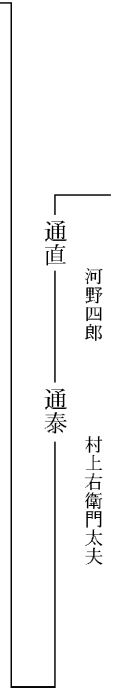
新番入代々小番 御馬廻 御側御小姓

志岐家年頭持參太刀田尻中西一列御見得御太刀二種一荷進上之家

○久留島



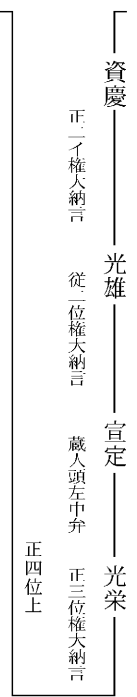
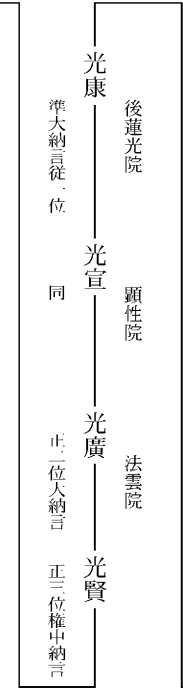
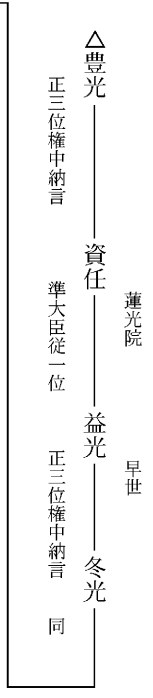




二八

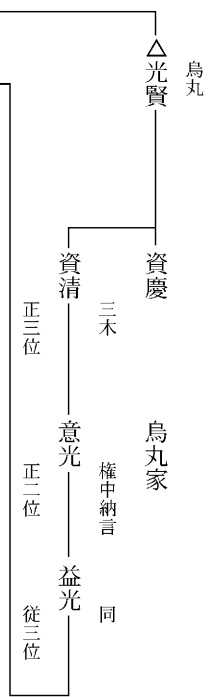
○烏丸家

日野家廿代裏松大納言資康二男

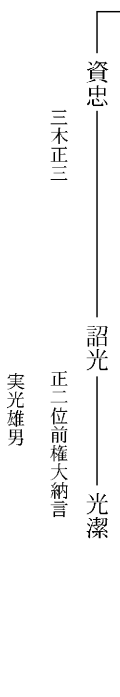


二九

○裏松家



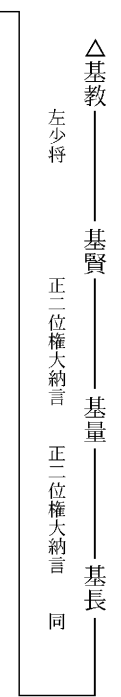
勘ヶ由小路家

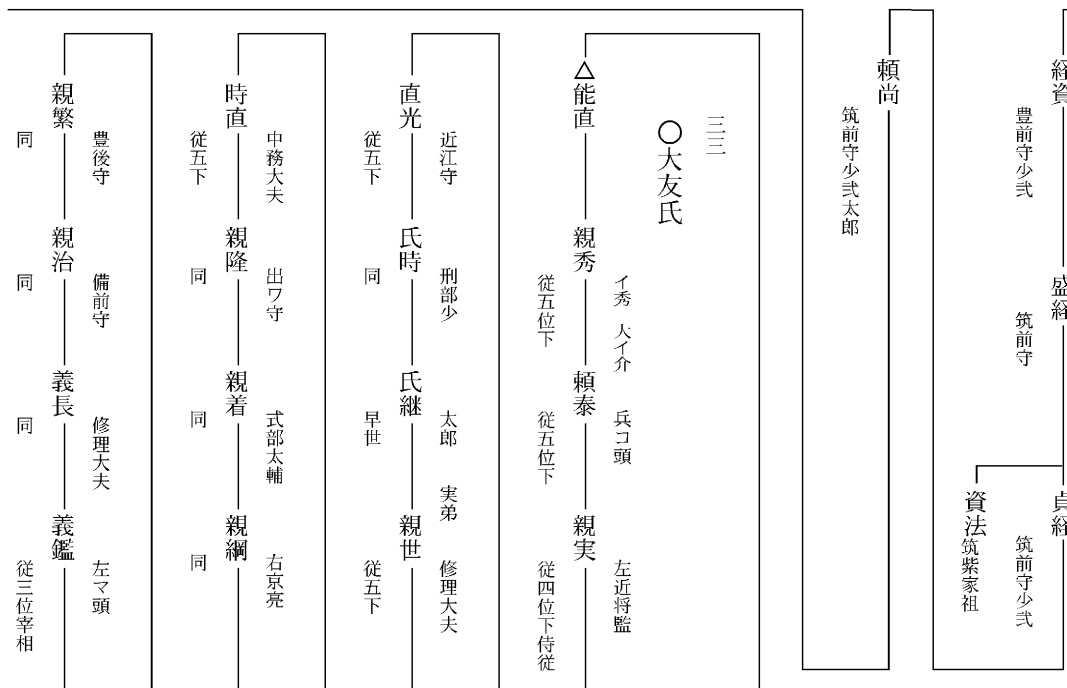
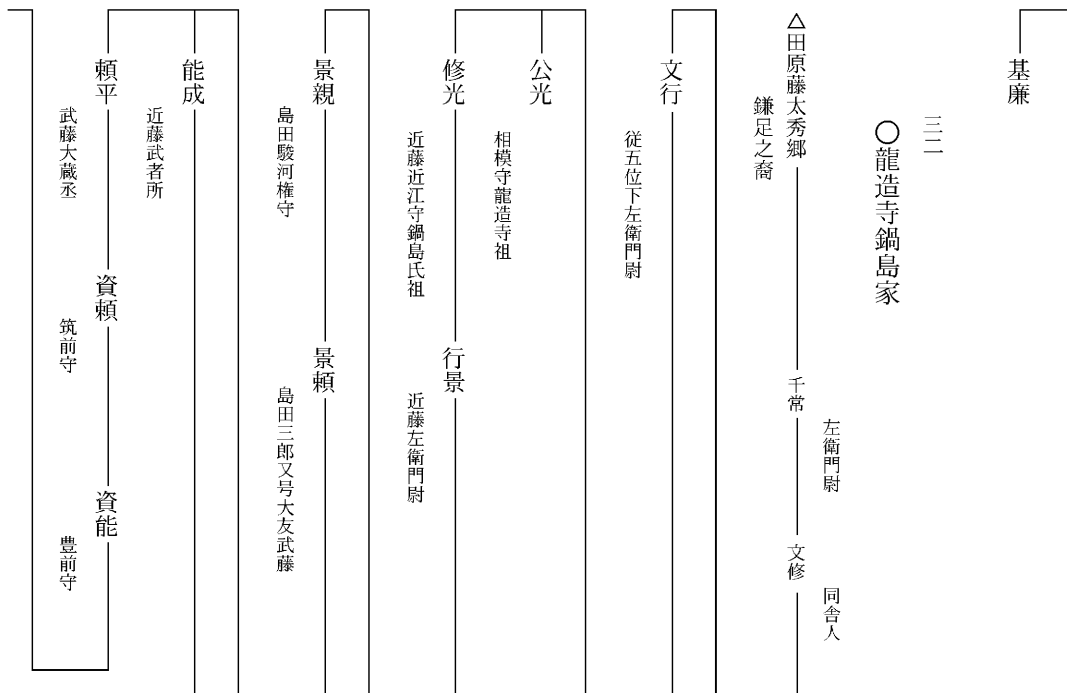


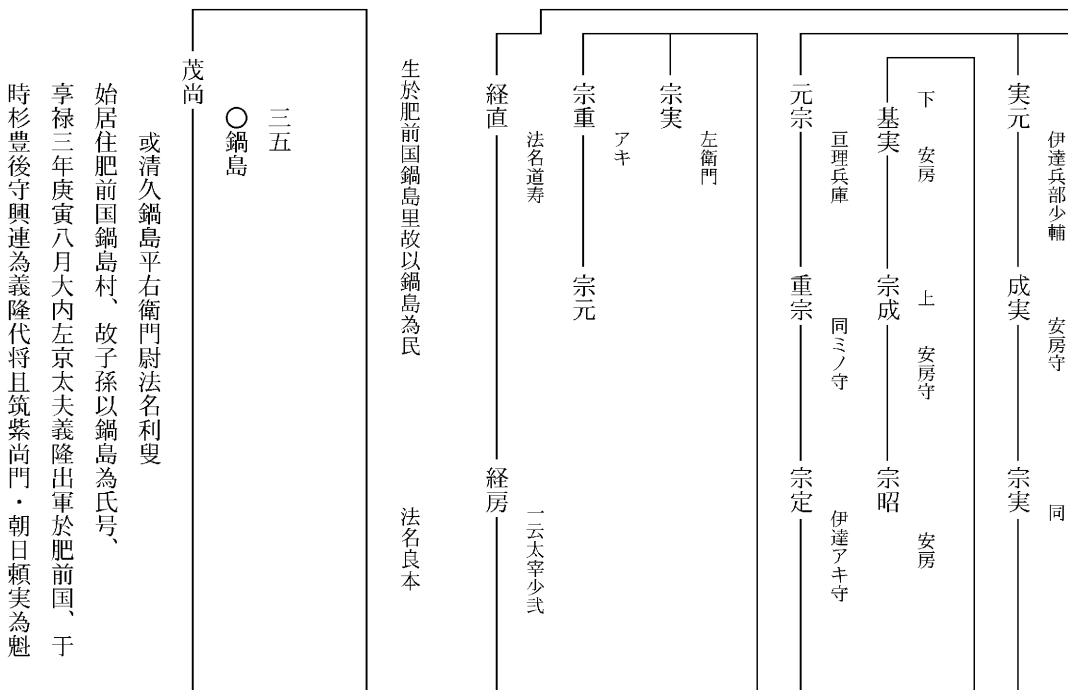
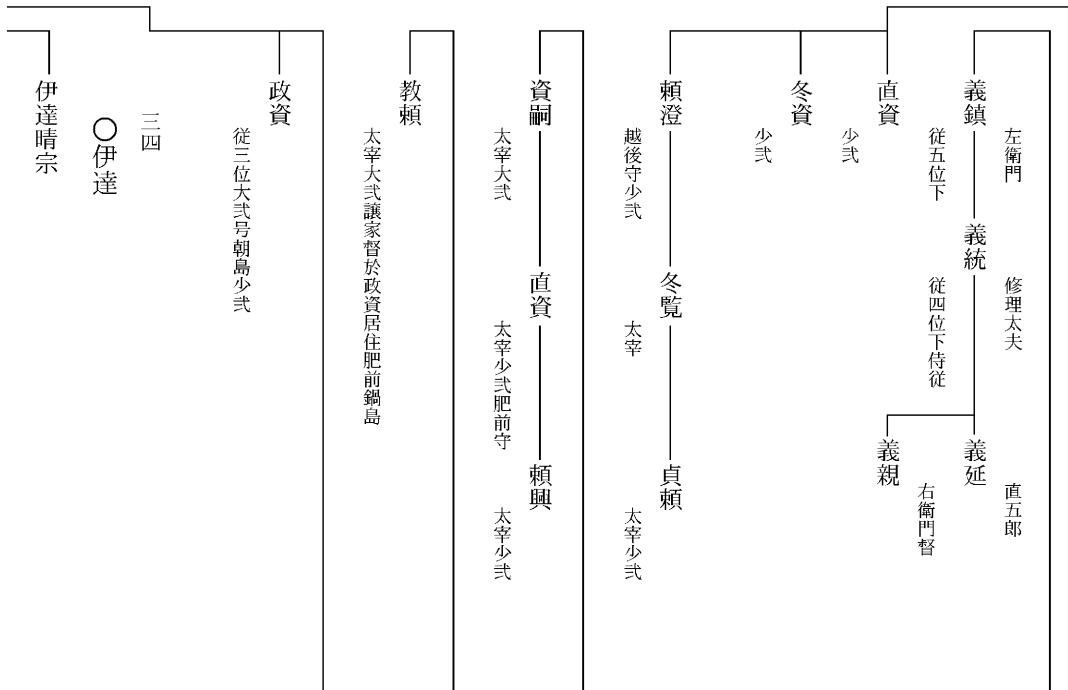
三十一

○東園家

時明院庶流園家十三代權大納言基宗二男







首到末多原苔野口、於是太宰少式冬尚賴龍造寺拒之、龍造寺大和守胤久・同山城守家兼・同和泉守家門父子乃一族都合千余騎馳向于興連、一万余兵相戰、於田手繩手直雖爭死未決、鍋島平左衛門清久・嫡男左近將監義房・次男同駿河守清房父子一族及石井党兵二百余、皆被赤熊橫擊突戰、敵兵敗潰、大内兵死者多、龍造寺擊獲於尚門・賴実、凡獲敵首八百余級、於少式冬尚屋形行褒賞、封同国河副莊一千町於龍造寺家兼、曰今度得大勝全存鍋島父子、於是家兼以清久次男清房娶龍造寺豐後守家純長女為孫婿、与本莊鄉數十町於清房、天文十四年乙巳春馬場肥前守賴周・其子六郎政員叛于龍造寺、通志於少式冬尚廻計欲滅龍造寺一族、于時鍋嶋再三諫龍造寺曰、非度賴周父子企謀反、家兼必不肯遂為馬場被亡龍造寺家族、是果鍋島清久父子素如察馬場謀計也、於是清久含憤扎馬場及少式冬尚自催本莊兵數百人、併龍造寺家兼・同豐前守胤榮之兵到筑後国相戰、小田入道覚派・其子政光雖危急、家兼及鍋島父子一族尽粉骨奮戰遂擊、捕小田父子凱旋於佐賀城、爾後家兼沒後胤榮通志於大内義隆滅於少式冬尚、同十七年戊申胤榮沒故以胤榮後室嫁龍造寺隆信為肥前・肥後・筑前・筑後・豊前五州太守、依鍋島之大功也、

義房

鍋島左近將監

清房

鍋島孫四郎駿河守從五位下

信房

鍋島豊前守母龍造寺豊後守家純女

直茂

彦法師平右衛門六郎左衛門鍋島加賀守從四位下初信生

天文七年生、少壯才智弁舌勝人、仕隆信、初為千葉胤達養子、胤達生実子、直茂歸家繼家督、改稱鍋島平右衛門、屬隆信、戰肥前国有馬顯戰功、隆信戰死、嫡子政家依為幼少、鍋島氏与其旧老保護之、太閤秀吉領天下之時、直茂携龍造寺高房駿河守上洛、拜謁秀吉、於是名声益彰、後高房病死故、依秀吉命以龍造寺政家令繼其遺領、賜肥前三十五万石、居住于佐賀城、天正十八年庚寅龍造寺政家依病身、讓家督於直茂、

一云、佐賀龍造寺政家領、慶長五鍋島直茂領之、

三五

○高橋氏

二男

△高橋右近太夫

七郎右衛門

日州県城主後改易

初而被召抱千石被下大崎地頭寄合被仰賦

養子

仙次郎

此面

縫殿

実中嶋氏後異変

七郎右衛門縫殿御家老 初七郎右衛門

仙次郎美子

△一 花田兵左衛門先祖泉城主高橋家に事へ、家老と成り禄千石

を食む、高橋家没落ノ後、花田氏も亦薩州へ来る、禄千石の証書于今家蔵するといふ、

三七

○戸田氏

願王院僧正

養子

△

戸田平次

傳五郎

僧正願二而被召抱江州膳所ノ人

江州人御用人被仰付

物奉行町奉行御用人

平次 吉貴公御隠居御側御小姓

実山岡斎宮久弟

三八

○羽田氏

△羽田宗古

御旗本也小身故江戸稲荷橋辺下屋敷引入居

孫助 城古

御馬廻

三才ヨリ盲目

光久公被成御抱御切米六十石被下六人賦二而

御側被召仕代々小番二入

不家督

助之進

数馬御小姓善左衛門兄

之養子廿石被下返上方

二差上十三石被下

弥次右衛門

善左衛門

実上原七郎左衛門男

十三石被下

三九

一 藤崎新兵衛 坂元千左衛門 白石弥左衛門 永田栄右衛門右先

祖江州者にて 忠久公初而御下国御供二而罷下、

藤崎・坂本ハ鹿兒島坂元村ノ内西原門へ、白石・永田ハ同村水

口門へ居住、百姓二罷成候、年頭歳暮五節旬御規式代々相勤来、

段々願之上、藤崎・坂元ハ元禄十七年、白石・永田ハ慶安五年

御城下士二被仰付候、

四十

一 梶原平左衛門 先祖代谷山宇宿村百姓二罷成居候処、鎌倉

御代差立候家筋、其上三郎太郎弘純、之ハ□□公ノ御母ナリ、

右式ノ訳を以 綱貴公御代御城下士に被召成候、

四十一

一 鎌田太郎右衛門 鎌田隼人二男家二子候、太郎右衛門政大御

目附被仰付、初テ家筋寄合に列す、  
 一 鎌田一藤太 鎌田家之胤流篠原氏之二男にて、数代御用人相  
 勤、御太刀進上ノ小番家ニ而候処、衛守政興大御目付御役被仰  
 付、初テ寄合ニ列す、

四十二

一 秩父家 氏久公御代、伊地知弾正季随初テ御国へ被召出、代々  
 罷在候処、当十太夫祖父十郎兵衛代ニ秩父家号御免也、代々御  
 太刀二種壹荷進上御前元服被仰付、

(頭注)「伊地知勘助」

「秩父十郎兵衛」

四三

△小倉武藏 — 隠岐 — 孫左衛門 — 四郎右衛門  
 仕勝久公

孫兵衛 — 喜右衛門 — 喜兵衛 — 孫九郎  
 四右衛門 武兵衛

四四

早世

早世

△執印丹波 — 丹波 — 休左衛門

家久公御側御小姓御船奉行執院職

代々小番

新番

丹下 — 休左衛門

四五

△川西二官

中華人來薩州業医師

看心  
 吉右衛門  
 長右衛門

曾五右衛門 — 仁右衛門 — 市右衛門 — 仁右衛門  
 平左衛門 — 甚右衛門 — 休右衛門 — 金右衛門  
 源太兵衛 — 越右衛門

次右衛門 — 千左衛門 — 孝助  
 実越右衛門二男

平左衛門 — 筑右衛門 — 茂右衛門 — 実弟  
 次左衛門 — 藤兵衛  
 藤兵衛 実平左衛門弟

四六

光久公被召仕

△穎川友官

大明国穎川人避乱來薩州立來福寺

傳右衛門  
 御勘定所中取  
 安兵衛

四七 隈城押 御勘定奉行 養子

△兒玉庄兵衛——金左衛門——小六——新蔵  
初隈城衆中後御家老奏者

四八 △星山仲次 子孫仲次

高麗人金海燒物細工二而義弘公御召抱

四九

七左衛門家ノ二男 郡奉行 御馬廻 早世

△田中孝左衛門——孝右衛門——孝右衛門——太郎右衛門

五十 筆者 養子 養子  
大口衆中御馬廻

△税所次兵衛——次郎右衛門——次郎右衛門

(五十二) 慶長三年從朝鮮国 代々御城下士

△下泰徳 被召列來薩州  
勝官 子孫アリ 幾朴千祥 與次右衛門  
陽官 光久公御側御小姓格

(五十二) 代々小番 光久公御近習役 金山奉行 山奉行

△細江弥右衛門——武左衛門——武右衛門

新番

弥右衛門

醫師光久公御召抱 御馬廻屋久島奉行金山奉行

昌庵——茂兵衛——与右衛門  
早世

五十三 △松元刑部 義久公へ御鑓進上庶流松本六郎左衛門毎々御国へ罷下候  
紀州人秀吉公九州下向以前上方筋御用被仰付從 義久公国光脇差拜領又

(五十四) 御馬廻 同 同

△荒武与市右衛門——喜右衛門——蔵右衛門

家祖 養子

弥八郎——彦太郎——鉄右衛門

表御小姓

五十五 備中殿家来 新番 御馬廻 出奔

△内田道圓——善太夫——八右衛門——善太夫 家断絶

醫師被召仕

五十六 馬越地頭 庄内戦死 御勘定奉行

△伊東右衛門——喜左衛門——肥前 御船奉行

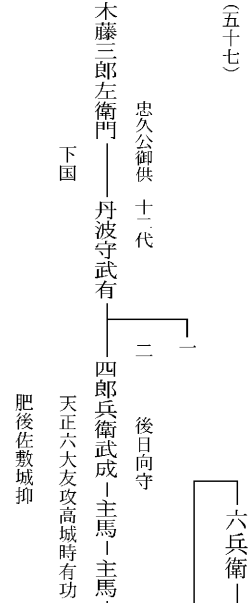
御船奉行

佐兵衛——源右衛門——源右衛門

御使番

源右衛門

(五十七)



木藤弥右衛門二男家 — 養子

六兵衛

△木藤覚兵衛 — 長左衛門

初国分土坂元氏横目役

休右衛門

郡奉行

休八郎 — 彦右衛門

側役 新番

五十八

△渤海高壽覚

医師

休兵衛

以御奉書長崎大通事被仰付隱元和尚來朝

巖有院公へ御目見之節休兵衛二も御目見被仰付

休右衛門

覚左衛門

休兵衛

横目

御徒目付

五十九

△伊勢平左衛門

子孫当平左衛門

左近

養子筋当弥八左衛門

六十

○梅田氏

源姓

△梅田九左衛門

初江戸 大玄院様御代鑓芸を以式百石二而被召抱罷下り代々小番  
弓進上被仰付物頭御役相勤ル

御鎖口使番

実全兵衛三男

本兵衛

大坂御留守居

後目書

九左衛門

八次郎

孝之丞

九左衛門

六一

○岸氏

△岸喜右衛門

江戸御旗本伊勢兵庫殿家来初而被召抱勤方無之、

養子

喜右衛門

御近習役町奉行

養子

喜右衛門

実岩切与五兵衛二男

平蔵 — 平八左衛門  
養子以後出生故為二男



六二

○矢野

騎馬

御馬廻

納殿

△自徳院日説——矢野大右衛門——次左衛門——權左衛門——

京都牢人御抱 仕家久公光久公

軍平

權左衛門

唯治清右衛門ハ此庶流也、

六十三

川田甚四郎庶流

△川田宗右衛門

曾右衛門

養母瀧瀬數年勤之功を以宗右衛門養子

弓進上被仰付

納殿

仲右衛門

仲太郎

実高岡土本田氏外城養子二而無之格式被仰付持高直二持越御馬廻

六十四

△今村政十郎事、長崎町人阿蘭陀大通事今村源右衛門嫡子也、

初外城衆中格二而被召抱、長崎二被召置、重豪公長崎御越

之砌御城下土被仰付、直二御城下へ屋敷被下、段々御役被仰

付也、

鹿兒島県史料集刊行一覽

集	史料名	執筆者	集	史料名	執筆者
1	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫	29	要用集(下)	芳即正
2	丁丑日誌(上)	村野守次	30	桂久武書翰	村野守次
	丁丑日誌(下)	芳即正	31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)	桐野利彦
3	薩摩国新田神社文書	五味克夫	32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)	宮下満郎
4	一向宗禁制関係資料	桃園恵真	33	江夏十郎関係文書	山田尚二
5	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光	34	示現流関係史料	宮下満郎
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真	35	樺山玄佐自記並雜録・樺山紹劍自記	晋哲哉
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光	36	島津世禄記	山田尚二
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度	原口虎雄	37	島津世家	島中彬
9	明治元年戊辰戦役関係資料	村野守次	38	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
10	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並に解説	増村宏	39	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
11	管窺愚考・雲遊雜記傳	五味克夫	40	薩摩学事一・鹿兒島県師範学校史料	宮下満郎
12	川上忠塞一流家譜	五味克夫・桑波田興	41	薩摩学事二・薩摩学事三	島中彬
13	本藩人物誌	桃園恵真	42	薩藩名勝志(その一)	吉元正幸
14	薩陽過去帳	宮下満郎	43	薩藩名勝志(その二)	吉元正幸
15	備忘抄・家久公御養子御願一見	五味克夫	44	薩藩名勝志(その三)	吉元正幸・塩満郁夫
16	鹿兒島縣地誌(上)	桐野利彦	45	鹿兒島県布達(上)	宮下満郎
17	鹿兒島縣地誌(下)	桐野利彦	46	鹿兒島県布達(下)	宮下満郎
18	薩藩舊土文章	五味克夫・桑波田興	47	伊地知権左衛門日記・先君掖官遺抄	堂満幸子・林匡
19	薩藩先公貴翰(乾)	五味克夫・桑波田興	48	伊本喜惣・薩藩雜録・雜書談集・舊薩藩寄附集上下	安藤保・徳永和喜
20	薩藩先公貴翰(坤)	五味克夫・桑波田興	49	西藩烈士干城録(一)	徳永和喜
21	小松帯刀傳・薩摩小松帯刀履歴・小松公之記事	芳即正	50	西藩烈士干城録(二)	徳永和喜
22	小松帯刀日記	芳即正	51	西藩烈士干城録(三)	徳永和喜
23	新修舊鹿兒島藩領国・郡・村・浦・町附(上)	原口虎雄	52	通昭録(一)	安藤保・清水勝
24	新修舊鹿兒島藩領国・郡・村・浦・町附(下)	原口虎雄	53	通昭録(二)	塩満郁夫・尾口義男
25	三州御治世要覽	宮下満郎・桑波田興	54	通昭録(三)	丹羽謙治
26	桂久武日記	村野守次	55	通昭録(四)	中山右尚
27	明赫記	宮下満郎	56	通昭録(五)	中野翠・尾口義男
28	要用集(上)	芳即正			

鹿兒島県史料集刊行委員会委員

五十音順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義 男 前始良市歴史民俗資料館長

金井 静 香 鹿兒島大学教授

五味 克 夫 鹿兒島大学名誉教授

塩 満 郁 夫 鹿兒島県歴史資料センター黎明館  
史料編纂委員

堂 満 幸 子 鹿兒島県歴史資料センター黎明館  
史料編纂委員

徳 永 和 喜 西郷南洲顕彰館長

中野 翠 元指宿高等学校長

中山 右 尚 鹿兒島大学名誉教授

丹羽 謙 治 鹿兒島大学教授

日隈 正 守 鹿兒島大学教授

三木 靖 鹿兒島国際大学短期大学部名誉教授

宮下 満 郎 鹿兒島県歴史資料センター黎明館  
史料編纂委員

「通昭録」(五)

(鹿兒島県史料集 第五十六集)

平成二十九年三月

発行

鹿兒島市城山町七一  
鹿兒島県立図書館  
電話 ○九九―二四―九五―  
FAX ○九九―二四―五八―二四

印刷

鹿兒島市小山田町七二七六一三  
協業組合ユニカラ  
電話 ○九九―二三八―五五―二五

